

松江市文化財調査報告書 第146集

八重垣神社竹矢線竹矢工区新世紀道路(生活関連)事業に伴う

# 出雲国分寺跡発掘調査報告書

平成24（2012）年3月

松　江　市　教　育　委　員　会  
財団法人 松江市教育文化振興事業団

松江市文化財調査報告書 第146集

八重垣神社竹矢線竹矢工区新世紀道路(生活関連)事業に伴う

# 出雲国分寺跡発掘調査報告書

平成24（2012）年3月

松　江　市　教　育　委　員　会  
財団法人 松江市教育文化振興事業団

## 例　　言

1. 本書は、八重垣神社竹矢線竹矢工区新世紀道路（生活関連）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書には、平成22年度に実施した出雲国分寺跡発掘調査、平成23年度に実施した江分遺跡発掘調査、平成22年度～平成23年度に実施した出雲国分寺跡工事立会調査の成果報告が含まれている。
3. 上記の2. 江分遺跡については、平成22年度中の試掘調査では出雲国分寺跡と関連が深い遺物が出土したことより、当初は出雲国分寺跡の広がりを示す遺跡であると考えていたが、平成23年度の本発掘調査の結果、出雲国分寺跡との関連より中竹矢遺跡との関連が深い遺構・遺物が出土したことより、当地の旧字名をとって江分遺跡とし、新しい遺跡として登録した。
4. 各調査の名称、所在地、調査期間、開発面積、調査期間、調査組織は下記のとおりである。

### 【平成22年度出雲国分寺跡発掘調査】

- (1) 本調査地の名称・所在は以下のとおりである。

(名 称) 出雲国分寺跡

(所在地) 島根県松江市竹矢町字郡免369-4

- (2) 発掘調査の期間

平成23年3月8日～平成23年3月18日

- (3) 開発面積及び調査面積

開発面積 210m<sup>2</sup>

調査面積 43m<sup>2</sup>

- (4) 調査組織

依頼者 島根県松江県土整備事務所

主体者 松江市教育委員会

事務局 松江市教育委員会

教 育 長 福島 律子

　　〃 文化財課 課 長 錦織 慶樹

　　〃 調査係 係 長 赤澤 秀則

　　〃 〃 主 任 後藤 哲男

調査指導 島根県教育庁 文化財課 企 画 員 池淵 俊一

　　島根大学法文学部 教 授 大橋 泰夫

　　出雲市文化環境部 学芸調整官 花谷 浩

実施者 財団法人 松江市教育文化振興事業団 理 事 長 松浦 正敬

　　〃 埋蔵文化財課 課 長 大西 誠

　　〃 調査係 係 長 中尾 秀信

　　〃 〃 専門企画員 門脇 誠也

　　〃 〃 調査員 石川 崇（調査担当者）

　　〃 〃 調査補助員 宇津 直樹

【江分遺跡発掘調査】

(1) 本調査地の名称・所在は以下のとおりである。

(名 称) 江分遺跡

(所在地) 島根県松江市竹矢町字郷分526-4、同527-3、同529-5

(2) 発掘調査の期間

平成23年4月18日～平成23年7月26日

(3) 開発面積及び調査面積

開発面積 2,046m<sup>2</sup>

調査面積 340m<sup>2</sup>

(4) 調査組織

依頼者 島根県松江県土整備事務所

主体者 松江市教育委員会

事務局	松江市教育委員会	教育長	福島 律子
"	文化財課	課長	錦織 慶樹
"	" 調査係	係長	赤澤 秀則
"	" "	主幹	昌子 寛光
"	" "	専門企画員	曾田 健
調査指導	島根県教育庁	調整監	廣江 耕史
"	"	文化財保護主任	松尾 充晶
島根大学法文学部		教授	大橋 泰夫
島根大学総合理工学部		准教授	酒井 哲弥
出雲市文化環境部		学芸調整官	花谷 浩
実施者	財団法人 松江市教育文化振興事業団	理事長	松浦 正敬
"	埋蔵文化財課	課長	藤原 博
"	" 調査係	係長	中尾 秀信
"	" "	専門企画員	後藤 哲男
"	" "	調査員	江川 幸子 (調査担当者)
"	" "	調査補助員	渡邊 真二

【平成22、23年度出雲国分寺跡工事立会調査】

(1) 本調査地の名称・所在は以下のとおりである。

(名 称) 出雲国分寺跡

(所在地) 島根県松江市竹矢町字クケン田453-11他

(2) 工事立会調査の期間

平成22年12月21日～平成23年4月23日

(3) 調査対策範囲

延長 220m

(4) 調査組織

依頼者 島根県松江県土整備事務所

主体者 松江市教育委員会

事務局 松江市教育委員会

教育長 福島 律子

〃 文化財課 課長 錦織 慶樹

実施者 〃 調査係 係長 赤澤 秀則

〃 〃 〃〃 主幹 昌子 寛光

〃 〃 〃〃 主任 川上 昭一

〃 〃 〃〃 主任 後藤 哲男

〃 〃 〃〃 副主任 佐々木啓祐

〃 〃 〃〃 副主任 徳永 隆

〃 〃 〃〃 主事 日野 一輝

〃 〃 〃〃 嘱託員 金森みのり

〃 〃 〃〃 〃 高橋真紀子

〃 〃 〃〃 〃 宮本亜希子

〃 〃 〃〃 〃 三島 真之

調査指導 島根県教育庁

文化財課

調整監 廣江 耕史

文化財保護主任 松尾 充晶

7. 調査に携わった発掘作業員（50音順）

（平成22年度）岩成博美、上田孝子、加藤恵治、小松原茂、松尾稔、山本嘉男

（平成23年度）今村邦子、今村ひろ子、今村正人、角田ミヤ子、秦岡富士子、細田信子

細田勇治、吉岡永子、吉岡啓三郎

8. 本書に記載した遺物の復元・実測・浄書・遺構の浄書に携わった遺物整理員（50音順）

（平成23年度）金坂昇、是田和美、坂本玲子、瀬川恭子

9. 調査及び報告書の作成にあたっては、以下の機関や方々から多大なご指導、ご教示、ご協力を  
いただいた。記して感謝の意を表したい。（50音順・敬称略）

菅井武夫、菅井秀美、中竹矢町内会、中竹矢水利組合、西尾克己（島根県古代文化センター）

仁島克彦、平石充（出雲歴史民俗博物館）、松浦豊

10. 本書に掲載した平成22年度の現場写真は石川、松江市教育委員会各担当者が撮影し、平成23年  
度は江川が撮影した。遺物写真は渡邊が撮影、レイアウトした。

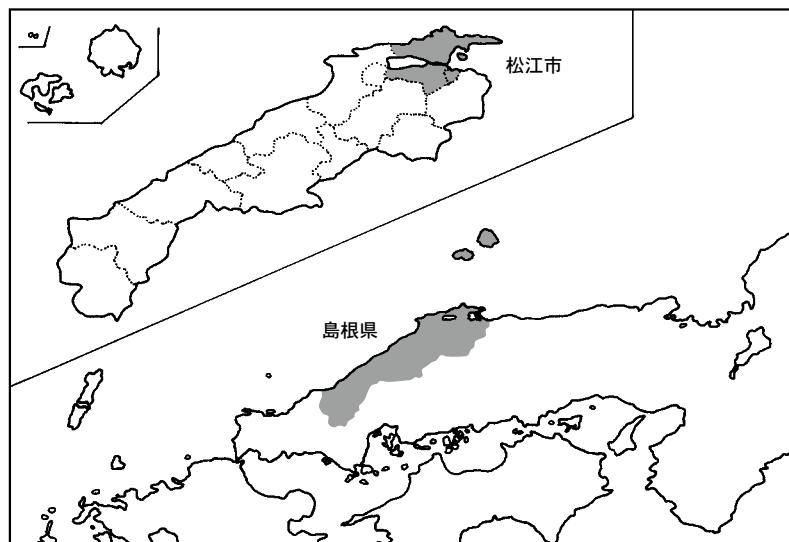
11. 本書の執筆は、松江市教育委員会文化財課の協力を得て、第2章を渡邊、その他を江川がおこ  
ない、編集は江川がおこなった。

12. 本書における土器区分・分類・編年は以下を参照した。

（弥生土器）松本岩雄「出雲・隱岐地域」『弥生土器の様式と編年 山陰編』木耳社

（須恵器）岡田裕之・土器検討グループ「出雲地域における古代須恵器の編年」『出雲国の  
形成と国府成立の研究』島根古代文化センター 2010年

13. 本書における方位は公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第Ⅲ系の値である。またレベル値は海拔標高を示す。
14. 本書における遺構記号は、  
SP : 小土坑 SD : 溝 SK : 土坑 SX : 性格不明遺構  
とする。
15. 本書における遺物実測図の断面は、弥生土器と土師器は空白、須恵器は黒塗り、石器と瓦は斜線とした。
16. 出土遺物、実測図及び写真等の資料は、松江市教育委員会において保管している。



島根県・松江市位置図

# 目 次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 位置と環境	3
第3章 調査の報告	
1. 平成22年度出雲国分寺跡発掘調査	5
第1節 調査の方法と経過	5
第2節 調査の報告	6
第3節 総括	9
2. 江分 <sup>ごうわけ</sup> 遺跡発掘調査	10
第1節 調査の方法と経過	10
第2節 調査の報告	12
第3節 総括	40
3. 平成22・23年度出雲国分寺跡工事立会調査	41
第1節 調査の方法と経過	41
第2節 調査の報告	41
第3節 総括	50
第4章 調査成果から復元する出雲国分寺跡周辺の地形	52
遺物観察表	54
図版	
報告書抄録	

## 挿図目次

島根県・松江市位置図	
第1図 出雲国分寺跡位置図	1
第2図 調査地位置図	2
第3図 出雲国分寺跡と周辺の遺跡 (S=1/25000)	4
【平成22年度出雲国分寺跡発掘調査】	
第4図 調査区配置図	5
第5図 1・2区土層断面図	6
第6図 1区出土遺物実測図	7
第7図 2区出土遺物実測図	8
【江分遺跡発掘調査】	
第8図 江分遺跡位置図	10
第9図 調査区設定図	12
第10図 1区調査成果図(遺構配置図)と土層断面図	13～14
第11図 地山検出時出土遺物実測図	15
第12図 SP01平面図・土層断面図	16
第13図 SP01出土石器実測図	16
第14図 SP02～04平面図・土層断面図	16
第15図 SK05平面図・土層断面図	17
第16図 SK05出土遺物実測図	17
第17図 SK06平面図・土層断面図	17
第18図 SK06出土遺物実測図	17
第19図 SK07～SK14平面図・土層断面図	19
第20図 SK15～SK18平面図・土層断面図	20
第21図 1区遺物包含層出土遺物実測図(土師器)	21
第22図 1区遺物包含層出土遺物実測図(須恵器)	22
第23図 1区遺物包含層出土遺物実測図(陶磁器)	23
第24図 1区遺物包含層出土遺物実測図(土製品)	23
第25図 1区遺物包含層出土遺物実測図(石器)	23
第26図 1区遺物包含層出土遺物実測図(瓦・埴)	24
第27図 2区調査成果図	25
第28図 2区土層断面図	26
第29図 2区出土遺物実測図	27
第30図 3区調査成果図	28
第31図 3区土層断面図	29～30
第32図 3-K区遺物出土状況	31
第33図 3-K区地山直上出土遺物実測図	32
第34図 3-A・B区出土遺物実測図	33
第35図 3-D区出土遺物実測図	33
第36図 3-E区出土遺物実測図	33
第37図 3-F区出土遺物実測図	34
第38図 3-G区出土遺物実測図	34
第39図 3-H区出土遺物実測図(土器類)	35
第40図 3-H区出土遺物実測図(瓦類)	36
第41図 3-I区出土遺物実測図	37
第42図 3-J区出土遺物実測図	38
第43図 3-K区出土遺物実測図	39
【平成22、23年度工事立会調査】	
第44図 本調査実施範囲と工事立会調査範囲	41
第45図 瓦敷遺構A、B地点とE地点	42
第46図 A地点の瓦敷遺構実測図	43
第47図 B地点の瓦敷遺構実測図	44
第48図 B地点瓦敷遺構の瓦実測図	44
第49図 C地点とD地点の位置図	45
第50図 C地点で検出した遺構の平面図、土層断面図	46
第51図 C地点出土遺物実測図	46
第52図 D地点で検出したピット群と土層断面図	47
第53図 D地点で出土した遺物実測図	48
第54図 E地点土層図	49
第55図 E地点出土遺物実測図	49
第56図 南門と瓦敷遺構	51
第57図 国分寺周辺の地山標高と国分寺造成土の広がり	53

## 図版目次

### 【平成22年度出雲国分寺跡発掘調査】

- 図版1 (上) 調査前風景(東から)  
図版2 (左上) 1区完掘状況(東から)  
(下左) 1区土層堆積状況(部分)

### 【江分遺跡発掘調査】

- 図版3 (上) 調査前風景(西から)  
図版4 (上) 1区東端遺構群(南西から)  
図版5 (上) SK05床面遺物出土状況  
図版6 (上) 2区完掘状況(西から)  
図版7 (上) 3-F区土層堆積状況  
図版8 (上) 3-H区土層堆積状況  
図版9 (上) 3-K区遺物出土状況(西から)  
図版10

### 【平成22、23年度出雲国分寺跡工事立会調査】

- 図版11 (上) A地点瓦敷遺構(南東から)  
図版12～16 遺物写真

- (下) 完掘状況(西から)  
(上右) 2区完掘状況(西から)  
(下右) 2区土層堆積状況(部分)

- (下) 1区完掘状況(東から)  
(下) 1区土層堆積状況(西から)  
(下) SK06遺物出土状況  
(下) 2区土層堆積状況(西から)  
(下) 3-H区調査風景  
(下) 3-I・J区土層堆積状況  
(下) 3-K区出土遺物近景

- (下) B地点瓦敷遺構(北から)

## 第1章 調査に至る経緯

一般県道八重垣神社竹矢線竹矢工区（拡幅）工事は平成21年度から開始されているが、工事区域は東側が県道と市道手間春日線との交差点、西側が県道と市道国分寺3号線との交差点までであった。

島根県松江県土整備事務所はこの改良（拡幅）工事の続きとして、東側の県道と市道手間春日線との交差点から県道と国道9号線バイパスまでの区域の工事を計画され、平成22年度10月1日付、松整第2885号で松江市教育委員会宛に埋蔵文化財の分布・試掘・確認調査依頼書が提出された。

この依頼書を受けて当市教育委員会と松江県土整備事務所は、10月25日に現地踏査をおこなった結果、国史跡出雲国分寺跡の隣接地であると共に平成21年度発掘調査で伽藍域の東側と南側の区画溝を確認したことから、当市教育委員会は松江県土整備事務所に改良工事予定地内の試掘調査が必要であると回答し、平成23年2月22日に計画地内にトレーナーを2本設定して試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、改良工事予定地内の東側に設定したT-1調査区では地表面より約0.6m下で黄色粘土の地山を検出したが遺構は確認できなかった。地山直上の暗灰褐色土中から土師器片、須恵器の高台付壺が出土した。予定地内の西側に設定したT-2調査区では地山は検出できなかったが、旧表土中、その直下の層（灰色粘土）、更に下の層（灰白色粘土）中から古代の瓦片、土師器片、須恵器片が大量に出土した。

のことより、2ヶ所の調査区では遺構は確認しなかったが史跡出雲国分寺跡に関連する遺物を確認したこと、また、改良工事予定地が史跡国分寺跡、史跡国分寺跡及び出雲国分尼寺跡出土瓦の瓦窯跡であることが確認された中竹矢遺跡に隣接する立地条件等から、出雲国分寺跡の寺域が広がると判



第1図 出雲国分寺跡位置図

断し何らかの発掘調査が必要であることと文化財保護法第94条の手続きが必要となる旨を平成23年2月25日付、松教文505号で回答した。

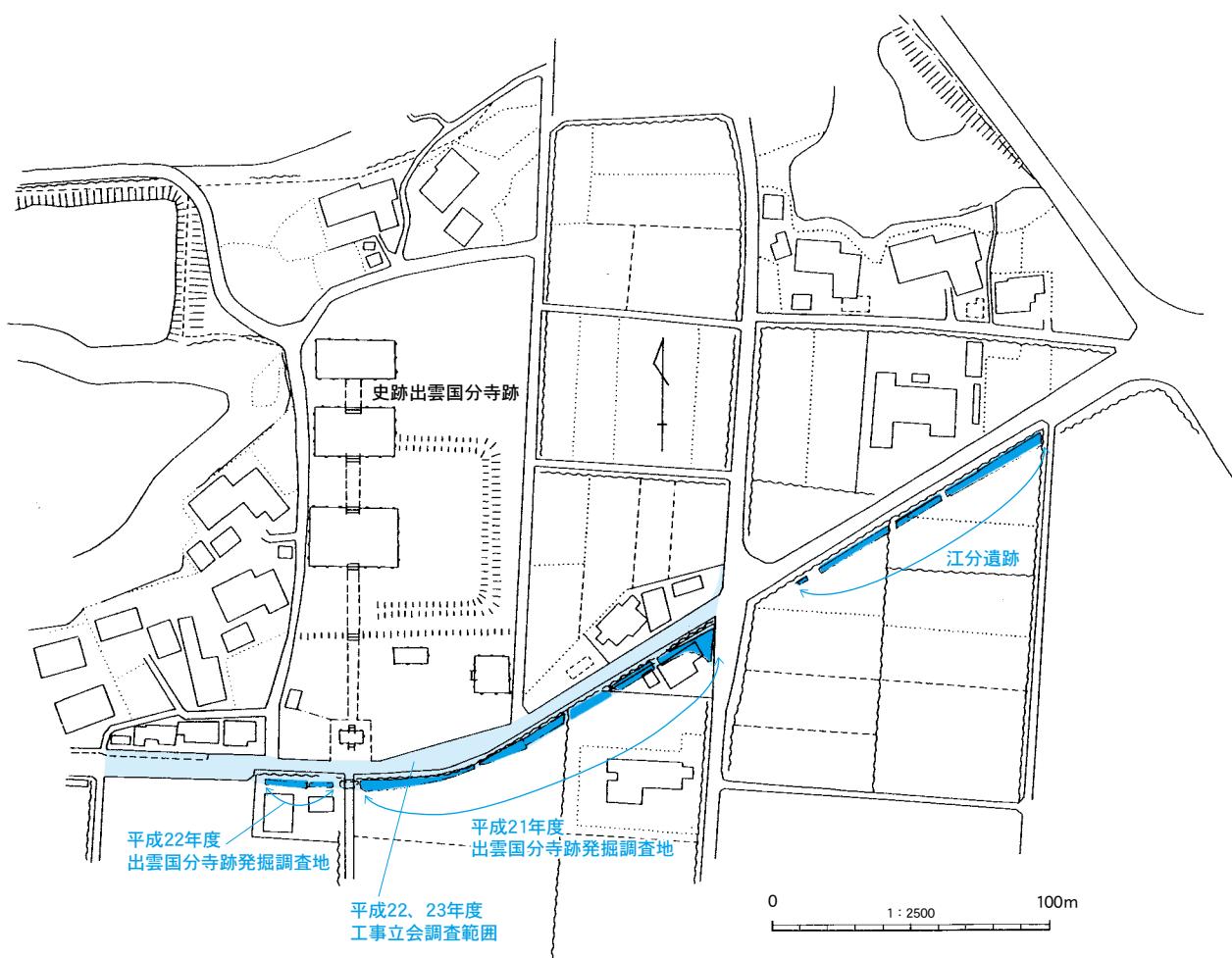
その後、当市教育委員会と松江県土整備事務所との協議の結果、発掘調査は平成23年度の上半期に実施することになり、平成23年3月11日付、松整第4670号で発掘調査依頼書が、各々提出された。

よって、当市教育委員会は全面発掘調査を財団法人松江市教育文化振興事業団に委託し、平成23年4月18日から同年7月26日までの間で実施した。

なお、試掘調査時は史跡出雲国分寺跡との関連が強く同国分寺跡の寺域の広がりを想定したが、発掘調査の結果同国分寺跡の寺域の広がりよりは中竹矢遺跡で検出された遺構の様相に近く、遺跡名は新たに字名を取って「江分遺跡」と命名することにする。

一方、史跡出雲国分寺跡の南門跡の南側の県道拡幅予定地について発掘調査が可能となったため、急遽財団法人松江市教育文化振興事業団に委託し、平成23年3月8日から同年3月18日までの間で実施した。

また、平成21年度に発掘調査実施済の県道拡幅工事に係る一連の工事立会調査を平成22年12月21日から平成23年4月23日までの間、計41日間実施した。



第2図 調査地位置図

## 第2章 遺跡の位置と歴史的環境

平成22年度出雲国分寺跡発掘調査地①は、島根県松江市竹矢町字郡免369-4、平成22・23年度出雲国分寺跡工事立会調査地は、島根県松江市竹矢町字クケン田453-11他に所在し、江分遺跡②は、島根県松江市竹矢町字郷分526-4他に所在する。いずれも史跡出雲国分寺跡（3）の南側を通る一般県道八重垣神社竹矢線上とその拡幅予定地である。（第3図）

調査地の南には、意宇川により発達した沖積平野（意宇平野）が広がっていて平野とその周辺には、多くの遺跡が存在する。縄文時代の遺跡としては、才塚遺跡（7）・間内遺跡（8）・法華寺前遺跡（57）・旧竹矢小学校校庭遺跡（59）などが知られている。

弥生時代の遺跡としては、銅鐸形土製品が出土した布田遺跡（58）や弥生時代後期の水田跡が確認された上小紋遺跡（9）、向小紋遺跡（10）、夫敷遺跡（60）などがある。この時期には既に平野に水田が広がっていた事が窺える。

古墳時代には、平野周辺の丘陵に多くの古墳が築かれるようになり、廻田1号墳（6）・大庭鶏塚（30）・山代二子塚（31）・山代方墳（33）などの大型古墳が知られている。この他、大小の古墳、横穴墓が多数築かれており、その背景には、意宇平野での稻作や中海の水産物による豊かな経済基盤があつたと考えられる。

また、意宇平野の西側の丘陵に岡田山古墳群（20）があり、1号墳からは「額田部臣」の銘文入りの円頭大刀が出土していて大和朝廷との深い繋がりを感じさせる。

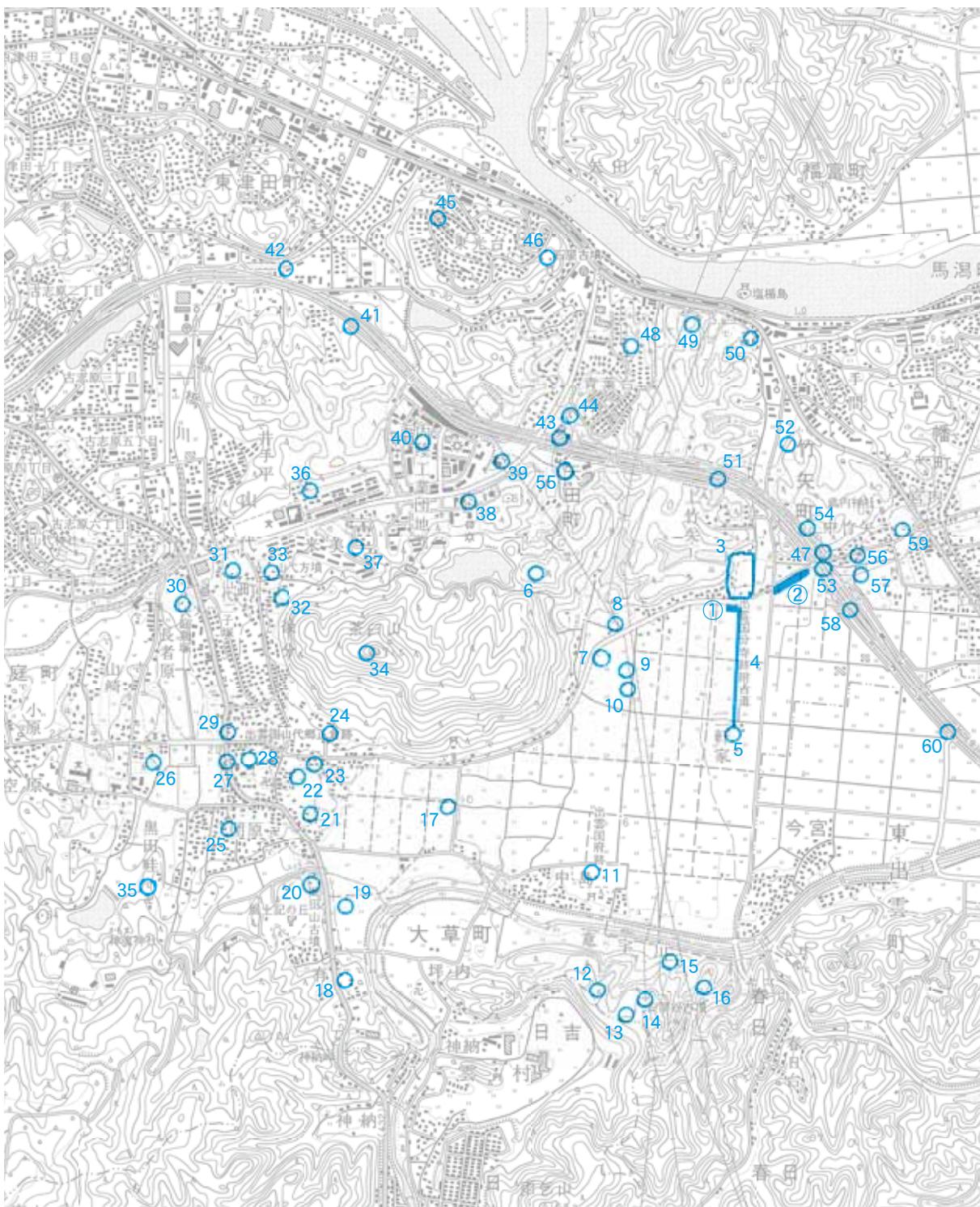
奈良時代の意宇平野には国府が置かれ、出雲国の政治の中心であった。出雲国府跡（11）は、平野の南側に位置し西側丘陵には、出雲国山代郷正倉跡（29）が確認されている。天平5年（733）年に編纂された「出雲国風土記」には、これら以外に驛家・軍團などが見られる。また、同風土記には仏教寺院も数多く記されていて、出雲国分寺建立以前から仏教が盛んであったことが窺える。代表的な寺院として北新造院（来美廃寺）（36）・南新造院（四王寺跡）（24）などがあり、何れもこの地の有力者によって建立されたと考えられている。

出雲国分寺跡は、平野の北側のなだらかな小丘陵斜面に位置し、出雲国分尼寺跡（56）は出雲国分寺の東側約500mに確認されている。出雲国分尼寺跡の西側丘陵南面には、両寺院に瓦を供給していたと見られる出雲国分寺瓦窯跡（47）が見つかっている。

平野部には、正序を中心とする官庁街が造られ、周辺には寺院が建てられ有力豪族達が居館を構えていたと考えられる。

中世の遺跡としては茶臼山城跡（34）、黒田館跡（28）、正林寺遺跡（35）、社日古墳群（54）の五輪塔群などが挙げられる。文献上からは、元久2年（1205）に惣社神官と大草郷地頭助光との争いがあり、建保3年（1215）に大庭・田尻の保において守護の乱、文永8年（1271）ごろ山代郷に地頭那須四郎兵衛尉が居住していた事などが分かっている。

その後、尼子氏が台頭してくると政治の中心は広瀬に、幕藩体制以降は宍道湖東端と大橋川周辺へと移って行った。



① 平成22年度 出雲国分寺跡 発掘調査地	13 西百塚山古墳群 14 古天神古墳 15 天満谷遺跡 16 安倍谷古墳群 3 史跡出雲国分寺跡 (横穴群)	25 黒田畠遺跡 26 東淵寺古墳 27 下黒田遺跡 28 黒田館跡 29 出雲国山代郷 4 古道(天平古道) 5 三軒家遺跡 6 回田古墳群 7 才塚遺跡 8 間内遺跡 9 上小紋遺跡 10 向小紋遺跡 11 出雲国府跡 12 東百塚山古墳群	37 狐谷横穴群 38 十王免横穴群 39 寺山小田遺跡 40 来美墳墓 41 勝負遺跡 42 石台遺跡 43 矢田平所遺跡 44 間内越墳墓群 45 東光台古墳 46 石屋古墳 47 出雲国分寺瓦窯跡 48 井ノ奥古墳群 49 手間古墳 50 岩舟古墳	51 才ノ峠遺跡 52 長峯遺跡 53 中竹矢遺跡 54 社日古墳群 55 平所遺跡 56 出雲国分尼寺跡 57 法華寺前遺跡 58 布田遺跡 59 旧竹矢小学校 校庭遺跡 60 夫敷遺跡
② 江分遺跡		(四王寺跡)	(山代郷北新造院)	

第3図 出雲国分寺跡と周辺の遺跡 (S=1/25000)

## 第3章 調査の報告

### 1. 平成22年度出雲国分寺跡発掘調査

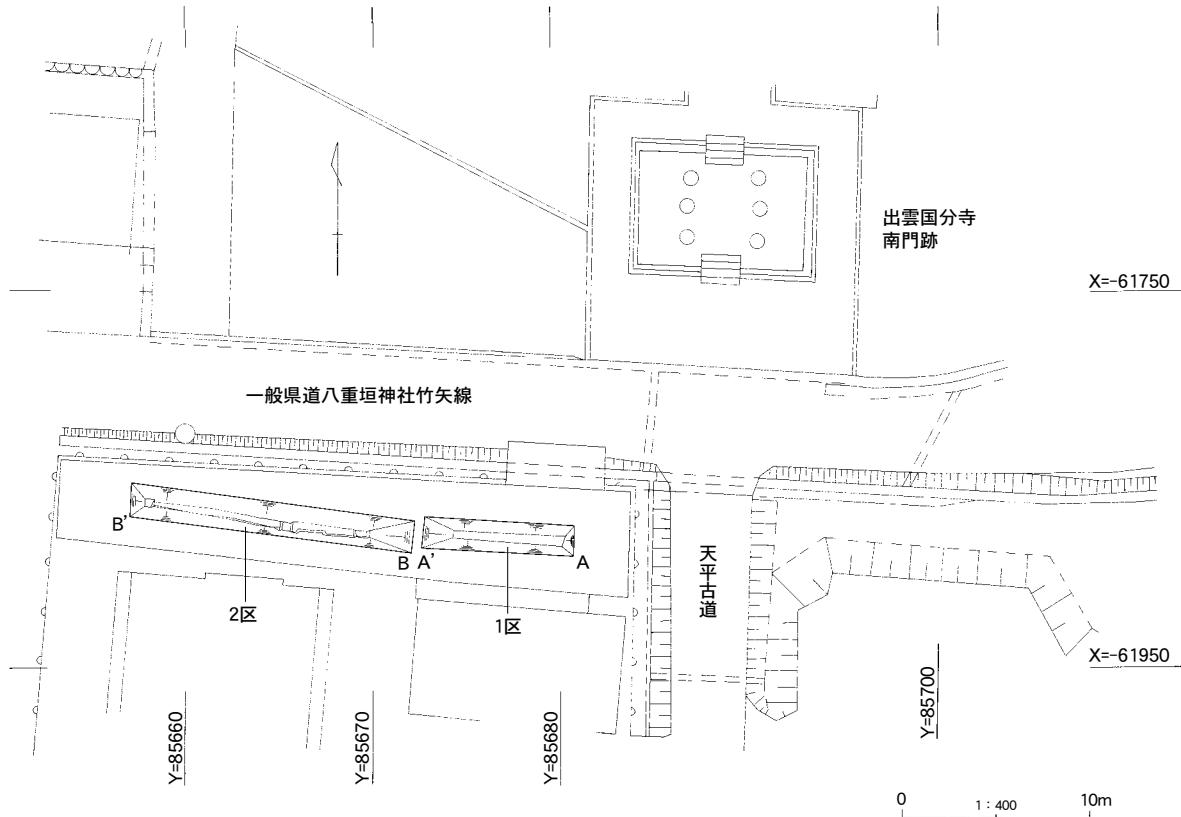
#### 第1節 調査の方法と経過

調査地は、出雲国分寺南門跡から県道八重垣神社竹矢線を挟んでほぼ正面から南西に位置し、調査区の東は天平古道に接している（第4図）。出雲国分寺グリッドではKB8K-399～KB8K-439にあたる<sup>(1)</sup>。

調査範囲は南北2.0m、東西29.0mと極めて狭長である。調査地内には南北方向の下水管が存在して調査地が二分されたため、結果的に2カ所のトレーニング調査となり、東側より1区、2区と称した。1区は上端で南北1.7m×東西8.0m、2区は上端で南北1.7m×東西15.0mを測る。1、2区とも周囲を安全勾配で掘り下げると断面がV字状となる。平面調査はほとんどできないと考えられたため、土層観察で遺構を検討することにした。

発掘調査は3月8日に開始した。旧耕作土上には宅地造成に伴う厚さ1mの客土層が存在したので、まずは重機で客土層の除去をおこなった。11日に出雲国分寺グリッドを設定し、旧耕作土層以下を人力で掘り下げ、出土遺物をグリッドと土層にしたがって取り上げた。

1区は地山直上まで掘り下げて、土層堆積状況を観察した。2区は遺跡保護を優先させて、掘削は工事深度までとする予定であった。しかし、地山と国分寺造成土の関連を観察するため、調査区の両端と中央部で地山までの坪掘りを実施した。3月19日に埋め戻しを完了し、現地調査を終了した。



第4図 調査区配置図

## 第2節 調査の報告

(1) 1区について

### 【層序】(第5図)

上から現代の盛土(1)、暗灰色粘質土(3)、灰褐色粘質土(4)、濁灰褐色粘質土(5)、暗灰褐色粘質土(6)、白斑灰色粘質土(7)、白斑濃灰色粘質土(8)、青灰色粘土(10)である。

1層の厚さは1mあり、標高4.8mで近現代の耕作土(3)上面に達する。3層からは古代瓦に混じってビニール等の現代遺物が出土した。4、5層中からは現代遺物が出土せず、瓦片と白磁片1点が出土した。4層には鉄分の沈着が見られたので、水田耕作の床土であったと思われる。5層は4層に近似した層であるが、若干土色と鉄分の含有量に違いがみられる。6層からは比較的多くの瓦片が出土した。

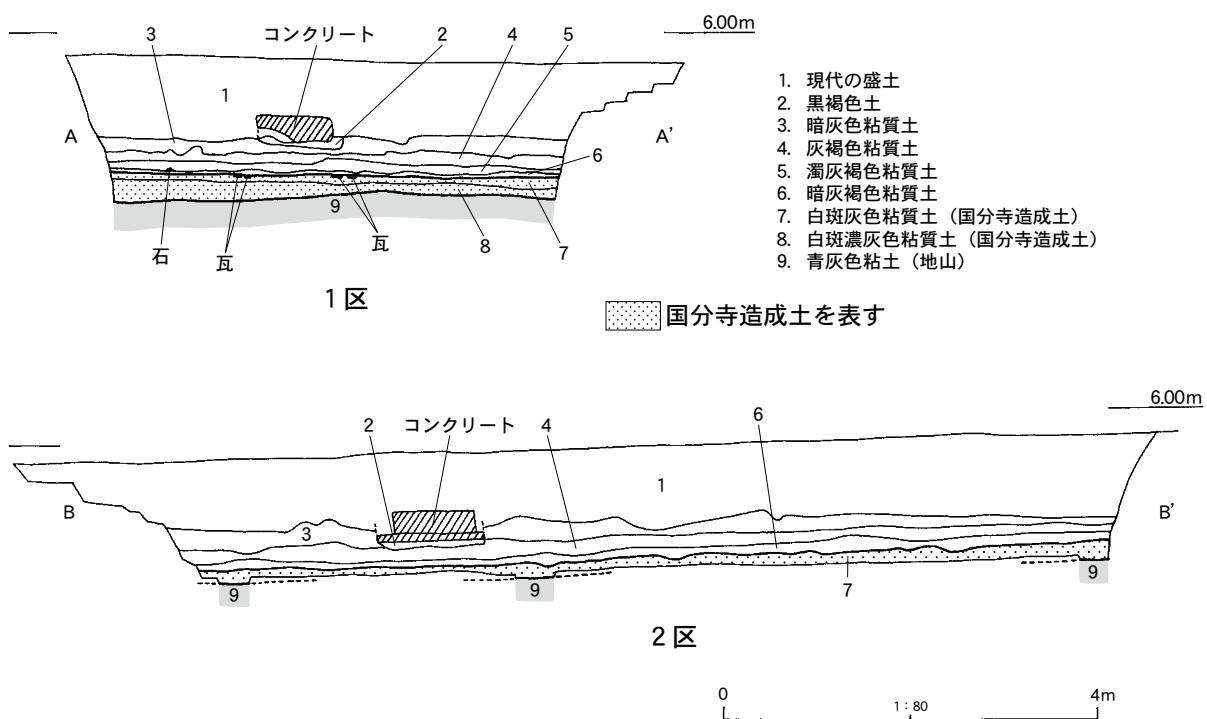
6層の下に位置する7、8層は、国分寺建立に際して土地造成がおこなわれた時の造成土と認識されている。具体的には灰色粘質土と地山の白色粘土が混じりあった層で、白色粘土の粘性が高いため、白色粘土が斑状に入った灰色粘質土となっており、ここでは2層に分類できる。国分寺造成土(7)上面は標高4.4～4.5mを測り、直上面からは風化した瓦片が出土した。国分寺造成土の厚さは2層合わせて40cm前後であった。8層の下にある青灰色粘土(9)は自然堆積の地山である。地山の上面標高は4.00mであった。

### 【遺物】(第6図)

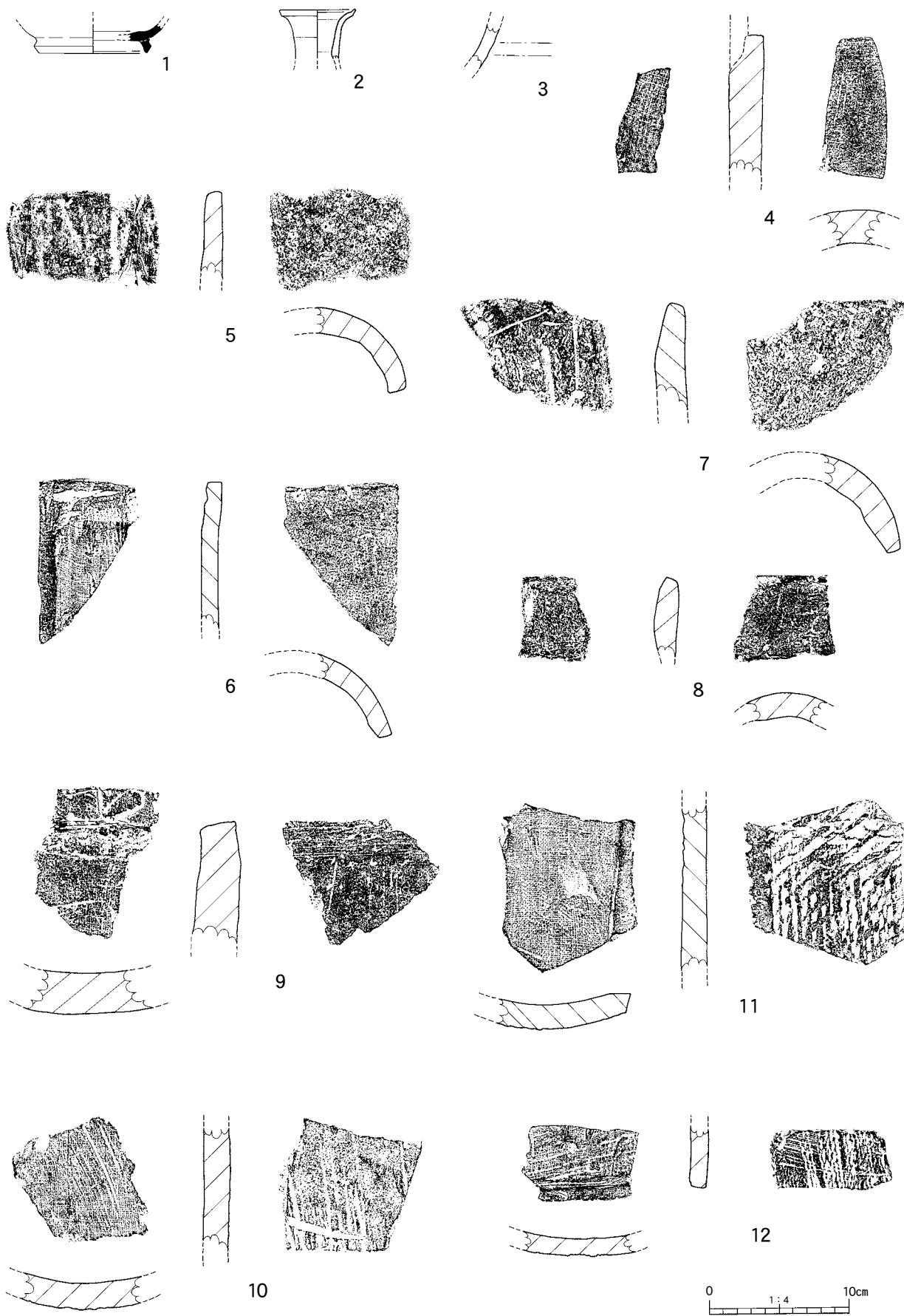
遺物は主として6層から出土した。

1は須恵器の壺である。底径7.7cmを測る。2は土師質の壺、口縁部である。時期は不明だが、近世以降と思われる。口径5.3cmを測る。3は白磁碗で、釉が薄い12世紀前後の中国産である。

5～8は丸瓦の破片である。外面は滑らかなナデ、内面は布目压痕、端部はケズリで調整されてい



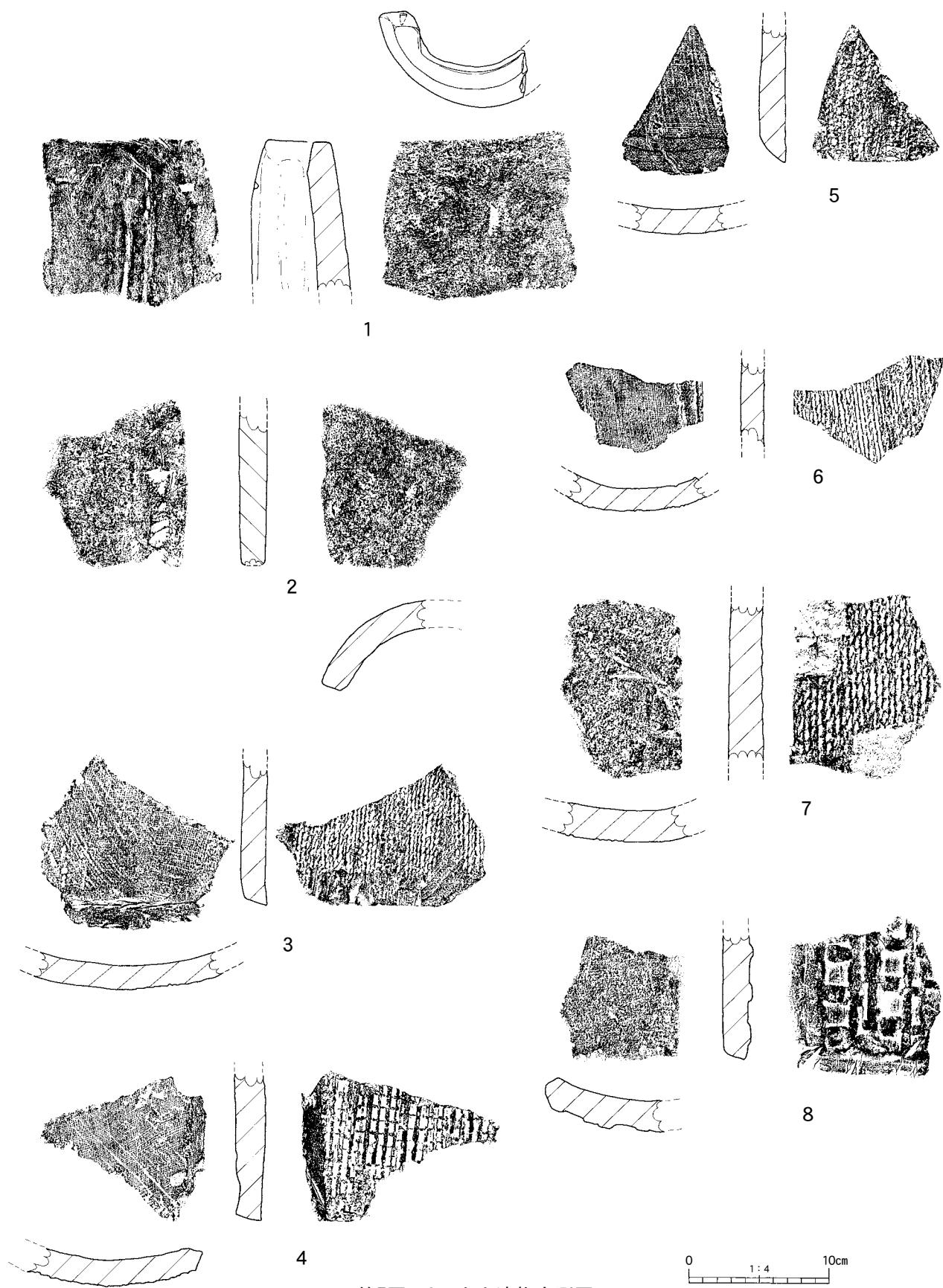
第5図 1・2区土層断面図



第6図 1区出土遺物実測図

る。4、8は玉縁の丸瓦で、8は基部にあたる。

9～12は平瓦の破片である。外面は布目压痕、内面はタタキ、端部はケズリで調整されている（2～



第7図 2区出土遺物実測図

7)。9は断面が厚く、裏面がケズリで調整されているので軒平瓦の基部の可能性がある。

## (2) 2区について

### 【層序】(第5図)

上から現代の盛土(1)、暗灰色粘質土(3)、灰褐色粘質土(4)、濁灰褐色粘質土(5)、白斑灰色粘質土(7)、青灰色粘土(9)である。

1層の厚さは1mあり、標高4.8mで近現代の耕作土、暗灰色粘質土(3)の上面に達する。3層の下の4、5層中からは現代遺物が出土せず、瓦片のみ出土した。5層には鉄分の沈着が見られたため、水田の床土であった可能性が高い。風化した瓦片が少々出土した。

5層の下は白斑青灰色粘質土層(7)で、国分寺造成土である。国分寺造成土(7)上面は標高4.4～4.5m測り、造成土の厚さは20～30cmを測る。7層の下にある青灰色粘土(9)は、出雲国分寺周辺に存在する自然堆積層の地山である。地山の上面は西に向かって緩やかに上がっており、標高は4.1～4.2mであった。

### 【遺物】(第7図)

1、2は丸瓦の破片である。外面は滑らかなナデ、内面は布目压痕、端部はケズリで調整されている。1は基部で、2は端部である。

3～8は平瓦である。外面は布目压痕、内面はタタキ、端部はケズリで調整されている。

## 第3節 総括

出雲国分寺南門前の、天平古道から西方約23mについて発掘調査を実施した。

その結果、近現代の耕作土ほぼ直下で国分寺造成土を確認することができた。地山レベルが低い1区では厚さ40cmの造成土があり、国分寺造成土の上面標高は4.4～4.5mであった。

平成11年度の天平古道発掘調査で検出した国分寺造成土の上面標高は4.53mと報告されており<sup>(2)</sup>、ほぼ同じ値なので、南門前では天平古道の範囲を越えて同じ標高の地表面が広がっていたことがわかった。ただし、天平古道より東は地下の搅乱が著しいため確認できていない<sup>(3)</sup>。

昭和45～46年の史跡整備に伴う発掘調査で、南門の南辺中央部に幅3m、1.5mの張り出し部が確認されており、それは階段の基礎地業と推定されている<sup>(4)</sup>。南門北側に広がる伽藍域の標高が5.6m、南門南側の今回の調査地の国分寺造成土上面が4.5m、階段の存在を想定すると、国分寺南門を境に1.1mの高低差が存在することは至極自然なことと考えられる。

註(1) 出雲国分寺グリッドとは、今後の調査に混乱を生じさせないことを目的として、出雲国分寺跡から国分尼寺跡までを2km圏内を最小3mグリッドで網羅したものである。

世界測地系に準拠した公共座標第III系のX=-61000とY=85000の交点を基点とし、東と南に90mピッチで90m×90mを大グリッドと設定し、大グリッドには東へ向けて①アラビア数字(1、2、3…)、南へ向けて②アルファベット(A、B、C…)を与えた。さらに、大グリッドを3m方眼で900分割して小グリッドを設定し、③1～900の数字を付与した。小グリッドは、大グリッドの北西端を1として東へ30まで進み、31は西端の1の下にくるように配置した。なお出雲国分寺跡はKBと略称し、グリッド名はKB①②-③と呼称する。

(2) 松江市教育委員会『出雲国分寺跡発掘調査報告書』2004年

(3) 松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団『出雲国分寺跡発掘調査報告書』2010年

(4) 山本清「出雲国分寺」『国分寺の研究』平成3年

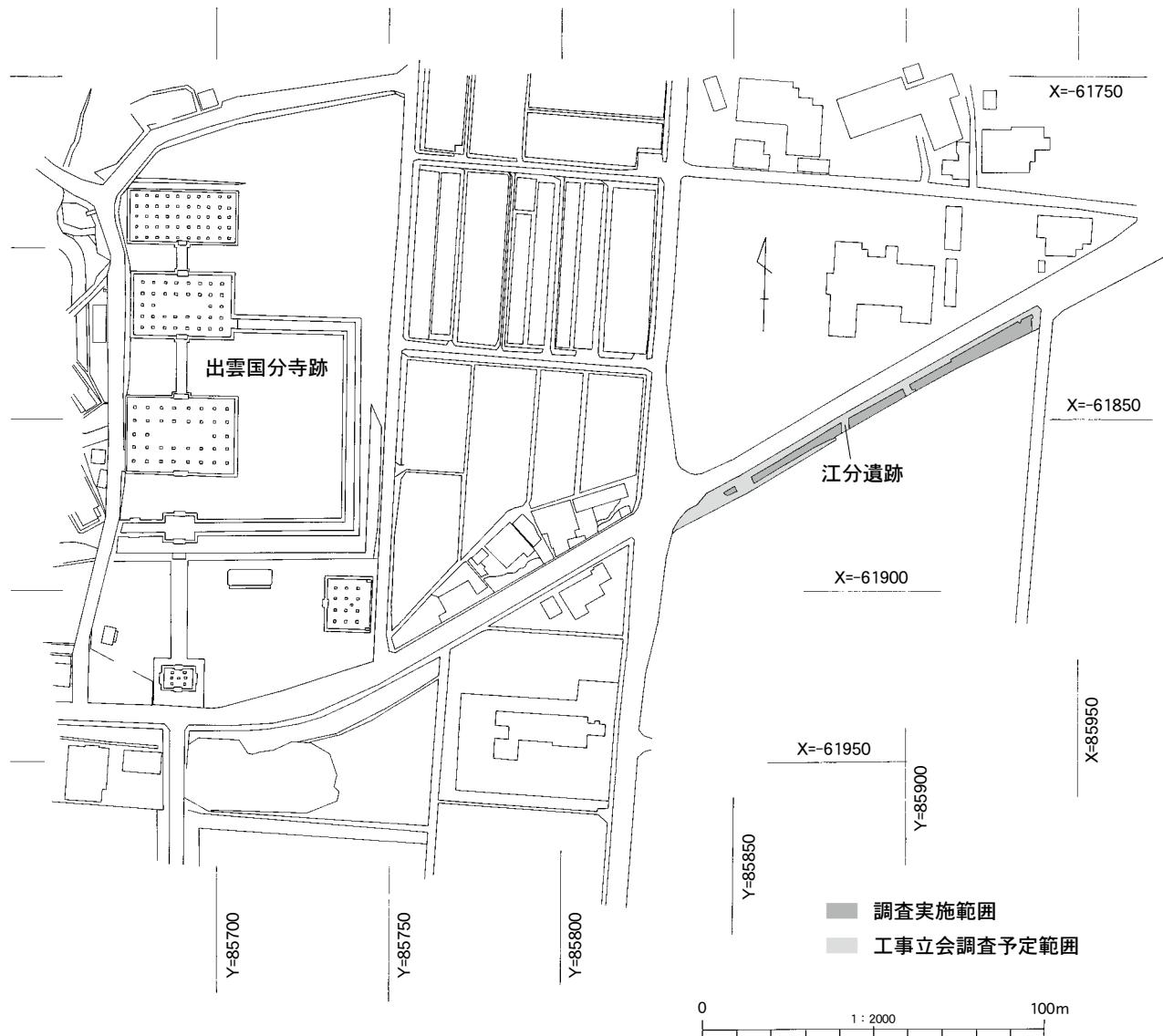
## 2. 江分遺跡発掘調査

### 第1節 調査の方法と経過

江分遺跡は、出雲国分寺金堂の中心軸から東へ140～200mに位置している（第10図）。そこは僧寺と尼寺のほぼ中間地点であり、中竹矢遺跡の隣接地でもある。

調査にあたっては出雲国分寺グリッドを設定し、そのグリッドを利用した遺構管理、遺物の取り上げを基本とした。調査地の出雲国分寺グリッドはKB10J-584～11J-132にあたる。

調査範囲は幅4m前後、長さ約100mと細長い。調査対象地内には県道と平行する農業用水路のほか、畑への通路、南北方向の水路、電柱などが存在した。現代の生活関連施設が存在する場所は工事立会調査で対応することとし、今回は障害物が無い場所について調査を実施した。



第8図 江分遺跡位置図

調査範囲は水路や通路により3ヶ所に分かれたので、東から1、2、3区と称した（第9図）。

試掘調査の結果では、1区は地山が浅く、3区は地山が深いことが確認されていた。

1区は平面調査が可能と考えられたため、平成23年5月13日、1区から掘削を開始した。まず、重機で現代の耕作土を除去し、その下はすべて人力で掘削した。調査区周縁の掘削は安全勾配を基本とし、調査区北辺では老朽化した農業用水路を保護するため、水路から50cm離して掘り下げを実施した。地山は浅かったが、湧水のほか農業用水路からの漏水もあったため北壁沿いに排水溝を掘った。ところが、1区でも西端付近の地山は深くなり、水路からの漏水が著しかった。北壁崩落の兆しを確認したため、土嚢を積んでこれを保護し、北壁は水路から約1m離して再度調査区を設定した。北壁で土層堆積状況を観察して20分の1縮尺で図面を作成し、写真を撮影した。

地山上面で多数の遺構平面プランを確認したので、遺構面を出来る限り調査するため、南辺は垂直掘りをし、壁面に板をあてがって隣接地の崩落を防いだ。順次遺構の掘削をおこない、遺物出土状況は10分の1縮尺、遺構は20分の1縮尺で図面を作成し、写真を撮影した。

2区は調査区北辺の農業用水路に平行してU字溝が設置されており、これを除去することができなかつたため、掘削幅はさらに狭くなった。1区同様、重機で現代の耕作土を除去し、その下はすべて人力で掘削した。ところが、地山が深く、周縁を安全勾配で掘り下げると平面調査は不可能であつた。遺構の有無は土層から判断することしかできず、調査区の東側半分以上については地山すら検出できなかつた。そこで、調査区の東側半分に一辺50～60cmの垂直掘りを3ヶ所設定して、地山の深さの確認をおこなつた。北壁で土層堆積状況を観察して20分の1縮尺で図面を作成し、写真を撮影した。

3区は現代の厚い盛土があり、掘り下げる深さは2区よりも盛土分深くなつた。安全勾配の法で掘り下げると現代の耕作土に達する深さが精一杯であり、それでは掘削の意味が無い。そこで協議をおこなつた結果、すべてバックホーを利用して約3mを1回で掘る長さとし、2段階の垂直掘り、つまり断面が逆「凸」字状になるように地山まで掘り下げる。そして、速やかに土層や平面遺構を観察、記録してその日の夕方には埋め戻すという作業を繰り返すことにした。したがつて、ここでは出雲国分寺グリッドを適用することはできなかつた。1回の掘削ごとにアルファベットを与え、東から3-A区、3-B区…と称し、遺物は1回の掘削ごとに取り上げた。

重機掘削中に遺構や遺物を検出した場合は可能な限り丁寧な作業をおこない、遺構は20分の1縮尺、遺構に伴う遺物は10分の1縮尺で図面を作成し、写真を撮影した。遺構の記録が終了した後は地山まで掘り下げ、北壁で土層堆積状況を観察して20分の1縮尺で図面を作成し、写真撮影をおこなつた。したがつて、図面は一連に作成できたが、写真はアルファベット調査区ごとの細切れ写真となつた。重機掘削中に出土した遺物は土層ごとに取り上げ、重機で揚げた土の中も丁寧に探した。ただし、階段状掘削とはいへ約2mを掘削したため、湧水が著しく多い場所では掘り残しを設けるなど調査の安全を優先させた。

なお、J区とK区の間には2本の電柱を保護するため、K区より西は畠に通じる軽車両の出入口となつていたため、今回は調査を実施せず、本工事時の工事立会調査で対応することとなつた。平成23年7月12日、現地における発掘調査を終了し、7月22日～7月26日に全調査区の埋め戻しと整地を実施して調査の全工程を終了した。

## 第2節 調査の報告

### (1) 1区について

江分遺跡の最も東に位置する調査区で、40m北東には中竹矢遺跡が位置している。

江分遺跡の中で唯一平面調査が実施できた調査区で、主として白色粘土上面から掘り込まれた多くの遺構を検出した。

#### 【層序】(第10図)

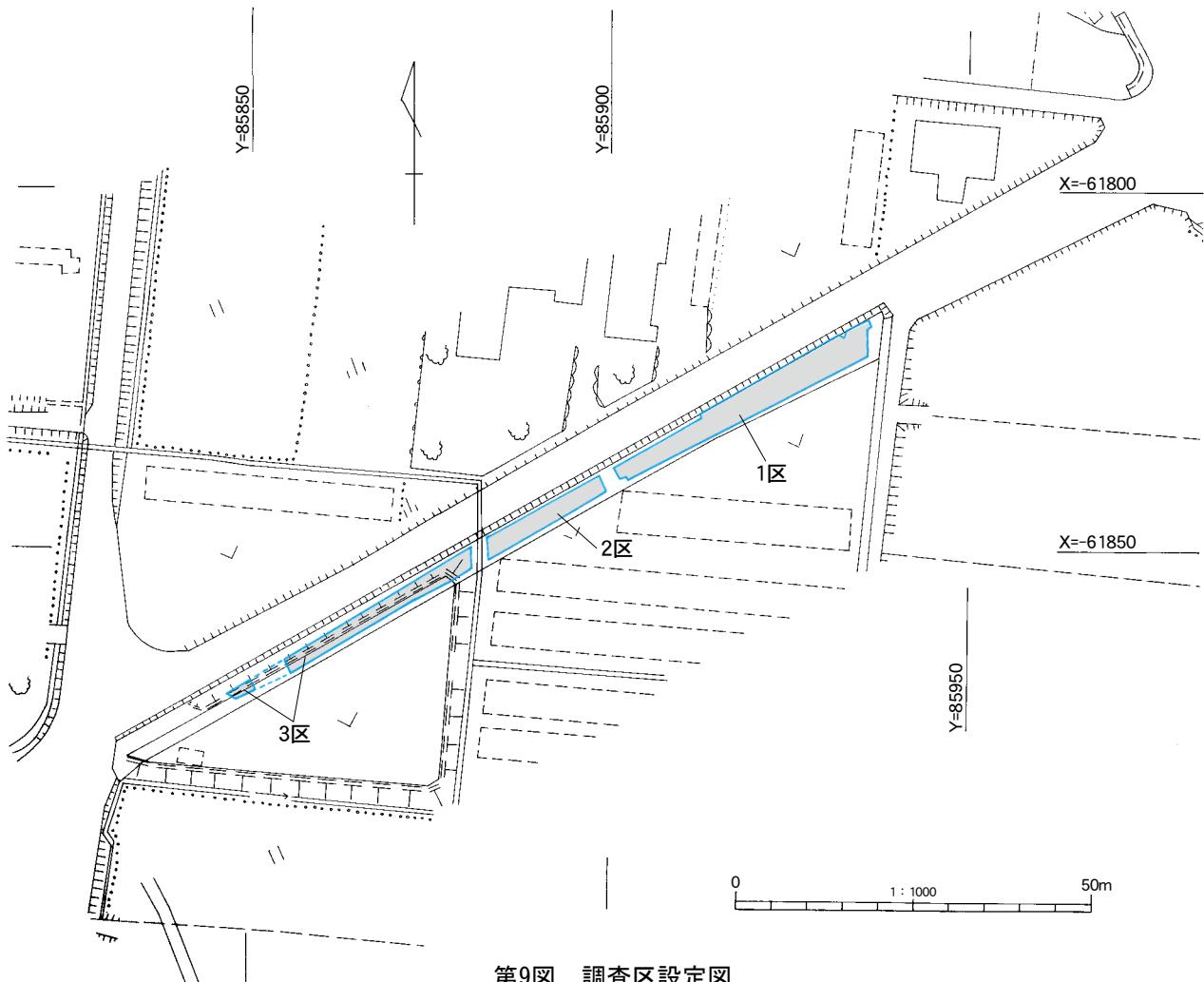
1区の東西方向の長さは42mあり、東方ほど地山が高くなっている。東端と西端の地山の深さには70cm近い差があり、1区の基本層序を一元化することはできない。

地山が最も浅い場所は東端から12m付近で、深さは表土下30cm前後を測る。層序は、上から表土(1)、灰色粘質土(4)、灰斑濁白色粘質土(32)、地山の白色粘土(47)である。1層と4層が現代の耕作土、32層は4層と47層の搅乱層で、耕作土直下が地山といえる。白色粘土上面で遺構平面プランを検出した。

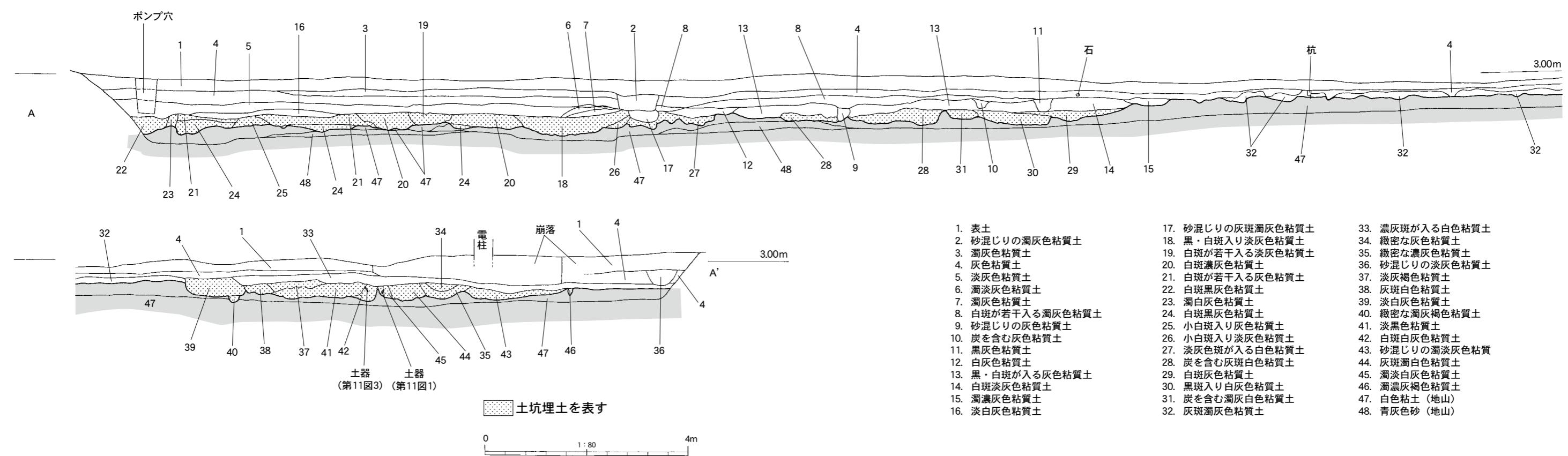
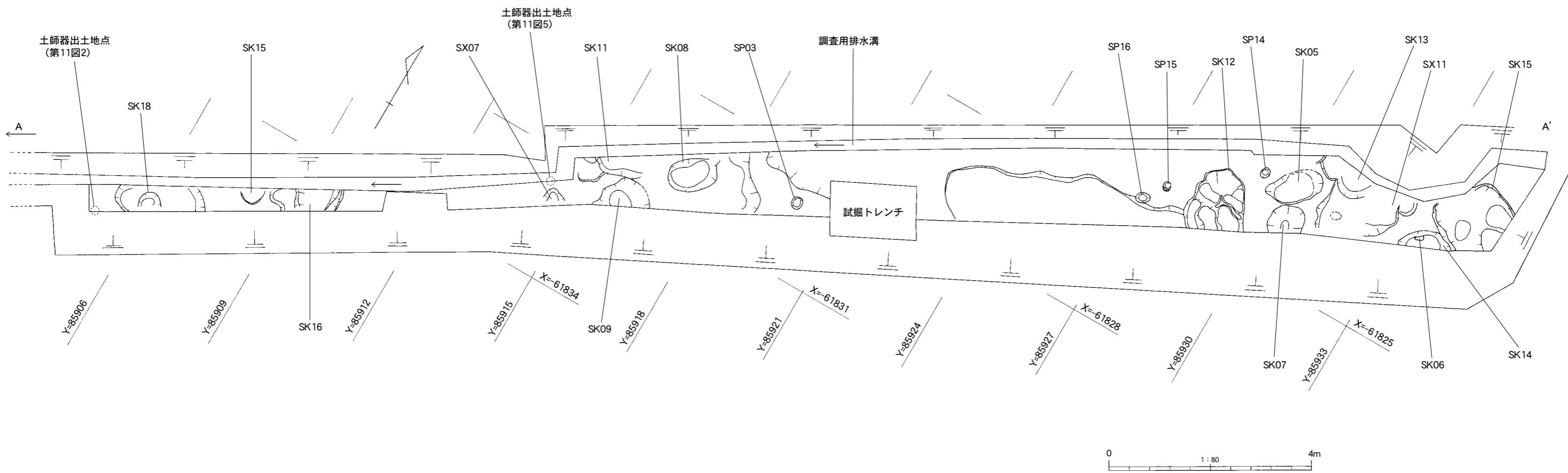
地山が最も深い場所は西端部で、深さは表土下1m前後である。層序は、上から表土(1)、灰色粘質土(4)、淡灰色粘質土(5)、白斑濃灰色粘質土(20)、地山の白色粘土(47)または青灰色砂(48)である。

#### 【遺構検出時の出土遺物】(第11図)

地山の白色粘土で遺構平面プランを精査した際、壁の調整や排水溝掘削で土師器が出土した(第11図)。これらは地山直上面と地山面から掘られた遺構に関連する遺物である。



第9図 調査区設定図



第10図 1区調査成果図（遺構配置図）と土層断面図

1は複合口縁を持つ壺で、北壁調整中に土坑埋土（第10図45）層から出土した。2は甕で、頸部内面に横方向のハケメ調整が施されている。平坦な白色粘土の地山直上から出土した。3は甕で、北壁調整中に土坑埋土（第10図42層）から出土した。4と5は調査用排水溝掘削中に出土したもので、おそらく土坑の中にあったと思われる。4、5は甕で、5は完全な形で埋っていた可能性が高い。底部が緩やかに丸く、口径や器高より胴部最大径が大きい。

地山面もしくは地山面から掘られた遺構から出土した土器には、古墳時代前期から後期までの時期幅が存在した。

#### 【遺構】

ピット4基（SP01～04）と土坑14基（SK05～18）を検出した（第10図）。

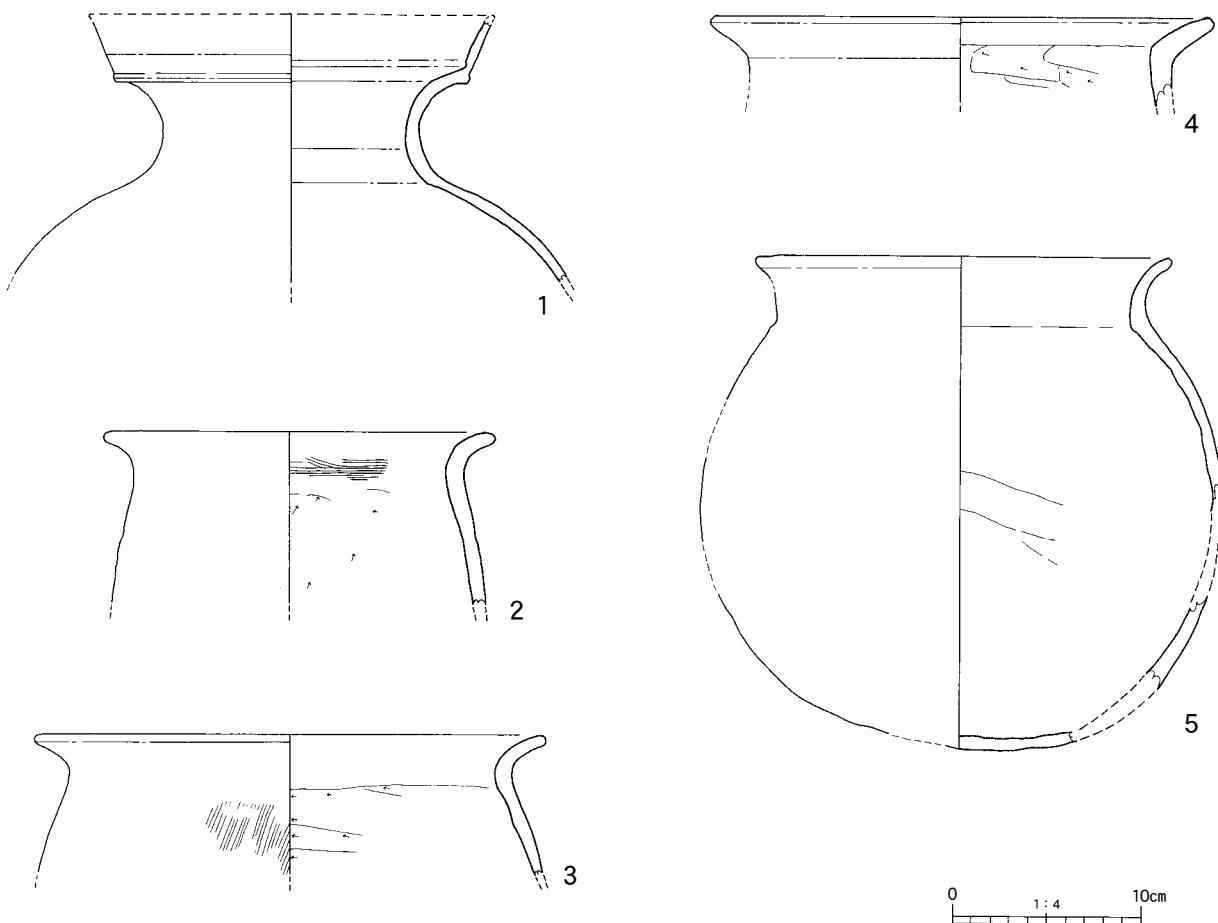
#### ①ピット

##### SP01（第12図）

白色粘土上面から掘られており、上端直径28cm、下端直径19cm、深さ20cmを測る。埋土は一部に灰斑白色粘土（3）があるが、大半は灰色粘土（1）である。ピットのほぼ中央から丸味を帯びた石（第13図）が出土した。石の法量は長さ11.7cm、最大径7.7cm、重さ750gである。外面は滑らかであるが、加工痕や使用痕が顕著ではない。ピット中央から出土したので何らかの用途があったと思われるが、ピットの底部から8cm浮いて出土したので柱の基礎とは考えられない。

##### SP02（第14図）

白色粘土上面から掘られており、上端直径22～24cm、下端直径20cm、深さ16cmを測る。埋土は炭を



第11図 地山検出時出土遺物実測図

多く含む濁灰色粘質土（1）1層である。柱痕は認められない。

#### SP03（第14図）

白色粘土上面から掘られており、一部2段掘りで上端直径18~24cm、下端直径10cm、深さ24cmを測る。埋土は中心が炭を多く含む灰褐色土（2）、周囲が濁灰色粘質土（3）である。2層の幅は8cmを測るので、直径8cmくらいの木材が据えられていたと思われる。

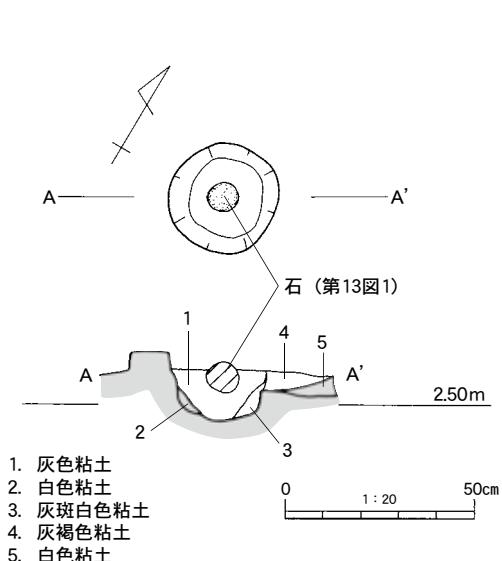
#### SP04（第14図）

白色粘土上面から掘られており、上端直径22cm、下端直径16cm、深さ18cmを測る。埋土は焼土を含む灰色粘質土（4）1層で、器種、時期とともに不明の土師器片1点が出土した。

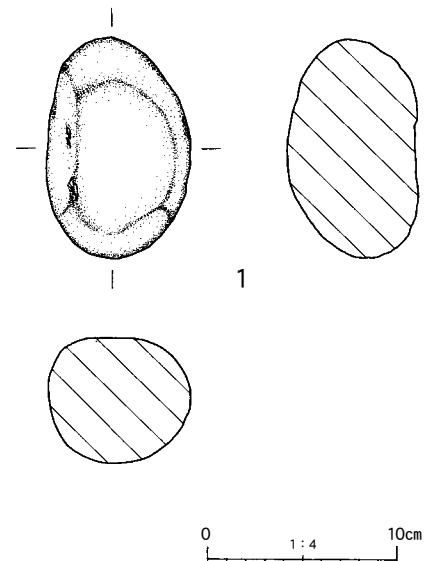
#### ②土坑

#### SK05（第15図）

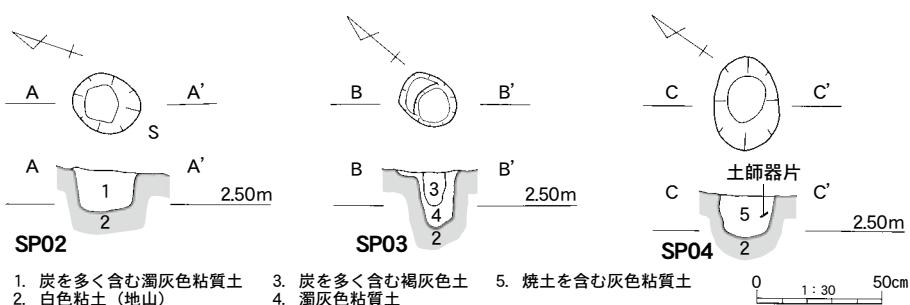
白色粘土上面から掘られた土坑で、平面プランは不整形な橢円形を呈し、長径1.4m、短径0.76m、深さ0.1mを測る。埋土は灰色粘質土（1）と炭混じりの灰褐色粘質土（2）である。床面から土師器の甕（第16図1）が横たえられた状況で出土した。第15図では床面から浮いた破片を取り上げた状態で図化しているが、約2分の1周強が残存していた。甕は底部が緩やかに丸く、口径や器高よりも



第12図 SP01平面図・土層断面図



第13図 SP01出土石器実測図

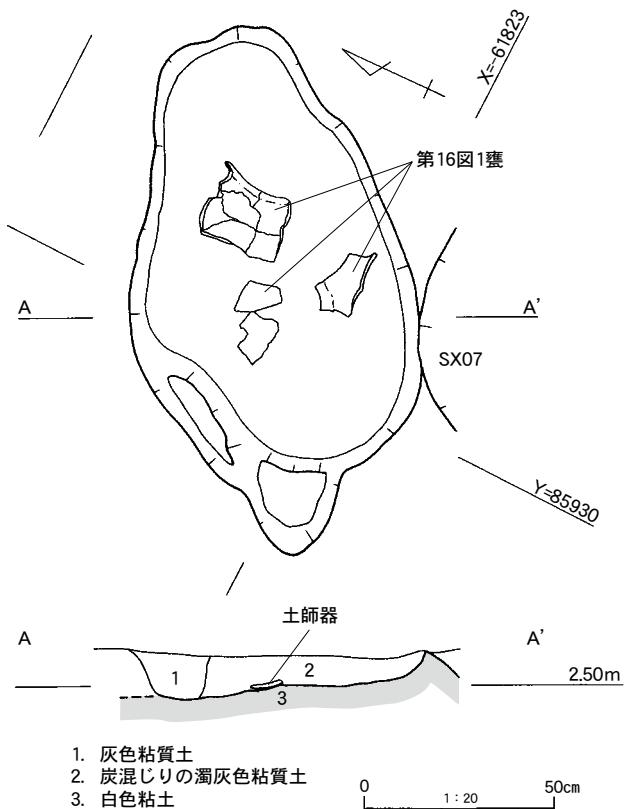


第14図 SP02~04平面図・土層断面図

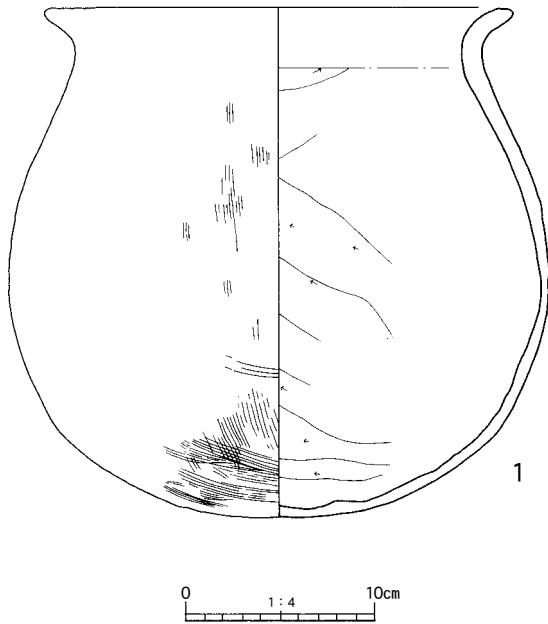
胴部最大径が大きい。調整は外面がハケメ、内面はケズリ調整である。

SK06 (第17図)

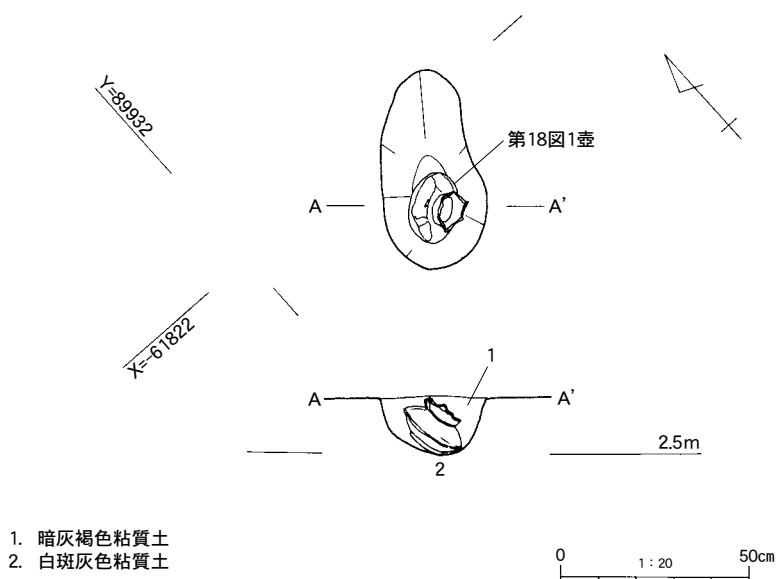
SK12の埋土、白斑灰色粘質土（2）上面から掘り込まれた土坑である。平面プランは不整形な橢円を呈し、長径0.52m、短径0.28m、深さ0.16mを測る。遺構の埋土は暗灰褐色粘質土（1）1層で、直口壺（第18図1）がほぼ正位置で出土した。直口壺は胴部が偏平でシャープな作りである。口縁端部



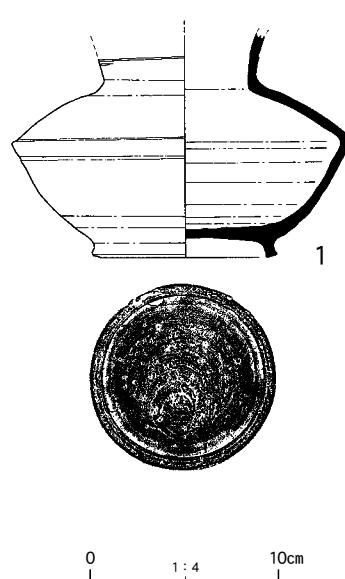
第15図 SK05平面図・土層断面図



第16図 SK05出土遺物実測図



第17図 SK06平面図・土層断面図



第18図 SK06出土遺物実測図

は故意的に打ち欠かれている。

#### SK07（第19図）

SK05に南接した、白色粘土上面から掘られた土坑である。平面プランは調査範囲内では半円形、断面は緩やかな逆円錐状を呈するが、南方の調査範囲外に続いている。調査範囲内では上端径0.9m、下端径0.2m、深さは0.4mを測る。埋土は下から濃灰色粘質土（3）、灰色粘質土（2）、砂を含む灰色粘質土（1）で、どの層も水平に堆積していた。遺物は出土しなかった。

#### SK08（第19図）

白色粘土上面から掘られた土坑である。平面プランは橢円形を呈し、長径1.38m、短径0.78m、深さ0.22mを測る。埋土は白斑灰色粘質土（5）1層で、遺物は出土しなかった。

#### SK09（第19図）

白色粘土上面から掘られた土坑である。平面プランは調査範囲内では最大径1.4mの半円形を呈しているが、南方の調査範囲外に続いている。埋土は白斑灰色粘質土（6）1層で、遺物は出土しなかった。

#### SK10（第19図）

白色粘土上面から掘られた土坑である。調査区内では最大幅0.52mの小さな遺構であるが、南方の調査区外に続いている。埋土は白斑灰色粘質土（7）1層で、遺物は出土しなかった。

#### SK11（第19図）

白色粘土上面から掘られた土坑である。調査区内では最大幅1.2mを測るが、北方の調査範囲外に続いている。西側は急勾配に掘られているが、東側では極めて緩やかな勾配で上端と下端の位置が判然としない。埋土は灰斑白色粘質土（8）1層で、遺物は出土しなかった。

#### SK12（第19図）

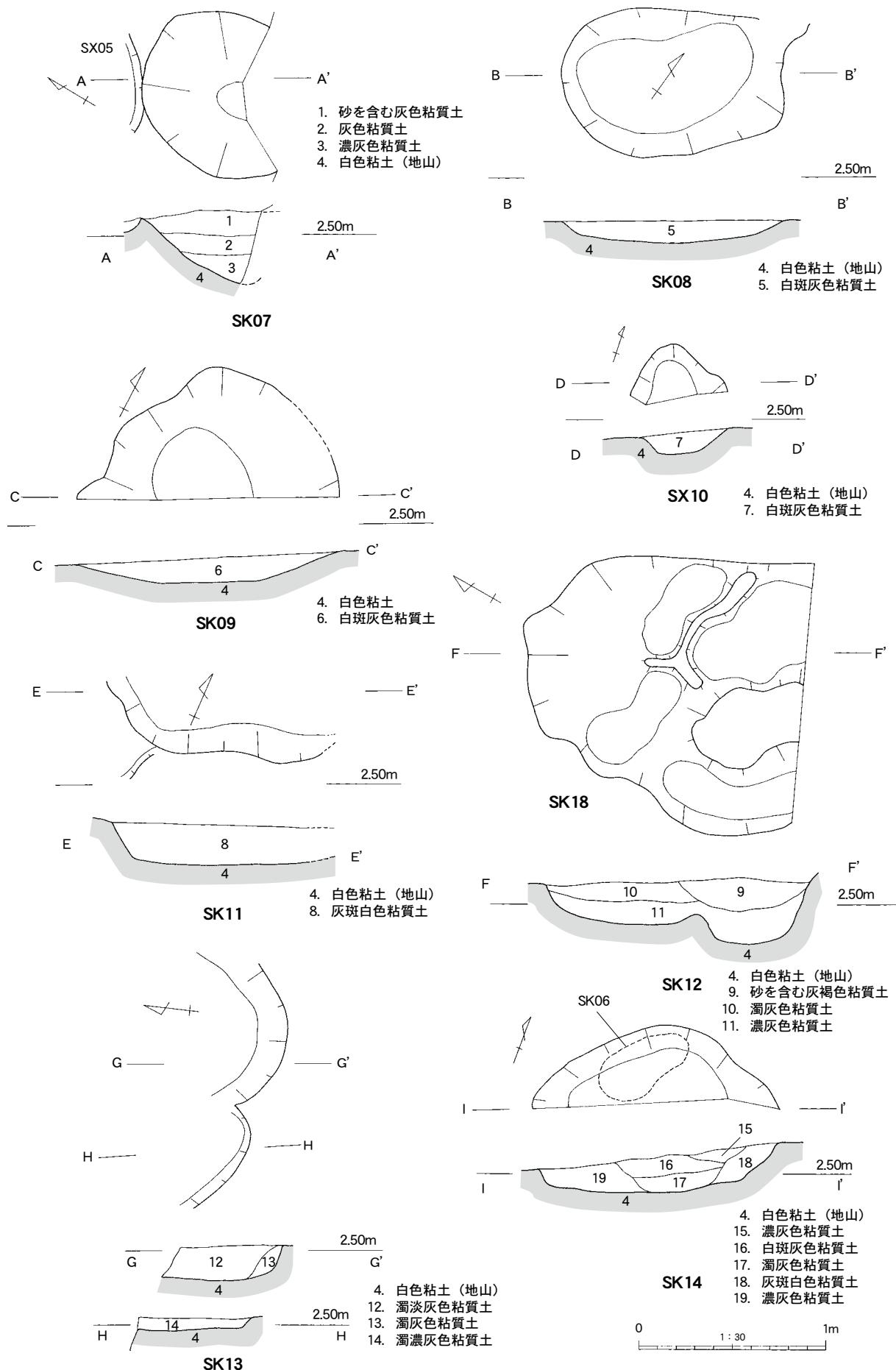
白色粘土上面から掘られた土坑である。調査範囲内では東西幅1.5m、南北幅1.5m、深さ0.24mを測るが、南の調査範囲外にも続いている。遺構の底部は凹凸が著しく、基本的に埋土は下から濃灰色粘質土（11）、濁灰色粘質土（10）の2層に分けられる。2層を切る状況で緩やかなU字状に入っている砂を含む灰褐色粘質土（9）は、SK12が埋った段階で掘られた遺構である。遺物は出土しなかった。

#### SK13（第19図）

白色粘土上面から掘られた土坑である。独立した2つの弧状の遺構と思われるが、平面プランでは明確な切り合い関係がわからなかったので1つの遺構としてとらえた。東西の最大幅は1.4mを測る。G-G' 断面は深さ0.2mで、埋土は壁際の濁灰色粘質土（13）と濁淡灰色粘質土（12）がある。H-H' 断面は深さ0.06mで、埋土は濁濃灰色粘質土（14）1層である。遺物は出土しなかった。

#### SK14（第19図）

白色粘土上面から掘られた土坑である。平面プランは調査範囲内では半円形を呈し、最大幅1.32m、深さ0.2mを測るが、南方の調査範囲外に続いている。埋土は西側が濃灰色粘質土（17）、東側が灰斑白色粘質土（18）で、この埋土上面からSK06が掘り込まれていた。I-I' を観察するとSK06以外にもSK14埋土上面から掘り込まれた遺構が確認され、その埋土は、下から濁灰色粘質土（17）、白斑灰色粘質土（16）、濃灰色粘質土（15）である。遺物は出土しなかった。



第19図 SK07～SK14平面図・土層断面図

### SK15 (第20図)

白色粘土上面から掘られた土坑である。調査範囲内では最大幅1.84m、深さ0.14mを測る。遺構は南方と北方の調査範囲外に続いている。床面と土層が複雑なので、複数の掘り込みが重複した遺構と思われる。遺物は出土しなかった。

### SK16 (第20図)

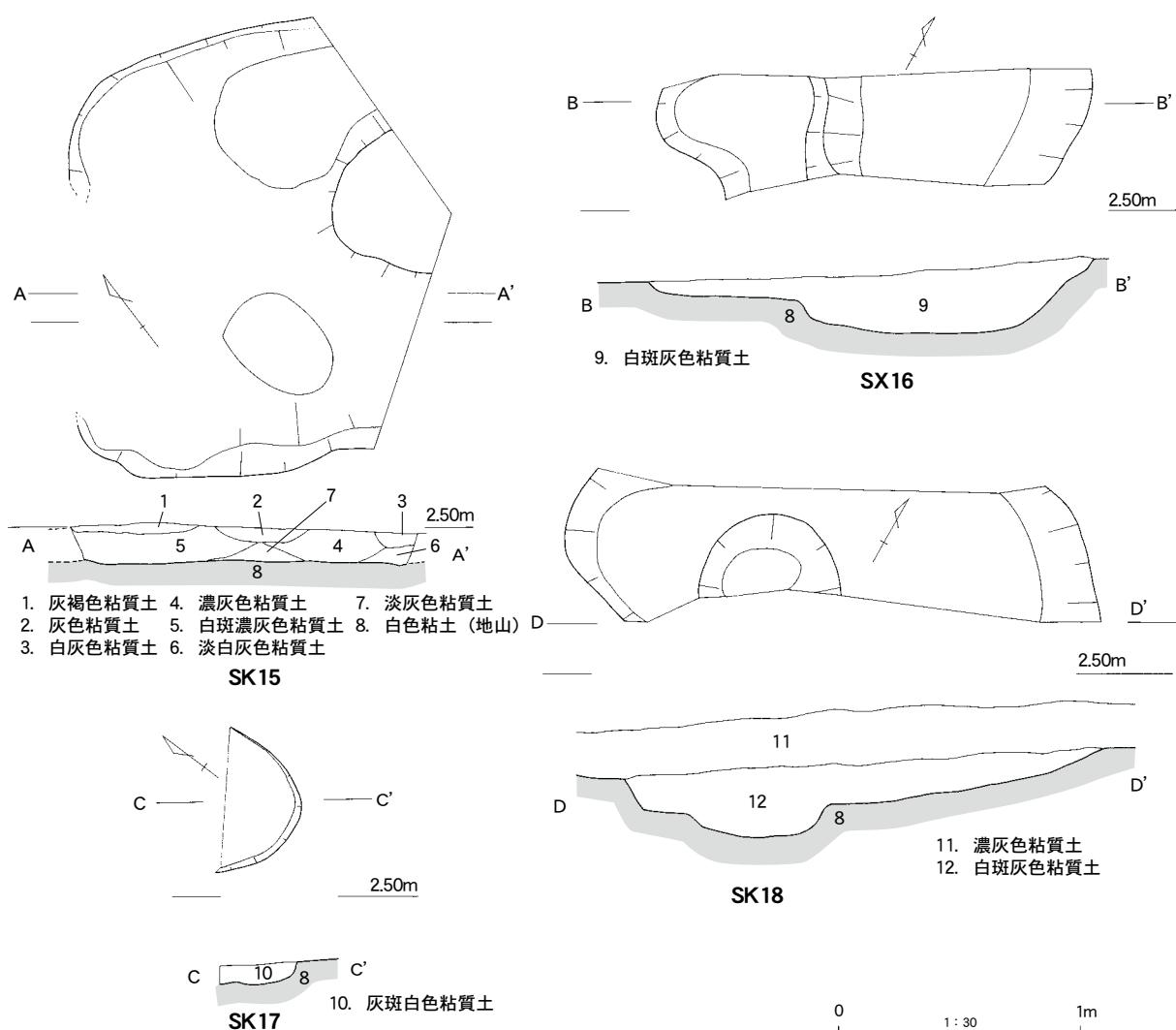
白色粘土上面から掘られた土坑である。遺構は南方と北方の調査範囲外に続いているので平面プランは不明だが、西部は2段掘りである。調査範囲内では最大幅1.84m、深さ0.26mを測る。埋土は白斑灰色粘質土(17)1層で、遺物は出土しなかった。

### SK17 (第20図)

白色粘土上面から掘られた土坑である。平面プランは半円形を呈し、最大幅0.6m、深さ0.1mを測るが、北方の調査範囲外へ続いている。埋土は灰斑白色粘質土(10)1層で、遺物は出土しなかった。

### SK18 (第20図)

白色粘土上面から掘られた土坑で、調査範囲内では最大幅2.18m、深さ0.28mを測る。底部には上



第20図 SK15～SK18平面図・土層断面図

端直径0.6m、深さ0.11mの円形と推測される落ち込みがあり、2段掘りになっている。埋土は白斑灰色粘質土(12)1層である。遺構は南方と北方の調査範囲外に続いている。遺物は出土しなかった。

#### 【遺物包含層出土遺物】

ここでの遺物包含層とは、表土(第10図1)より下の水平堆積層全般を指す。

#### 土師器(第21図)

1は壺の底部、2、3は高台付壺の底部、4、5は高台部である。1～5はすべて風化が著しく、調整は不明である。6は製塩土器で、内外面とも粗いナデ調整である。7は柱状高台皿の高台部で、底部外面は糸切痕が残る。

#### 須恵器(第22図)

1～3は蓋で、1は輪状つまみ、2、3は宝珠状つまみがつくタイプである。

4～14は壺である。4、5は蓋受が付く壺、6～8は蓋受が付かない壺である。9～10は高台付壺、11～14は高台付壺の高台部である。

15～21は皿で、15～18は底部が丸味を帯び、19～21は器壁が直線的に立ち上がる。21以外は底部外面に糸切痕が残っている。22～26は高台付皿である。

27は壺の底部、28～30は甕である。30の器壁外面はタタキ後丁寧なナデが施されている。

#### 陶磁器(第23図)

1と2は青磁碗の一部である。1は口縁部で、緻密な灰白色の胎土に厚さ1mm近い青磁釉が施されている。一部に貫入が認められる。

2は底部付近で、細かい黒粒が含まれた胎土に厚さ1mm近い青磁釉が施されている。高台外面にも施釉されていたと思われる。一部に貫入が認められる。

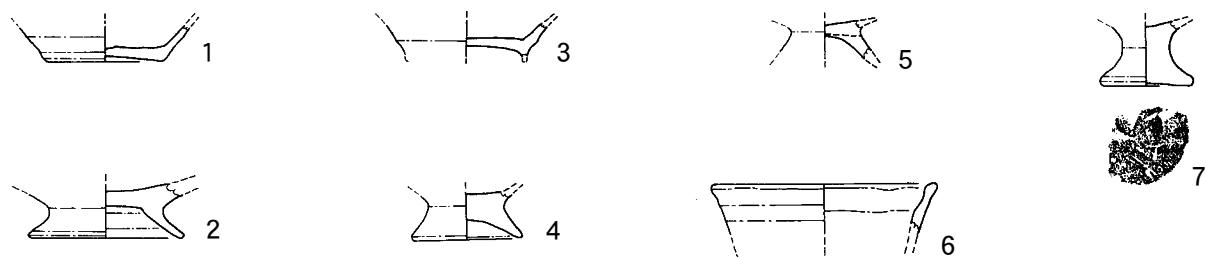
3は陶器の皿で、高台は削り出しで成形されており、高台内面にも釉が施されている。貫入が目立ち、見込みには砂目がある。肥前系17世紀前半頃の皿である。

#### 土製品(第24図)

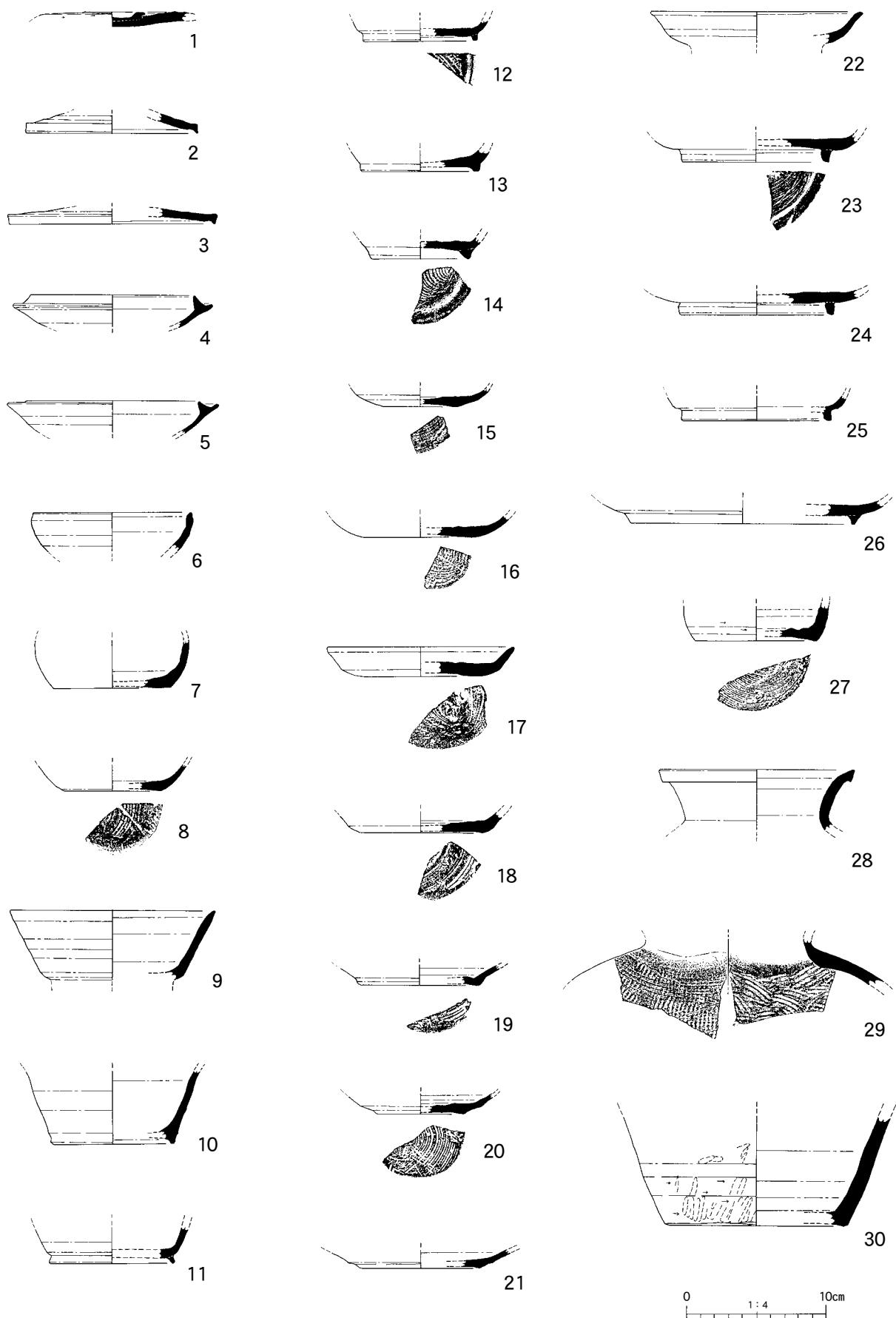
1、2は羽口の破片である。今回の調査では滓は出土していない。

#### 石器(第25図)

1は玉髓の剥片で、二次的な剥離痕はみられないが、周縁は十分に鋭利である。2は砥石で、砥面には自然面が広く残っており、あまり使用されずに放棄されている。



第21図 1区遺物包含層出土遺物実測図(土師器)



第22図 1区遺物包含層出土遺物実測図（須恵器）

## 瓦（第26図）

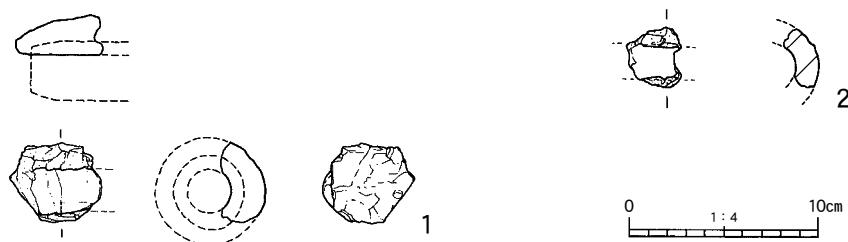
1、2は丸瓦の破片である。外面は滑らかなナデ、内面は布目压痕で調整されている。

3は軒平瓦の破片である。瓦当中央付近の文様が残っており、中心部の上下幅は6.7cmを測る。外面は布目压痕で、端部は横方向の削りで滑らかに調整されている。内面はハケメ状工具で形を整えた後ナデ調整で滑らかに仕上げられている。4～7は平瓦の破片である。外面は布目压痕、内面はタタキで調整されている。7は外面には布目压痕が残るが、内面のタタキ痕はケズリによって消されているので軒平瓦の可能性が高い。端部は断面V字状にカットされている。

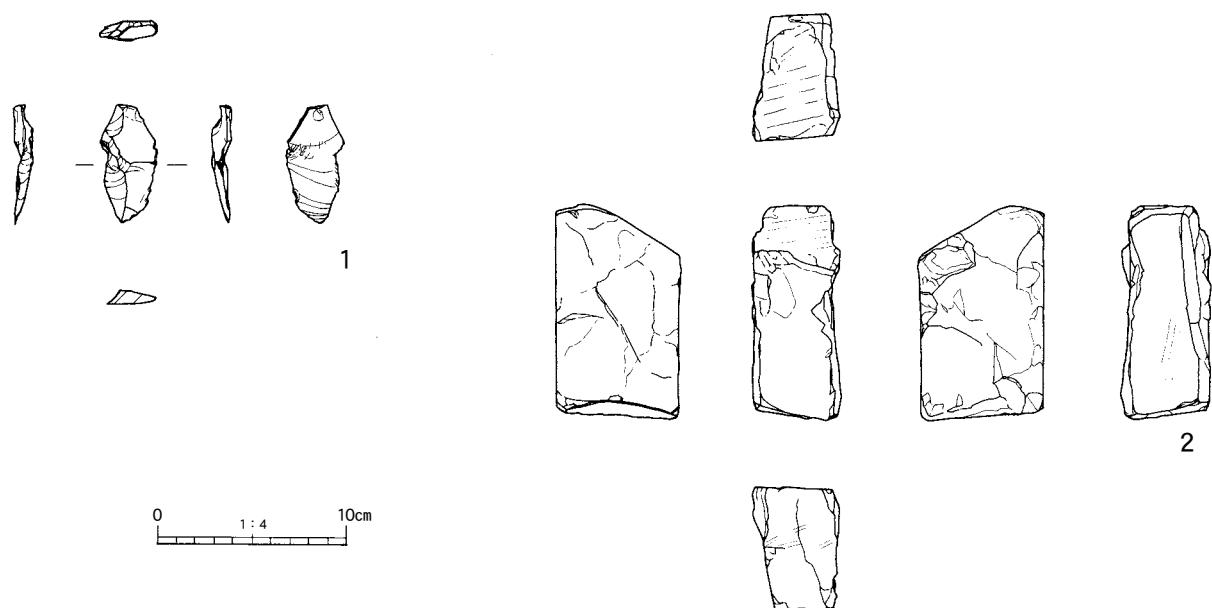
8は小さな搏の破片で法量は不明である。片面に植物纖維のような压痕が残る。



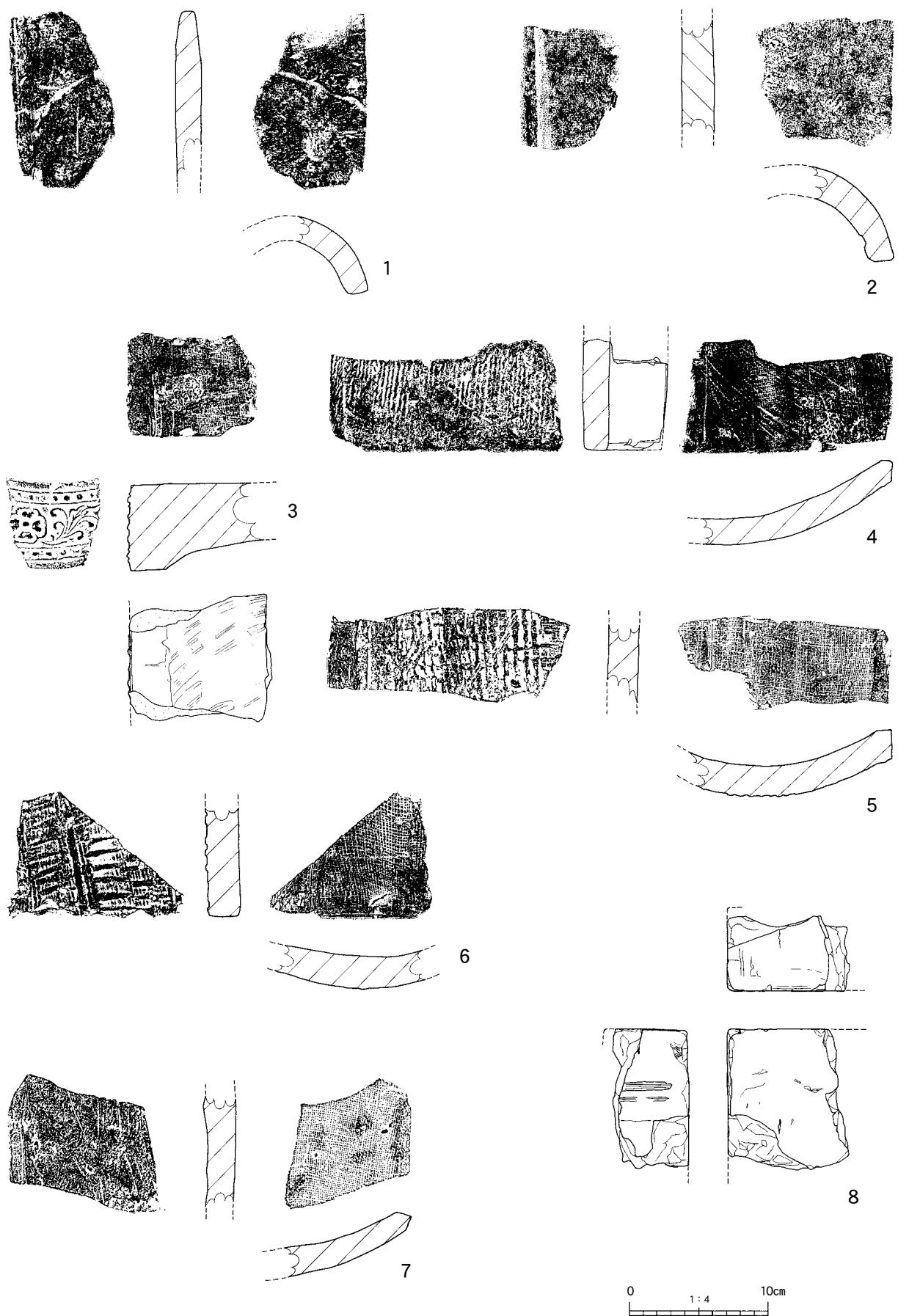
第23図 1区遺物包含層出土遺物実測図（陶磁器）



第24図 1区遺物包含層出土遺物実測図（土製品）



第25図 1区遺物包含層出土遺物実測図（石器）



第26図 1区遺物包含層出土遺物実測図（瓦・埴）

## (2) 2区について

1区の西の調査区で、長さ19m、幅2.5mについて調査を実施した（第27図）。

### 【層序】（第28図）

上から表土（1）、砂を若干含む灰色粘質土（4）、灰色粘質土（5）、緻密な淡灰色粘質土（6）、砂を若干含む白灰色粘質土（7）、淡灰色粘質土（9）が水平に堆積し、標高2.5m以下では小単位の層が複雑に重なり合い、標高1.6mで地山の青灰色砂となっている。

小単位の層は有機質を多量に含んだ層や粘質の強い層が多く、下層（48、49、50）では葦等の植物遺体が若干混じっていた。湿地の土であることは間違いないが、土層の堆積状況を観察すると自然堆積とは考えにくい。何らかの目的のもとで人間による搅乱を受けた状況ではないだろうか。もし、そうであるとすれば、最下層（49、50）から弥生時代後期の土器片が多く出土した（第29図1、2、3）ので、搅乱を受けた時期は弥生時代後期以降である。また、遺構SX18の存在から、7世紀には搅乱された土の表面が安定した状況となっていたと考えられる。

8世紀以降の遺物が出土したのは、主として淡灰色粘質土層（9）である。

### 【遺構】（第28図）

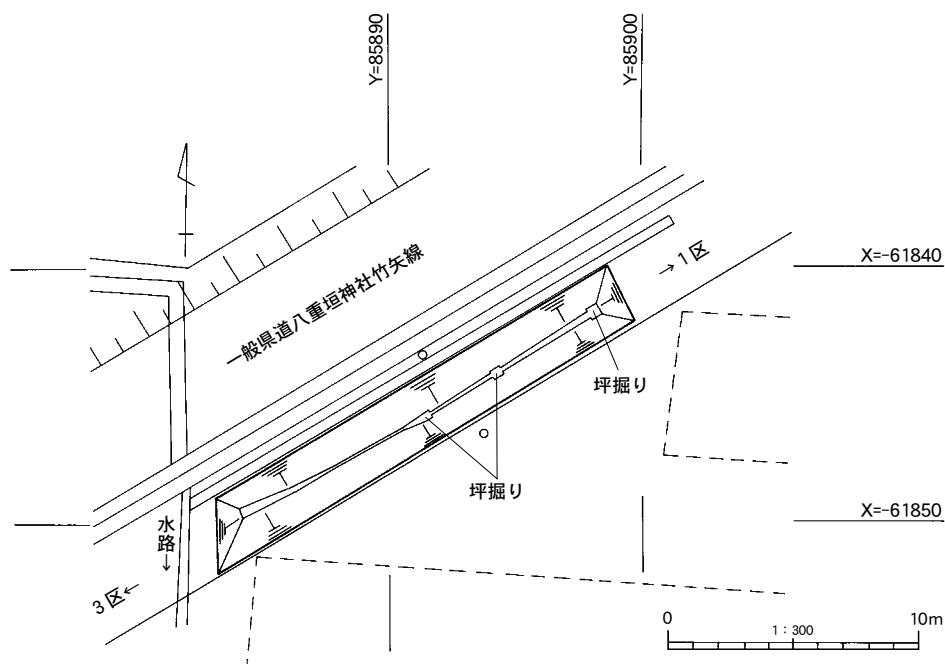
北壁土層で性格不明の遺構2基（SX18、SX19）を検出した。

#### SX18（第28図）

44、16層上面から掘られた性格不明の遺構である。遺構埋土は上から淡灰白色粘質土（10）、灰色粘質土（15）で、15層の底面から7世紀の平瓶（第29図5）が完形かつ正位置で出土した。平瓶の中にはほとんど土が入っておらず、本来は有機質の蓋が被せてあったと考えられる。意図的に埋められた可能性が高い。

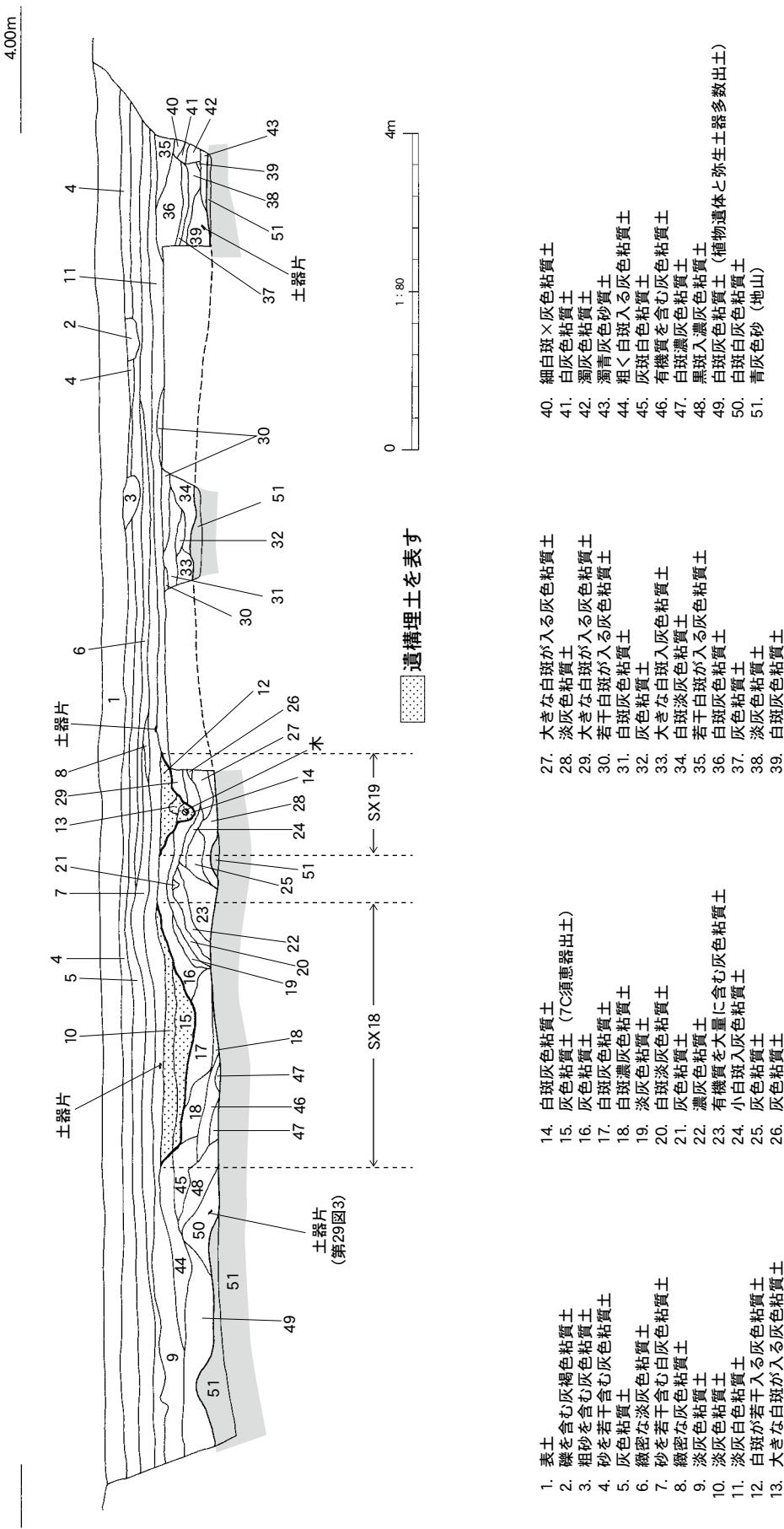
#### SX19（第28図）

11、16層上面から掘られた性格不明の遺構である。埋土は12、13、14層で、14層の中央から直径9



第27図 2区調査成果図

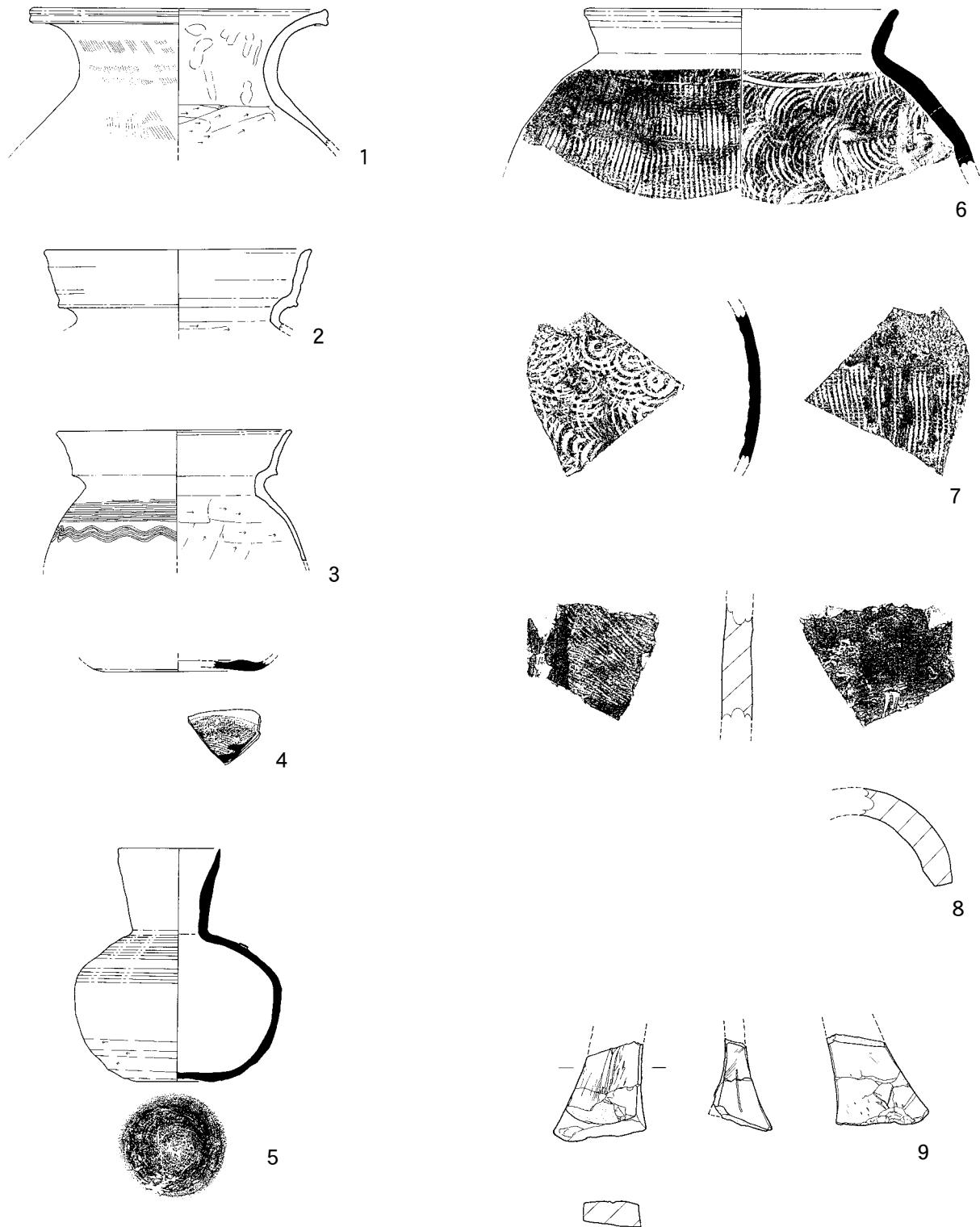
第28図 2区土層断面図



cm、長さ20cmを測る断面円形の木が南北方向に横たわって出土した。木には両端切断以外の加工痕は見られなかった。

【出土遺物】(第29図)

1～3は弥生土器である。1は壺で、口縁端部は肥厚して1条の凹線が廻らされている。口縁、肩部と



第29図 2区出土遺物実測図

もに外面は縦ハケと横ナデ、内面は口縁が縦ナデ、肩部がケズリ調整である。2、3は複合口縁の甕で、3の肩部には櫛書き文様が描かれている。

4～7は須恵器である。4は皿で、底部外面の糸切面には墨書が残っている。大半を欠損しているため判読はできない。5はSX18から出土した平瓶で、肩部にはカキメが廻らされ、円盤状の耳が2ヶ所についている。底部は回転ヘラケズリで、ヘラ記号「一」が描かれている。6、7は甕で、6の口縁端部の外面に浅い凹線が廻らされている。

8は丸瓦の破片で、外面はナデ、内面は布目圧痕で調整されている。

9は砥石で、端部は使用されていないが、他の4面はかなり使い込まれている。

### (3) 3区について

2区の西で長さ34m、幅2.5mについて調査を実施した（第30図）。

第1節で記したとおり、東端から約3mごとに調査と埋め戻しを繰り返したので東から3-A区、3-B区…と称するが、ここでは「3-」を外してA区、B区…と称して以下説明する。

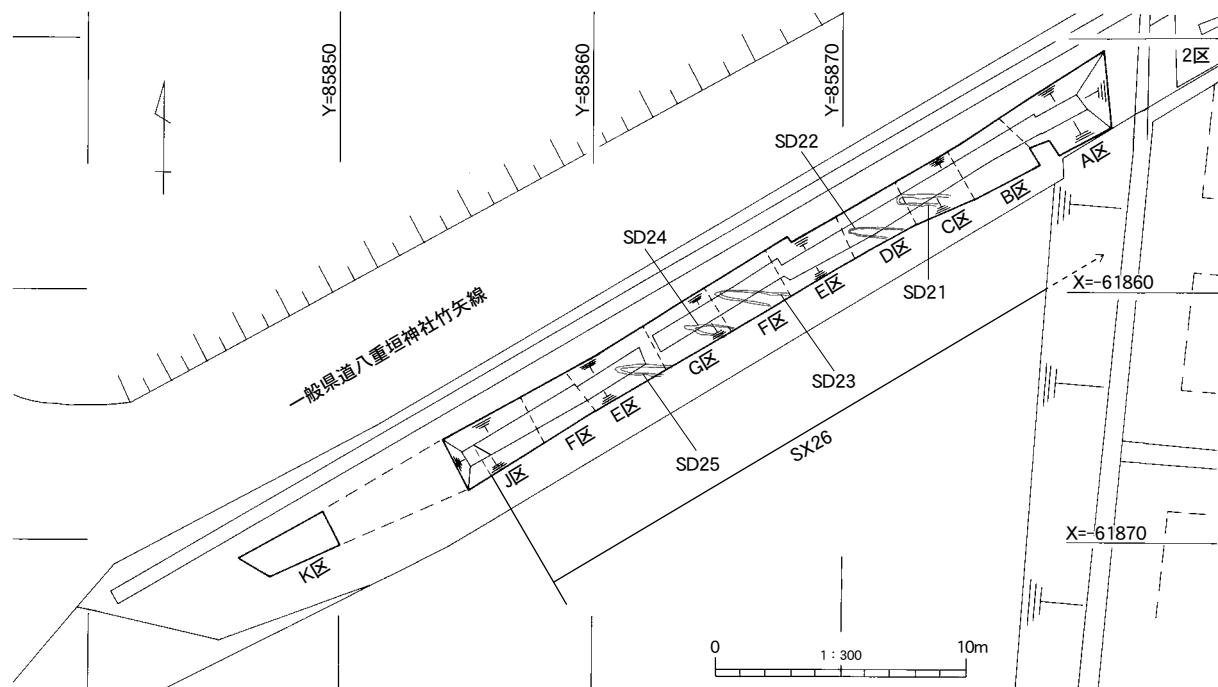
調査はA区から開始して順調に進行したが、G区を掘ったとき大量の地下水が噴出して危険な状態となつたため、次のH区を掘削する時は下方の一部を掘り残して調査をおこなった。

#### 【層序】（第31図）

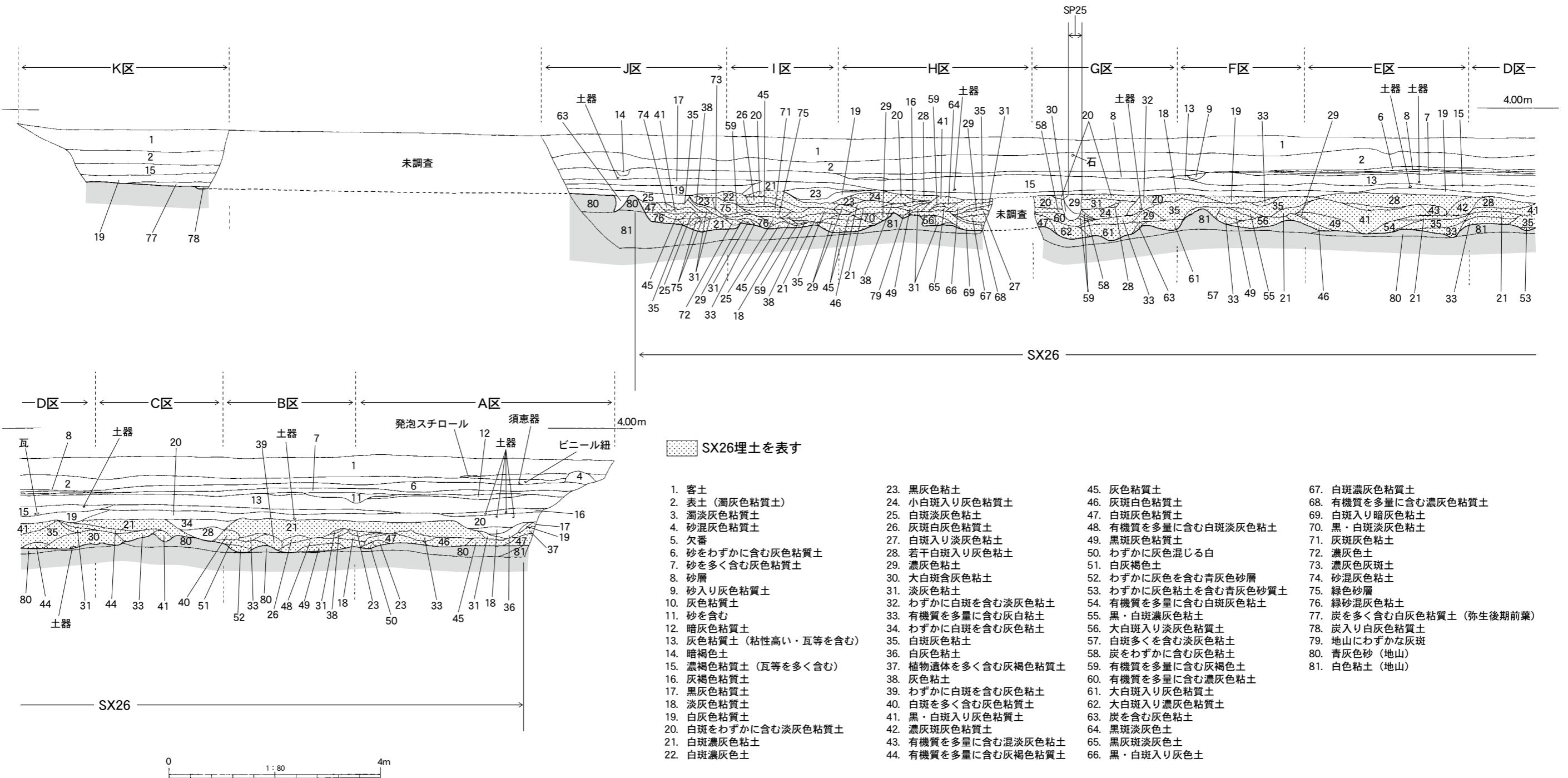
東西に長い調査区であるが、水平堆積の層序には場所による変化が比較的少ない。地山が削られていないK区を基本層序と考えると、上から客土（1）、表土（2）、濃褐色粘質土（15）、白灰色粘質土（19）、炭を多く含む白灰色粘質土（77）、地山の青灰色砂（80）となる。

J区の半ばより東方で見られる、19層下の小単位層は性格不明の遺構SX26の埋土である。

基本層序の若干の変化は、F区以東で15層の上に灰色粘質土（13）が堆積してC区以東では13層だけ



第30図 3区調査成果図



第31図 3区土層断面図

になること、F区半ば以東では13層の上に、下から砂層（8）、砂を多く含む灰色粘質土（7）、砂をわずかに含む灰色粘質土（6）という砂質土を挟んでいることがあげられる。

13、15層から古代から中世にかけての多量の遺物が出土し、K区の地山上面～77層では炭の散乱を伴って弥生時代中期末～後期初頭の甕が完全な形で出土した（第32、33図）。77層は弥生時代中期末～後期初頭の遺物をパックした層であり、この周辺に当時の遺構面が存在する可能性を示唆している。

地山は標高2.50～2.51mを測り、平坦に近いが若干西方が高くなっている。

### 【遺構】

平面で溝5条、北壁土層でピット1基と、3区の大部分が含まれる広大な掘り下げ遺構を検出した。

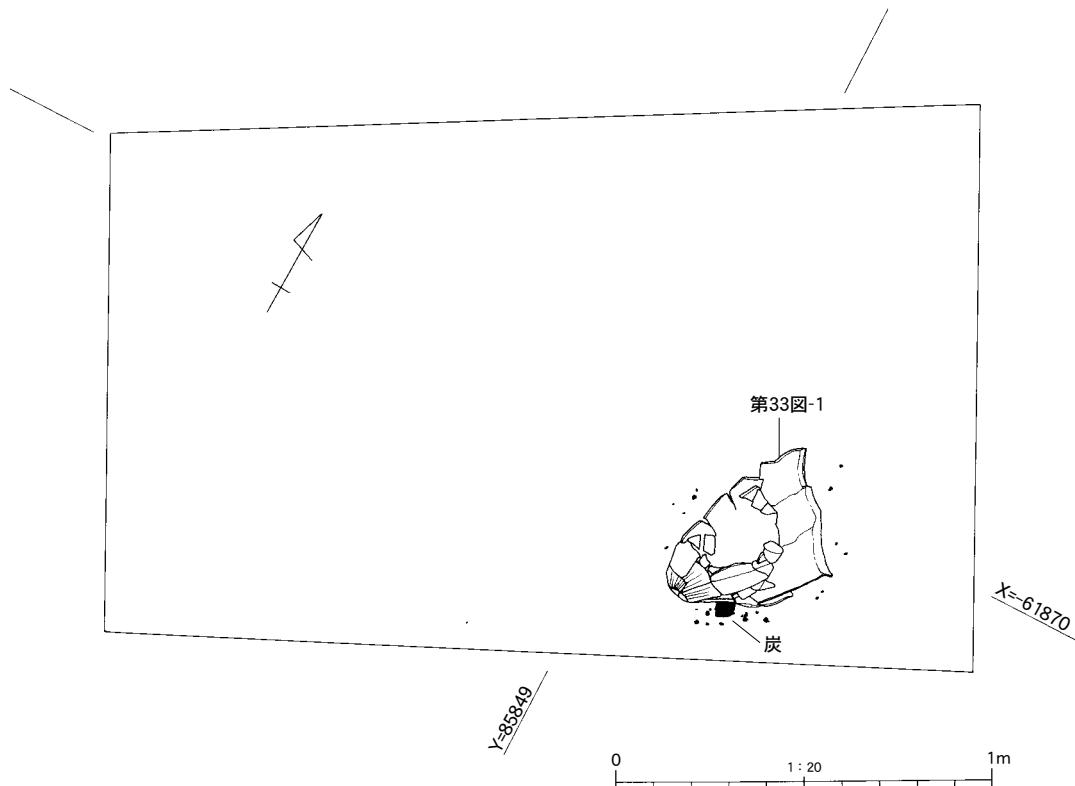
また、遺構とはいえないが、地山面直上で炭の散乱を伴った弥生土器が完全な形で出土したので、周辺には当時の遺構面が広がっている可能性が考えられる。

### SD20～SD24（第30図）

C区でSD20、D区でSD21、F区でSD22、G区でSD23、H区でSD24、合計5条の溝を検出した。

5条の溝はいずれも東西方向に向けて掘られ、SD21とSD22の間が抜けているが、この間に1条存在したと仮定すると、溝はほぼ等間隔にならぶことから一連の遺構と思われる。SD20は幅45cm、深さ8cm前後を測り、灰色粘質土（第31図18層）上面から掘られている。埋土はどの溝も同じ褐色砂質土1層で、SD22埋土から現代ガラスの破片が出土した。

どの溝も現存する農業用水路より1.5～2m手前で浅くなつて消滅していることから、圃場整備前の現代の歴跡と考えられる。したがつて、個別の詳細な説明は省略する。



第32図 3-K区遺物出土状況

### SP25 (第31図)

北壁土層で、20層上面から掘り込まれたピットSP25を検出した。

断面から単純に復元すると、直径40cm、深さ52cmを測る。埋土は下から大白斑含灰色粘土（30）、白斑濃灰色粘土（21）である。出土遺物は無く、時期は不明である。

### SX26 (第31図)

J区西側の地山は標高2.4mの平坦面であるが、J区のほぼ中央で地山が東の下方に向けて直線的に掘り下げられた遺構SX26を検出した。掘り下げの角度は約30°、深さは60cmである。標高1.95mで東へ約70cmの平坦面が続き、それより東は凹凸のある地山が遺構面として続いている。この遺構は少なくともJ区中央より東の3区全域にわたり、地山の深さがほぼ等しいことから2区まで続いている可能性が高い。遺構西端部の上端は直線ではなかったが、東西方向に近いものであった。

SX26が掘り下げられた跡には、地山の高さ標高2.3～2.4mまで小単位の土層が秩序無く置かれて埋め立てされたような状況が観察された。E区の土層について考古学見地での指導を受けたところ、有機質を多く含む層が存在することから水の影響を受けた自然堆積と解釈されると判断された。小単位の層はH～J区ではG区以東よりもさらに細かくなっている層の数が増えている。I、J区の土層について、地質学的見地での指導を受けたところ、明らかに人工的であり自然にはありえないとの指摘を受けた。H区で掘り残した場所で遺構が変化している可能性も考えられる。

調査区ごとに掘削後すぐに埋め戻しをおこなう調査であるため、土層について総合的な検討を加えることができなかった。一連の遺構と捉えているが、この中には自然堆積と人為的な堆積部分が混在している可能性がある。したがって、その規模、性格については不明である。

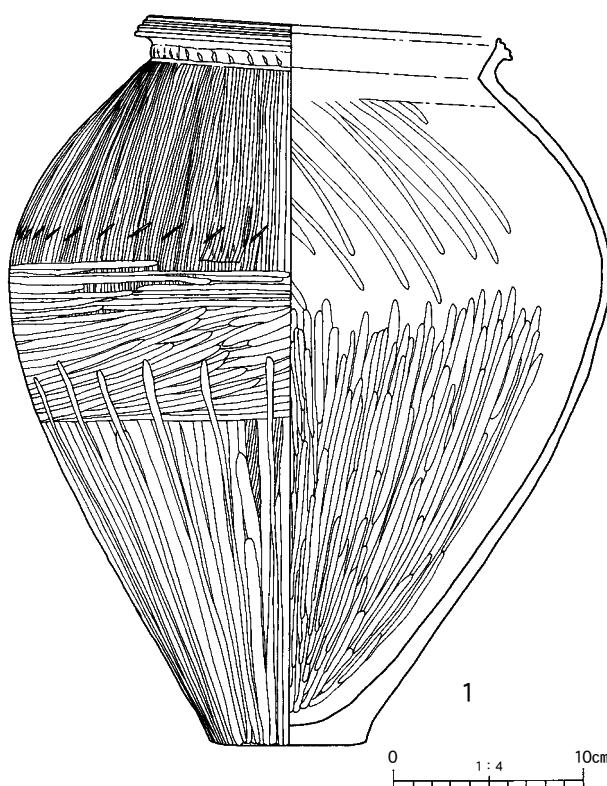
### 弥生時代中期末～後期初頭の遺構面（第32図）

K区東隅の地山直上で、弥生時代中期末～後期初頭の甕1個体が出土した（第32、33）。甕の周囲には大小の炭が散乱していたことから、甕単独の出土ではなく、甕の周辺には遺構面が存在したと思われる。K区内に遺構は検出されなかったが、周辺に弥生時代中期末～後期初頭の遺構が存在する可能性は高い。

また、この土器の出土によって弥生時代中期～後期初頭から今日まで、K区では第31図77層以下が削平を受けていないことがわかった。

#### 【遺物】

A～F区は遺物の出土量が少なく、A区では地山直上から土師器の複合口縁（第34図1）、B区では揚土の中から土師器の甕（第34図2）が出土したが、C区は遺物が出土しなかった。



第33図 3-K区地山直上出土遺物実測図

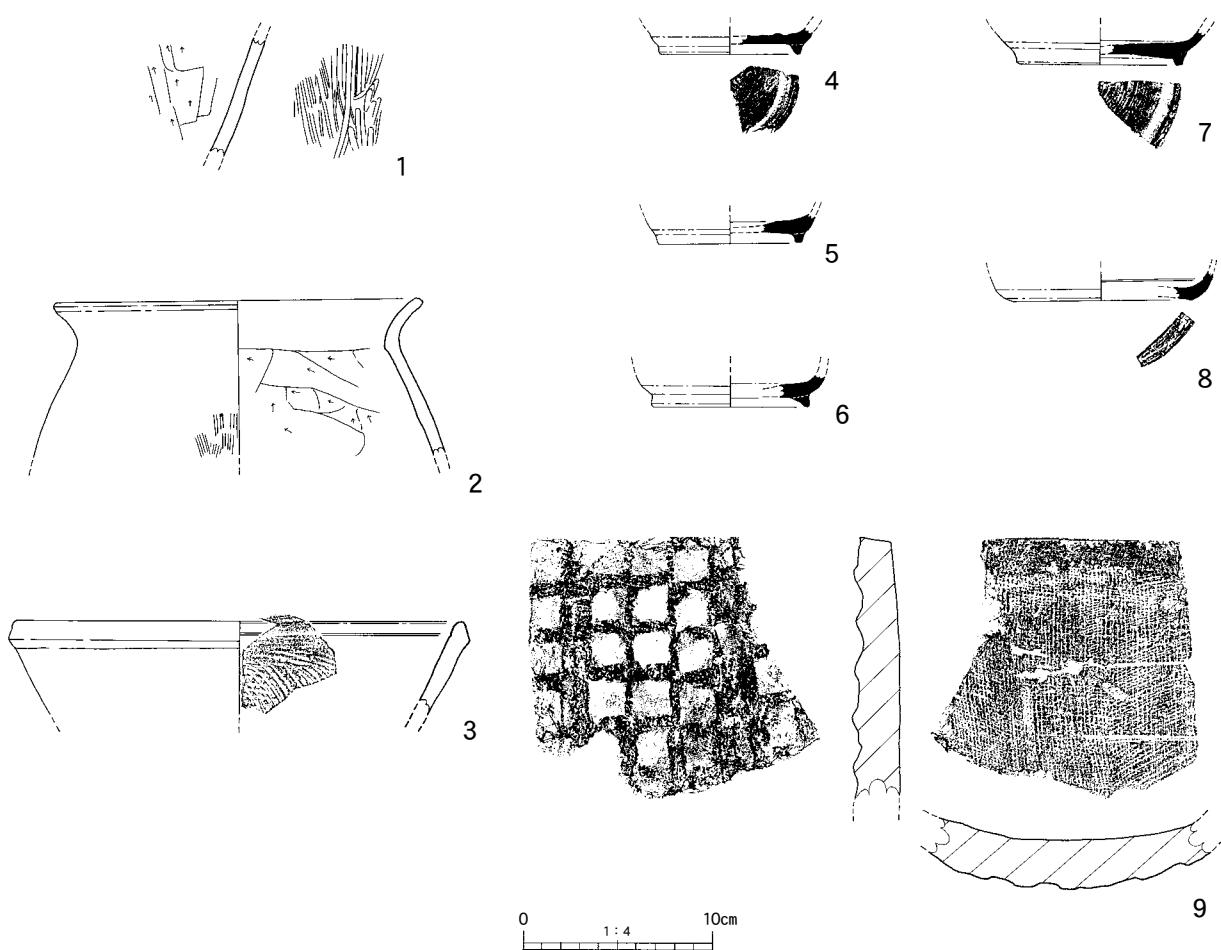
D区（第35図）では若干遺物量が増え、1は地山直上から出土した土師器の甕である。2以降は灰色粘質土層（第31図13）、濃褐色粘質土層（第31図15）から出土した遺物で、2は土師器の甕、3は須恵器の鉢で軟質である。内面が粗くハケメ状に調整されている。4～7は高台付壺、8は壺、9は平瓦である。

E区（第36図）からは製塩土器が出土し、F区（第37図）では製塩土器（1）と丸瓦（2）が出土した。

G区（第38図）の遺物は濃褐色粘質土（第31図15層）と揚土から出土した。1は土師器の甕、2は土師器の羽釜で外面には煤が付着している。出土層は不明である。3～9は濃褐色粘質土（15層）から出



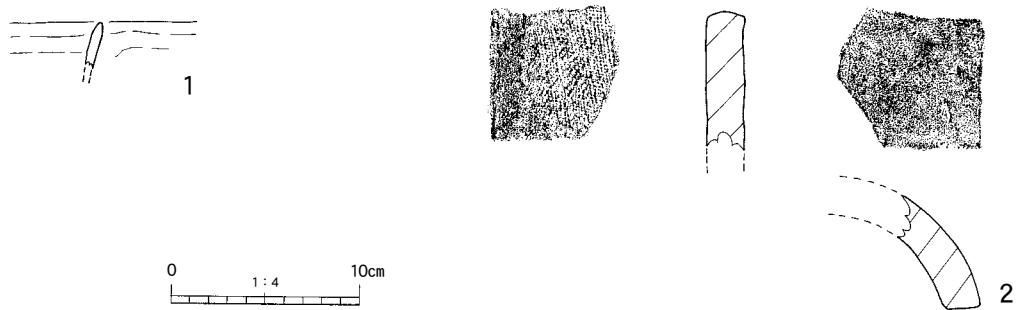
第34図 3-A・B区出土遺物実測図



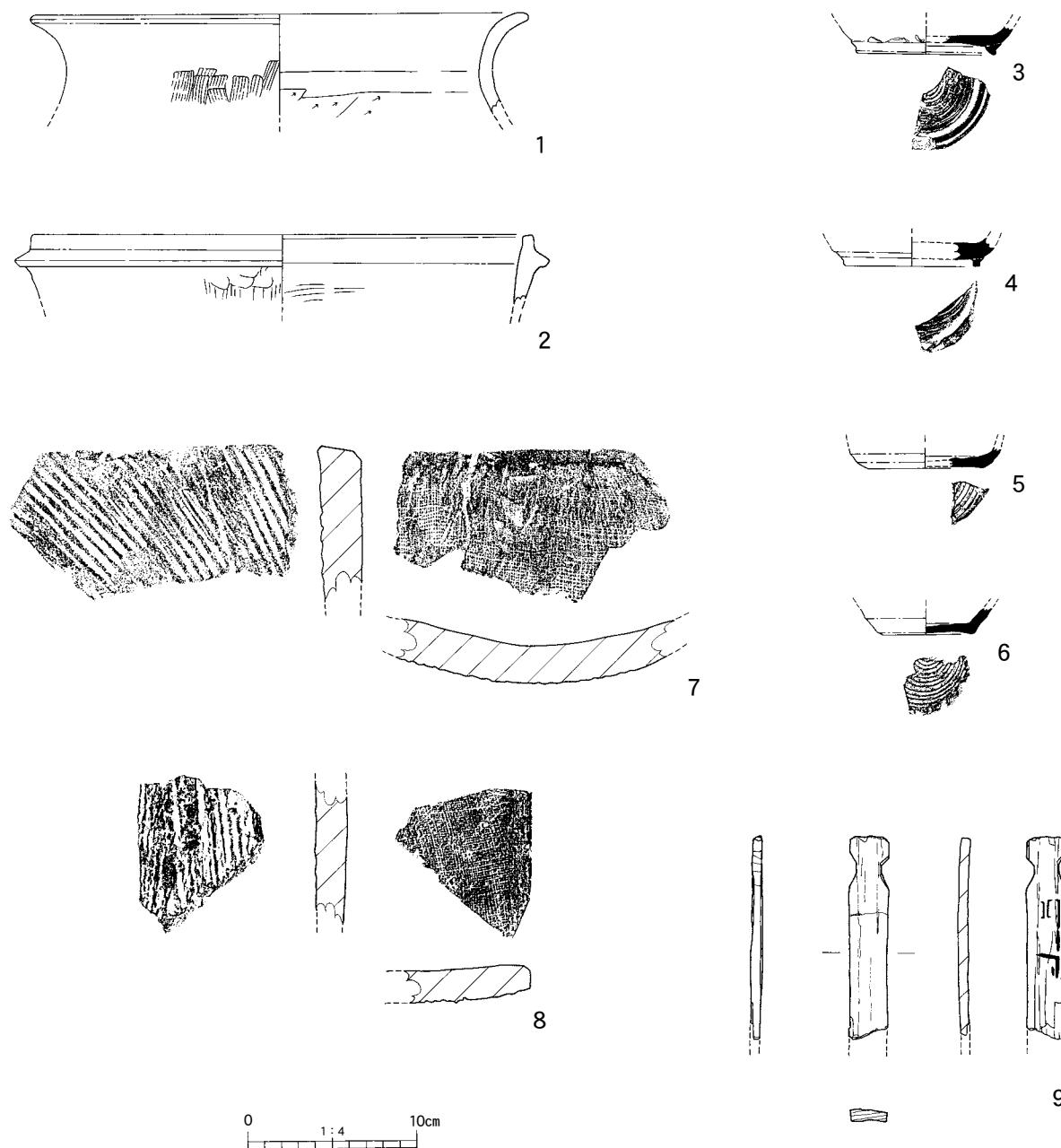
第35図 3-D区出土遺物実測図



第36図 3-E区出土遺物実測図



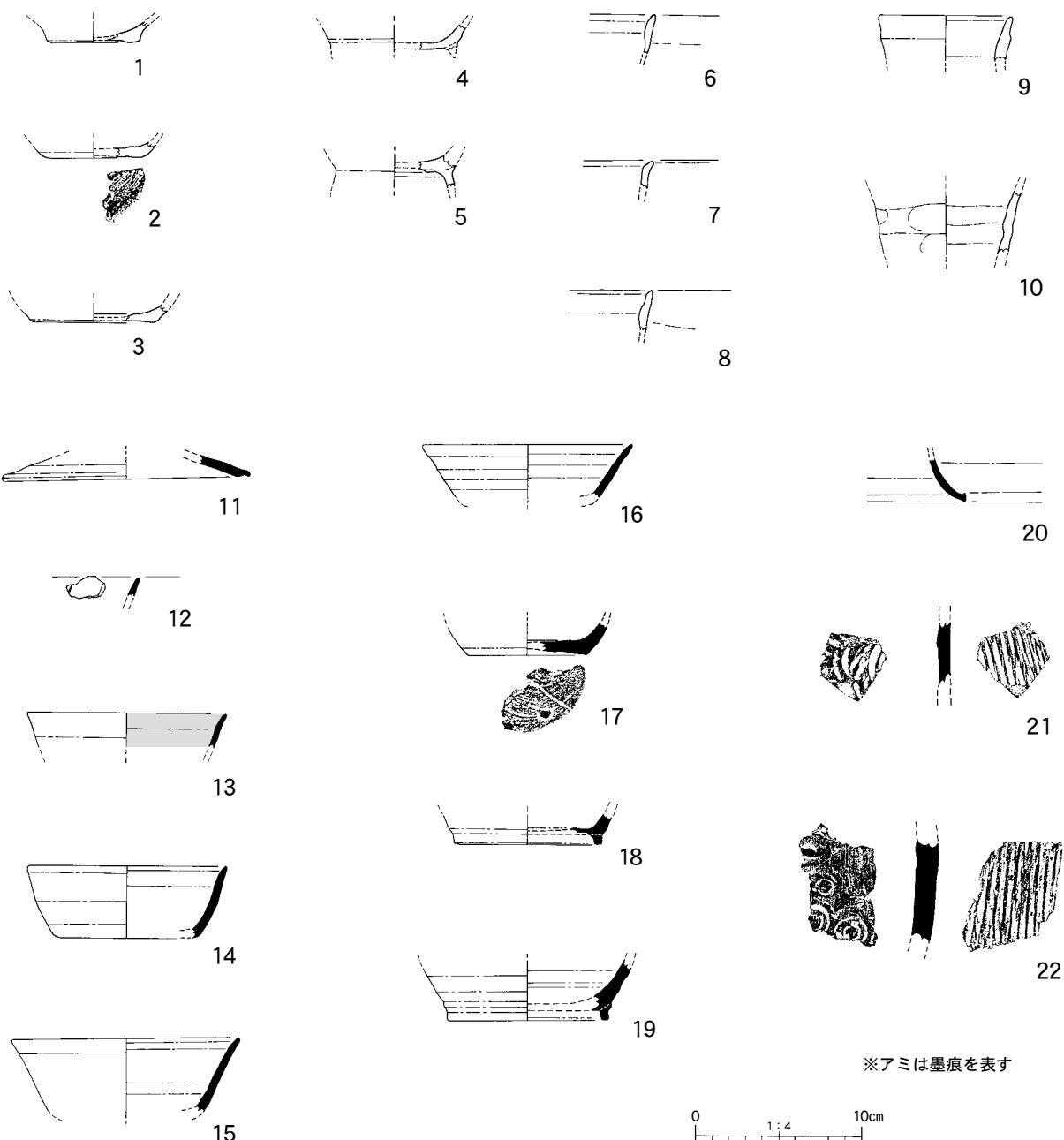
第37図 3-F区出土遺物実測図



第38図 3-G区出土遺物実測図

土した遺物で、3、4は須恵器の高台付坏、5、6は無高台の坏である。7、8は平瓦で、外面は布目压痕、内面はタタキで調整されている。8は木簡で、揚土の中から見つかった。幅2.4cm、厚さ0.8cmを測り、上部12cmが残存している。上端から1.5cm下がった位置に左右対称の台形状切り込みが入り、おそらく4文字が書かれている。墨痕が薄く確信はないが、一番上の文字は「門」の可能性がある。他の3文字については全く判読不可能である。

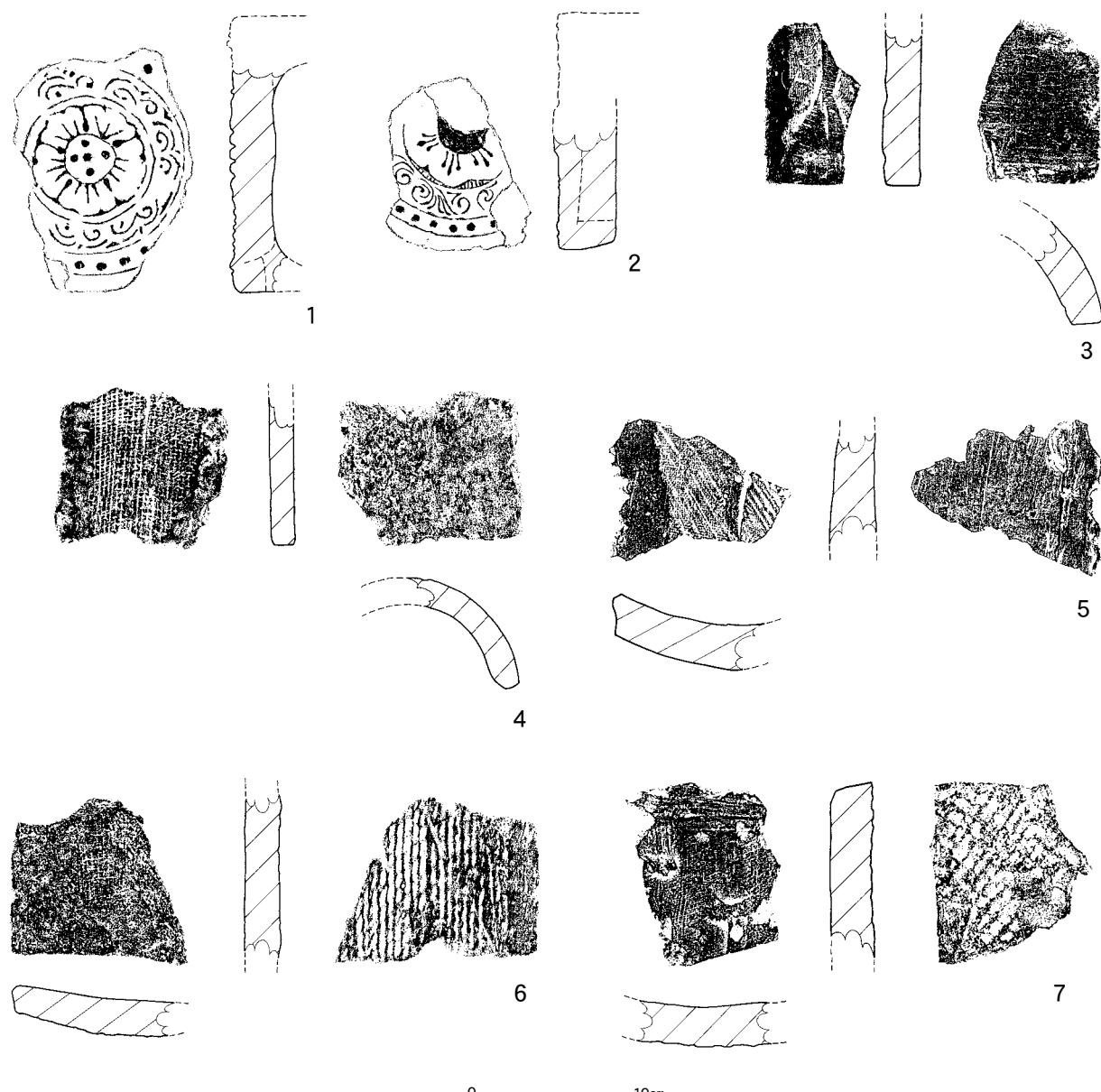
H区の遺物は濃褐色粘質土（第31図15層）と揚土から出土した。第39図1～3は土師器の坏、4、5は高台付坏で、いずれも風化が著しい。6～10は製塩土器で、外・内面とも粗いナデ調整が施されている。11～22は須恵器である。11は蓋、12は坏の小片で、内面に墨書の一部が残っている。筆の「入り」の部分だけなので、判読不可能である。13は坏で、内面全体に薄く墨痕が残存している。14も坏であ



第39図 3-H区出土遺物実測図（土器類）

る。15は高台付坏である。16、17は坏、18、19は高台付坏である。20は高坏の脚部である。21、22は甕胴部の破片で、内面には当て具痕、外面にはタタキ痕が見られる。第40図1は軒丸瓦の瓦当部である。内区中央の蓮子数は5つ、蓮弁は5枚で、外区の唐草文の簡略化が著しい。2も軒丸瓦の瓦当部である。蓮子の表現が省略されているが、外区の唐草文表現は丁寧である。3、4は丸瓦で、外面は丁寧なナデ、内面は布目圧痕が残っている。5は平瓦のようであるが、外面は布目圧痕、内面はケズリ調整されているほか、厚みがあることから軒平瓦と思われる。6、7は平瓦で、外面は布目圧痕、内面はタタキで調整されている。

I区の遺物は濃褐色粘質土（第31図15層）と揚土から出土した。第41図1～3は土師器の坏で、風化が著しい。4、5は須恵器で、4は壺の肩部、5は壺の底部と思われる。6、7は製塩土器である。8は丸瓦で外面は丁寧なナデ、内面は布目圧痕、9は平瓦で外面は布目圧痕、内面はタタキで調整されている。

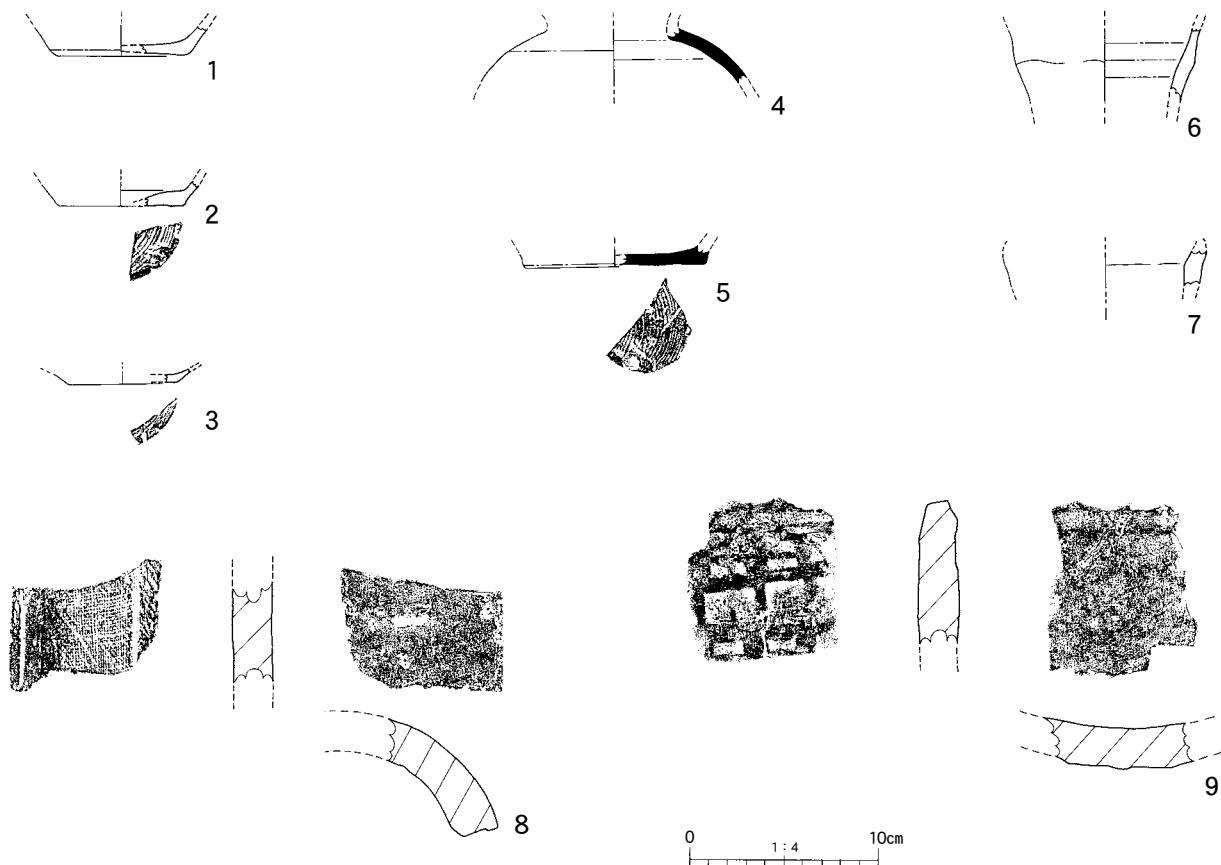


第40図 3-H区出土遺物実測図（瓦類）

J区の遺物は濃褐色粘質土（第31図15層）と揚土から出土した。第42図1は土師器の坏、2は高台付坏である。3は製塩土器で、内外面とも粗いナデ調整が施されている。4は土師器の高台付鉢の底部である。5～13は須恵器で、5は宝珠状つまみを欠損した蓋、6は蓋の口縁部、7～9は坏で、9の底部外面の糸切痕には墨書がある。底部の約3分の2を欠損しているため読めないが、「西」の左上のような感じである。10は高台付長頸壺の底部、11は壺の底部、12、13は甕の胴部である。14は玉縁の丸瓦、15は丸瓦で、ともに外面はナデ、内面は布目压痕で調整されている。16は平瓦で外面は布目压痕、内面はタタキで調整されている。

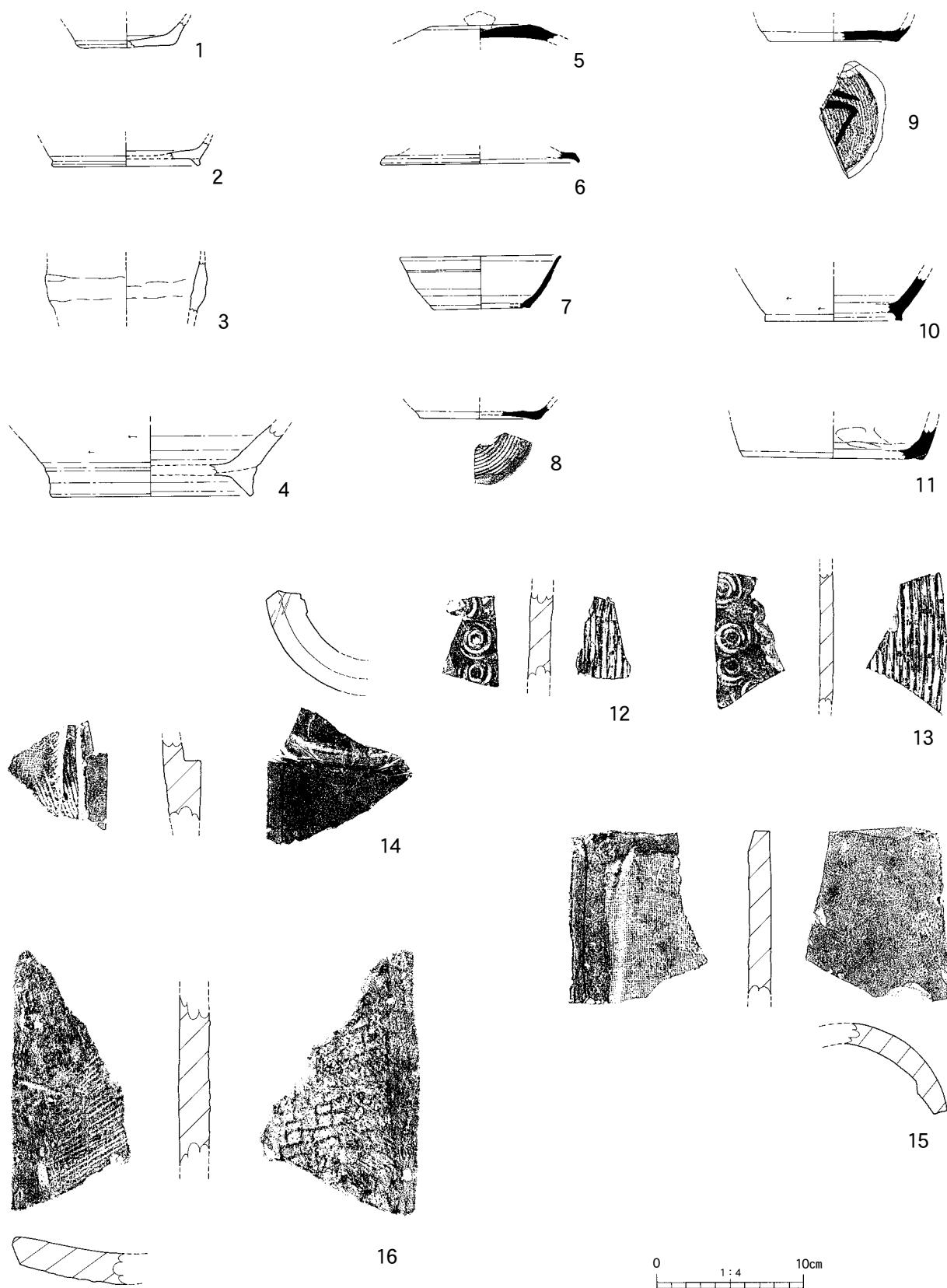
K区では地山直上から甕（第33図1）1個体が出土した。口径18.6cm、頸径18.0cm、胴部最大径31.8cm、底径8.3cm、器高38.5cmを測り、口縁端部には2条凹線、頸部には指頭压痕文帯が廻らされている。胴部外面は基本的に縦方向のハケメであるが、底部から胴部中央付近まで縦方向のヘラミガキ、胴部中央付近には幅8cmにわたって横方向のヘラミガキ、さらにその後底部から放射状に一定間隔をあけて暗文状のヘラミガキが施されている。内面は下半分が縦方向のヘラミガキ、上半分はミガキ後ナデ、さらに斜方向の疎らなヘラミガキが施されている。弥生時代中期末～後期初頭に位置づけられる。

K区のその他の遺物は主に濃灰色粘質土（第31図15層）から出土した。第43図1は土師器の坏、2～12は須恵器で、2は蓋、3は坏の口縁部である。4～6は高台付坏で、7～9は無高台の坏である。10は皿、11は高台付皿で軟質である。12は高坏の脚部、13は甕の胴部破片である。14は軒平瓦、15は玉縁の丸

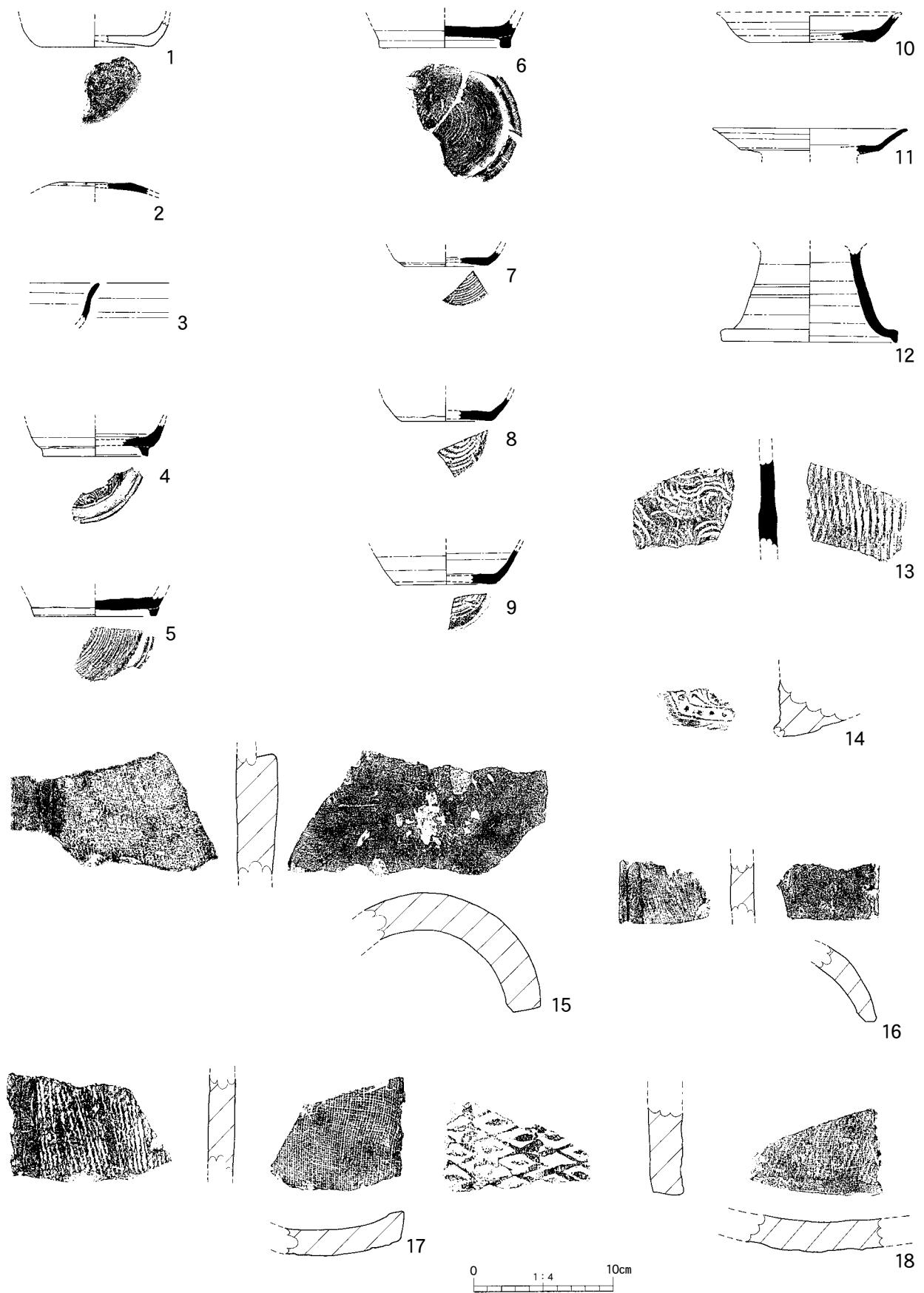


第41図 3-I区出土遺物実測図

瓦の基部、16は丸瓦で、外面はナデやケズリ、内面は布目压痕で調整されている。17、18は平瓦で、外面は布目压痕、内面はタタキで調整されている。



第42図 3-J区出土遺物実測図



第43図 3-K区出土遺物実測図

### 第3節 総括

1区ではピット4基（SP01～04）と土坑14基（SK05～18）を検出した。

ピットは白色粘土（地山）上面で平面プランを検出したが、建物を復元することはできなかった。土坑も白色粘土（地山）上面で平面プランを検出したが、北壁土層で確認すると白色粘土より1層上の層から掘り込まれている。平面プランは不整形なものばかりで規格性は認められなかった。床面が平坦な土坑は少なく、一部では土坑に複雑な切り合い関係がみられた。出雲国分寺の周辺には良質な白色粘土層が分布しており、近年まで瓦の原料として粘土の採掘がおこなわれていたことから、古代においても土器製作のための粘土採掘が繰り返しおこなわれてきた跡と考えられる。土坑の中から古墳時代前期～後期の土器が出土したので、ここではその時期に粘土が採掘されたのであろう。江分遺跡の北東40mに位置する中竹矢遺跡<sup>(3)</sup>でも同様の土坑が73基確認されており、一連の遺構群となる可能性が高い。

2区では水平堆積層の下から掘られた遺構2基（SX18、19）を検出した。2基とも北壁土層観察で検出した遺構で、平面プランがわからないため、遺構の性格は不明である。

3区では地山を60cm掘り下げた遺構SX26を検出した。SX26は3-J区を西端としてその範囲は少なくとも3-A区まで続く遺構としているが、調査区ごとに掘削した後すぐに埋め戻しするという制約のある調査であったため、土層について総合的な検討を加えることができなかった。したがって、地山の深さが同じであることから一連の遺構として捉えたが、この中には自然堆積と人工的な埋土が混在している可能性があり、その規模と性格は今回の調査では結論が導き出せなかった。SX26の時期は、埋土（堆積土）中から8世紀以降の遺物が出土しなかったこと、SX26埋土の上に無遺物層1層を挟んで8世紀以降の遺物包含層が存在したことから、奈良時代より前の遺構と解釈したい。

3-K区では地山直上で炭の広がりをともなって、弥生時代中期末～後期初頭の甕がほぼ完全な形で出土した。弥生時代後期初頭以来、地山が露出することは無かったことを示している。

江分遺跡を調査するにあたっては、出雲国分寺に近いことから奈良時代の遺構検出を期待したが、明確なものは1区で出土した壺1つと2、3区に存在した遺物包含層のみであった。2、3区の遺物包含層は沼地のような粘性の強い灰色土で、8～12世紀の幅広い時期の遺物が混入しており、細片となつた遺物がまばらに出土する状況であった。二次堆積の包含層であることは間違いない。

また、意宇平野に見られる条里の跡では、江分遺跡の1区西端付近に里境が推定されている<sup>(4)</sup>が、今回の調査ではその遺構を検出することはできなかった。「意宇平野地割図」<sup>(5)</sup>を見ると、旧字「江分」の地は意宇川の氾濫によって条里が乱れた場所の西端に位置している。古代を復元するにはもう少し広い調査範囲で様子を見る必要があると考える。今後の調査に期待したい。

註(1) 松尾充晶氏のご教示による。

(2) 酒井哲弥氏のご教示による。

(3) 建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会『埋蔵文化財発掘調査報告書X』（中竹矢遺跡）1992年3月

(4) 中沢四郎「条里」『風土記の丘周辺の文化財』島根県教育委員会 1975年

(5) (4) に同じ。

### 3. 平成22・23年度出雲国分寺跡工事立会調査

#### 第1節 調査の方法と経過

平成22年度、一般県道八重垣神社竹矢線の拡幅工事に伴う立会調査を実施した（第44図）。

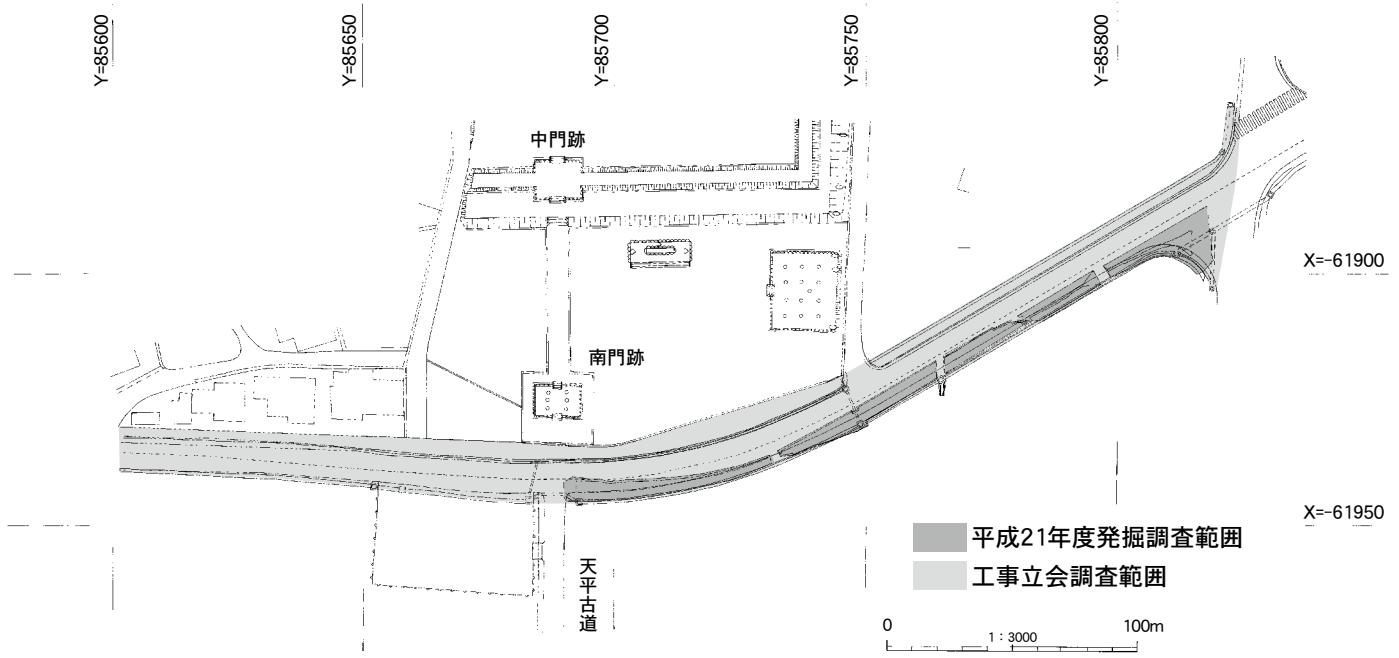
工事に伴う事前発掘調査は平成21年度に終了して報告書も刊行している<sup>(1)</sup>が、調査区の周縁は安全勾配で掘り下げており、水道管敷設場所や農業用水路など周辺住民の生活に支障が生じる場所については調査が完了していない。工事の設計は平成21年度の発掘調査成果を受けて出雲国分寺の遺構に支障が生じないよう十分に配慮されたが、新設される農業用水路は道路南辺、つまり平成22年度調査時に法面として残された未調査地にあり、所々に設置される溜枠には深い掘削が必要であった。また、既存道路の地下深くを横断する新設ヒューム管工事も計画されていた。そのような場所については特に注意する必要があった。

松江市教育委員会は工事業者と工事工程や工法等について協議を重ねた結果、掘削を伴う工事についてはすべて工事立会調査とした。そして、遺物包含層や遺構面に達する掘削があった場合は適宜緊急調査を実施した。また、遺構面に達していない場合においても可能な限り土層の観察をおこない、包含層から出土した遺物はすべて取り上げた。重要と思われる遺構が検出された場合は島根県教育委員会と協議をおこない、工事主体者に設計変更を依頼して現地保存ができるように努めた。

工事立会調査は平成22年12月21日～平成23年4月23日の間、42日間実施した。各所における柱状土層図や出土遺物など多数の成果を得たが、ここでは特に重要な成果を報告する。

#### 第2節 調査の報告

南門跡南側で瓦敷遺構を確認し、県道と市道春日手間線の交差点で国分寺の造成土及び造成土上面から掘られたピット群を確認し、国分寺南門跡南西部では土層観察をおこなった。



第44図 本調査実施範囲と工事立会調査範囲

### (1) A地点 (第45図)

側溝設置のため、南門正面より西寄りの場所を掘削したところ、レベルが異なる瓦敷遺構2面（瓦敷遺構I、II）を検出した。瓦が敷かれた範囲の平板図と土層断面図を作成し、写真を撮影した。

### 【層序】 (第46図)

上からアスファルト、碎石（1）、茶灰色砂質土（2）、黄褐色土（4）、灰色砂質土（5）、茶灰色粘質土（6）で、6層の半ばで瓦敷遺構Iを検出した。瓦敷遺構Iの上下は変化の無い6層で、6層の下面でさらに瓦敷遺構IIを検出した。瓦敷遺構IIは暗灰褐色粘質土（7）の上面に貼り付いており、7層の下が国分寺造成土と理解されている白斑灰色粘質土層（8）、地山の白色粘土（9）である。

国分寺造成土は上面標高5.0～5.2m、厚さ66cmを測る。地山の標高は4.86～4.88mを測る。

### 【遺構】 (第46図)

レベルが異なる瓦敷遺構2面を検出した。瓦敷遺構Iと、その下の瓦敷遺構IIである。

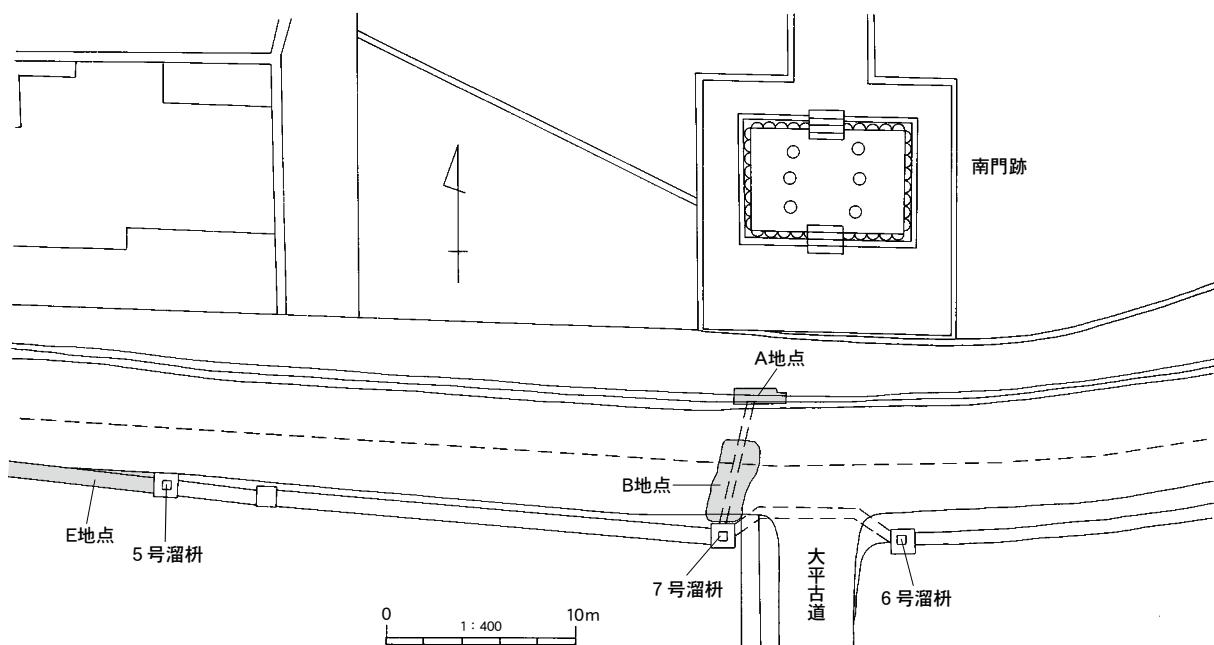
#### ①瓦敷遺構I

標高4.6～4.7mで検出した瓦敷遺構で、西側は搅乱を受けている。茶灰色粘質土層（6）の半ばに自然石や瓦が高い密度で敷きつめられており、瓦片に重なり合いは見られない。6層の下に瓦敷遺構IIが存在することから、瓦敷遺構IIが補修された可能性が指摘される。遺構は真砂土で保護して現地保存とした。

#### ②瓦敷遺構II

瓦敷遺構Iより約20cm低い、標高4.4～4.5mで検出した瓦敷遺構である。国分寺造成土（8）の上に暗灰褐色粘質土（7）があり、その表面に高い密度で瓦片が敷きつめられていた。瓦片に重なり合は無く、瓦片は一边10cm前後、割口は丸味を帯びていた。

平成11年の調査で検出された瓦敷遺構と、レベル、下方の層序が近似していることから、一連の遺構である可能性が高い。遺構は真砂土で保護して現地保存とした。



第45図 瓦敷遺構A、B地点とE地点

## 【遺物】

瓦敷遺構Ⅰ、Ⅱから出土した瓦は、風化が進んで全体が丸味を帯びた一辺10cm以下の破片が多くかった。検出した大量の瓦は、真砂土で保護して埋め戻して現地保存とした。

## (2) B地点 (第45図)

7号溜枠から北へ向けての管路掘削で瓦敷遺構Ⅲとピット1基を検出した。

## 【層序】 (第47図)

上から現代の盛土(1)、暗灰色粘質土(2)、淡灰色粘質土(3)で、その下が瓦敷遺構の上面である。この遺構を東西方向に断ち割ったところ、瓦敷遺構は暗灰色粘質土(4)の上面にあり、4層の下が国分寺造成土と理解されている灰色粘質土と暗灰色粘質土が混じり合った層(5)、地山の黄灰色粘質土(6)である。なお、図中の土層図は西壁で観察した層序と瓦敷遺構より下方で観察した層序を合成させたものである。

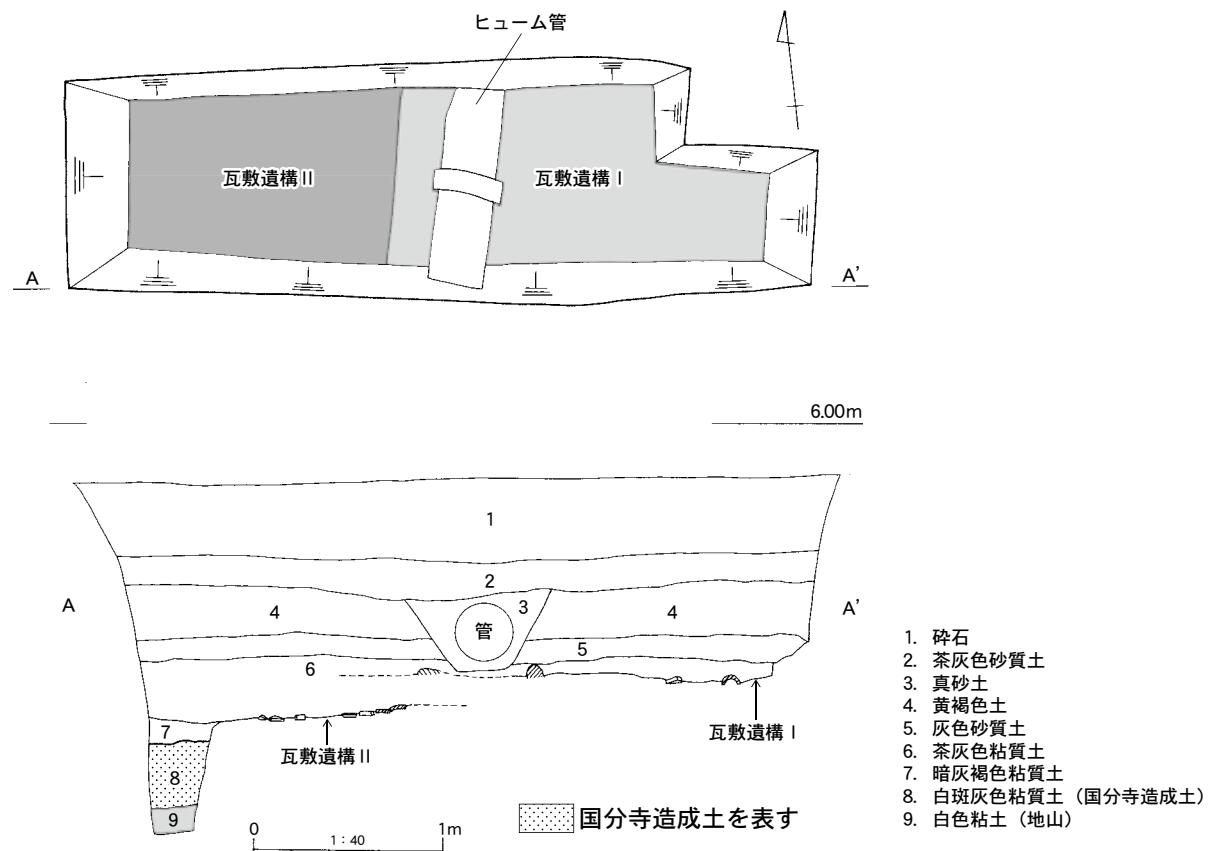
国分寺造成土は上面標高4.3m、厚さ38cmを測る。地山上面は標高3.08mを測る。

## 【遺構】 (第47図)

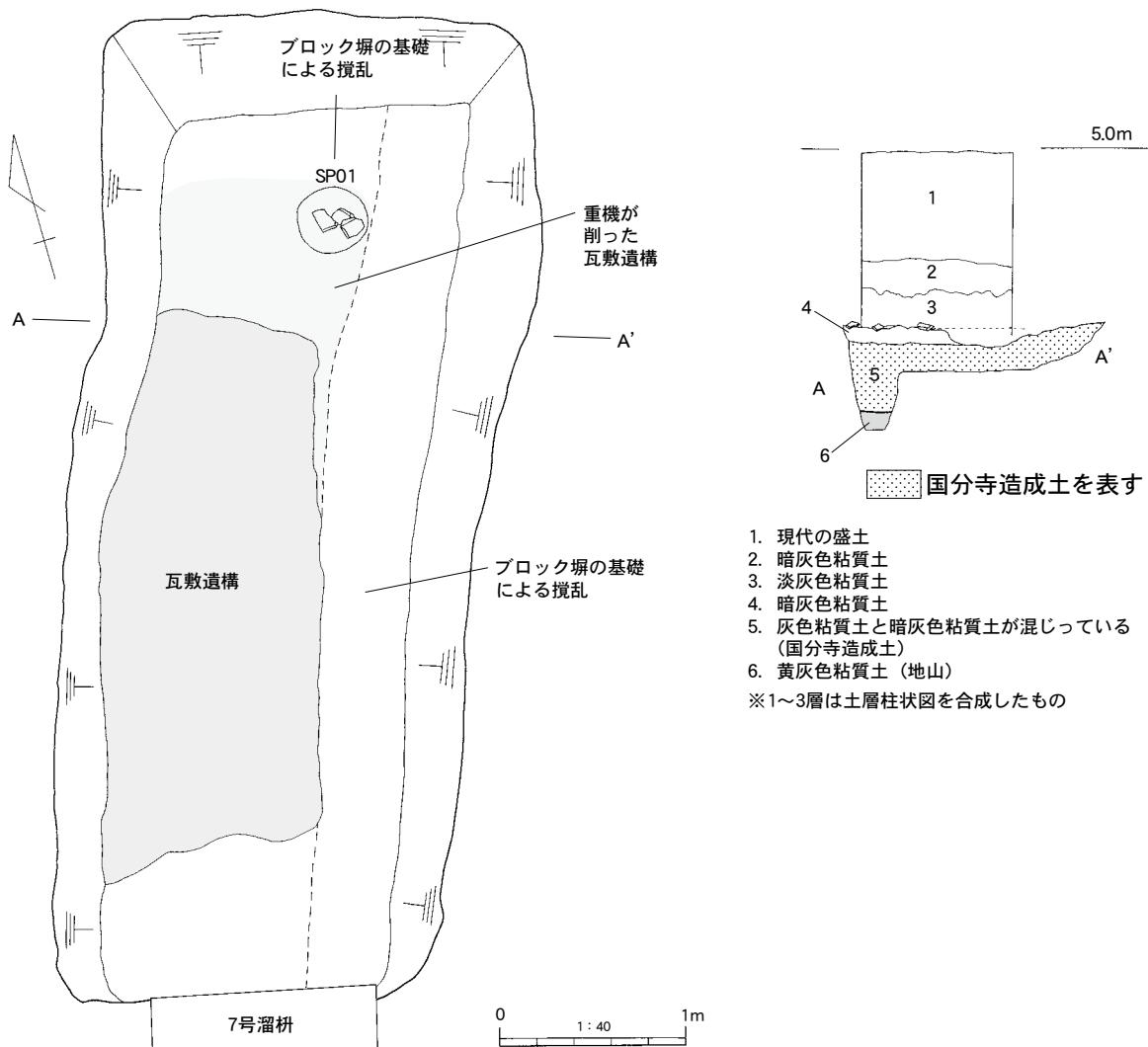
瓦敷遺構とピットを検出した。

### ①瓦敷遺構Ⅲ

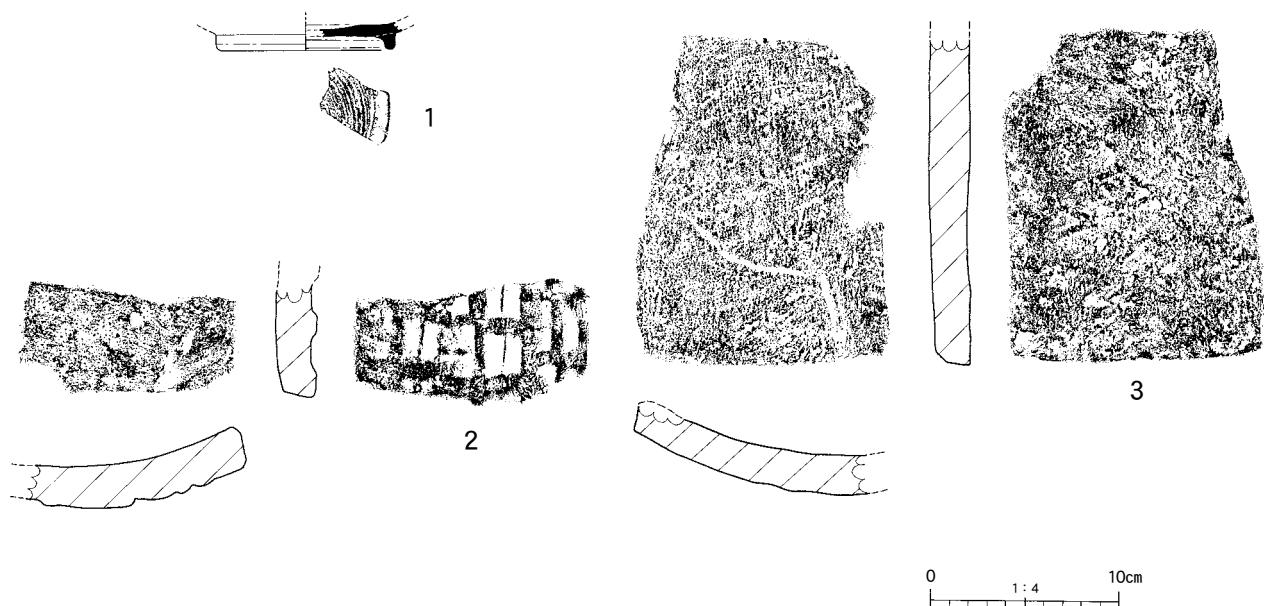
瓦敷遺構の東と南はブロック塀の基礎によって搅乱を受けていたが、北壁で瓦敷遺構が続いていることを確認した。遺構の断ち割り断面を観察したところ、国分寺造成土の上に暗灰色粘質土が5cm程度入り、その上面に瓦片が敷きつめられていた。遺構のレベルは標高4.4mで、上面には5cm前後の凹



第46図 A地点の瓦敷遺構実測図



第47図 B地点の瓦敷遺構実測図



第48図 B地点瓦敷遺構の瓦実測図

凸が見られた。

平成11年に隣接地が調査されており、その成果として標高4.5~4.6mで瓦敷遺構が検出されている。レベルが近似していること、ともに国分寺造成土との間に暗灰色粘質土をはさむことから、一連の瓦敷遺構である可能性が高いと考える。遺構は真砂土で保護して埋め戻して現地保存とした。

## ②SP01

ピットSP01を1基検出した。SP01は瓦敷遺構の北方にあり、瓦敷遺構の遺構面またはその下面から掘られた可能性が高い。平面プランは円形で直径35cmを測る。中央部分には柱痕と思われる土色の違いがあり、根固めの石や瓦片が確認された。埋土は掘削せず現地保存としたので、深さは不明である。

### 【遺物】(第50図)

瓦敷遺構では大量の瓦片が出土した。瓦片の大きさは一辺10cm以内のものが大半で、割れ口は風化して丸味を帶びていた(2、3)。器種判別のつかない須恵器の極小破片も若干混じっていた(1)。瓦片は断ち割りトレーナーから出土したものだけ取り上げ、その他は真砂土で保護して埋め戻して現地保存とした。

### (3) C地点 (第49図)

県道八重垣神社竹矢線と市道手間春日線の交差点付近で、国分寺造成土とその上面から掘り込まれた遺構を確認した。

### 【層序】(第50図)

南壁では、上からアスファルト(1)、道路建設時の盛土(2)、暗灰色粘土(3)、灰色シルト(4)、黄灰色粘土と青灰色粘土と暗灰色粘質土が混じりあった土(6)、灰色粘質土層(7)、地山の白色粘土(8)である。6と7の2層が国分寺造成土で、7層からは古墳時代後期の甕(第51図1)が出土した。

4層からは現代の陶器が出土したので、国分寺造成土より上の層は現代の層である。

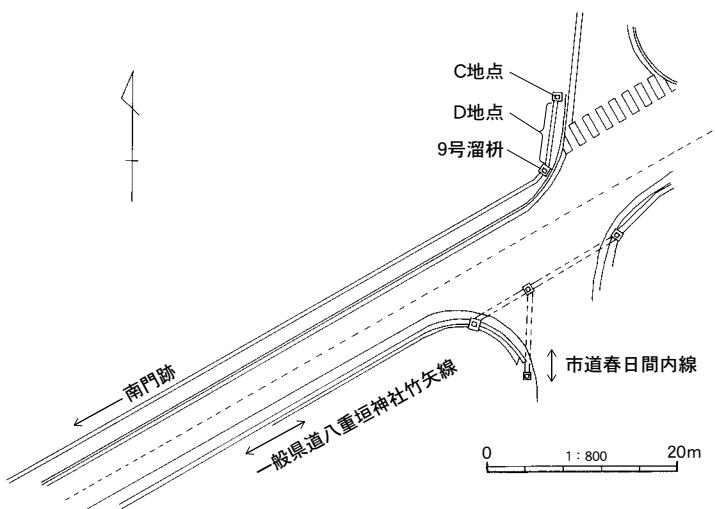
国分寺造成土は上面標高4.55m、厚さ31cm、地山の上面標高は4.14mを測る。

### 【遺構】(第50図)

国分寺造成土の上面からピット2基を検出した。SP02は上端径26cm、下端径14cm、深さ34cmを測り、埋土は黒色土1層である。須恵器の皿(第51図4)と砥石(第51図5)の破片各1点が出土した。SP03は平面プランのみの確認で掘り込みはおこなっていない。平面プランは円形で、直径は16cmであった。遺構面は真砂土で保護して埋め戻して現地保存とした。

### 【遺物】(第51図)

1は土師器の甕で、口径21.1cm、胴



第49図 C地点とD地点の位置図

部最大径24.3cmを測り、体部は外面ハケメ、内面ケズリで調整されている。2～4は須恵器で、2は高台付壺、3、4は高台が付かない皿、5は砥石の表面が剥離した破片である。

#### (4) D地点(第49図)

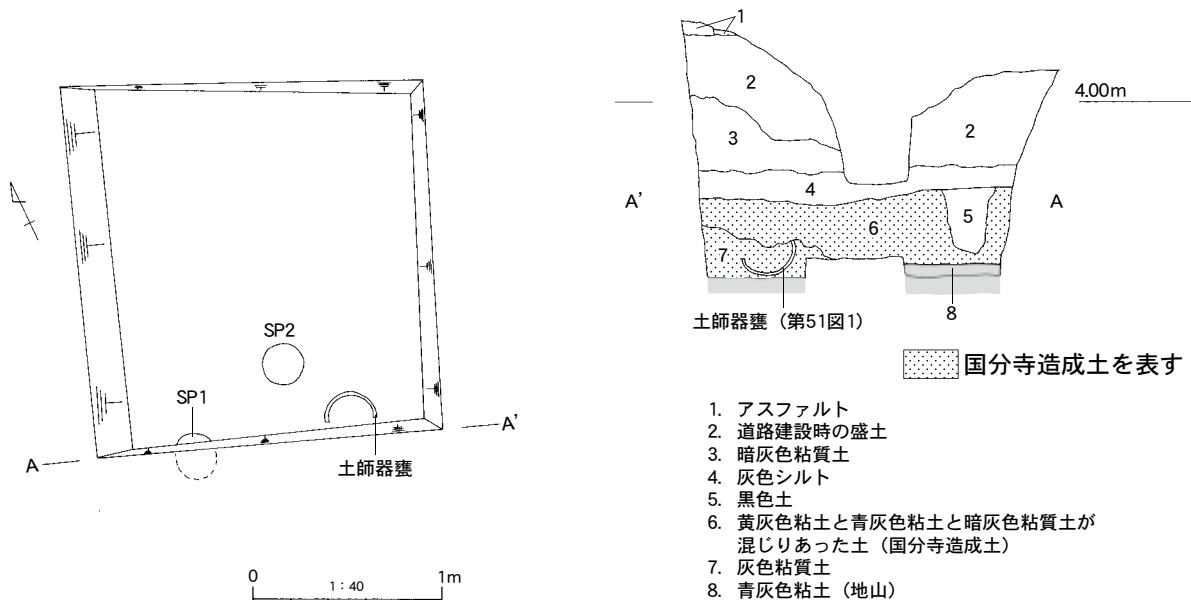
9号溜枡から10号溜枡への管路掘削でピット群を検出した。

#### 【層序】(第52図)

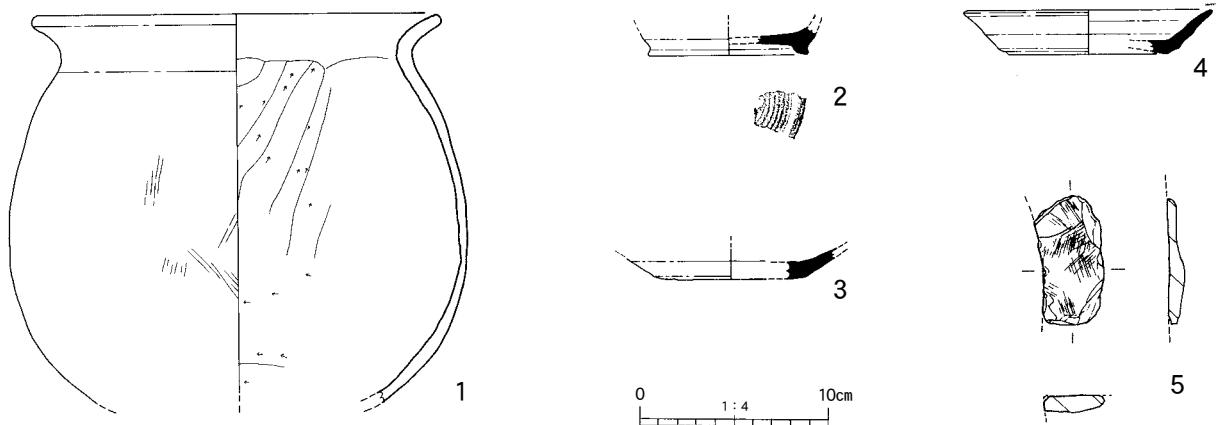
西壁では、上から表土(1)、現代の造成土(2)、灰橙色シルト(3)、砂粒が細かい灰橙色シルト(4)、黒褐色土(5)、灰色粘質土(6)、地山の黄橙色粘質土(7)である。ここでは国分寺造成土が存在せず、黄橙色粘質土が基盤層となり、基盤層の上面標高は4.5～4.3mで南に向けて下がっていた。

#### 【遺構】(第52図)

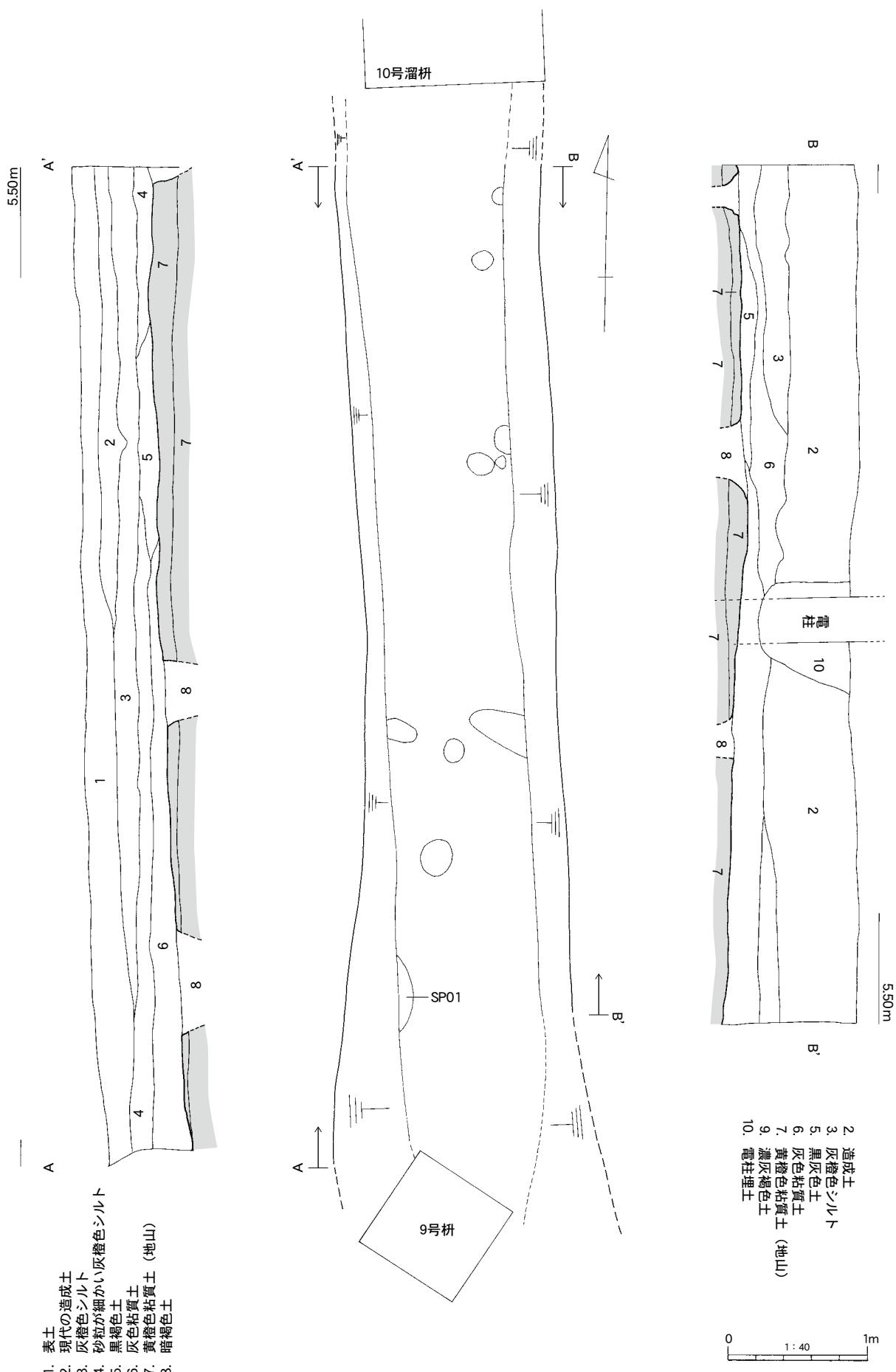
基盤層上面の精査で、直径15～25cm程度のピット9基と大型と推定されるピットSP01の平面プランを検出した。ピットの平面プランは全て円形で、埋土は暗褐色土であった。ピット埋土の上層からは



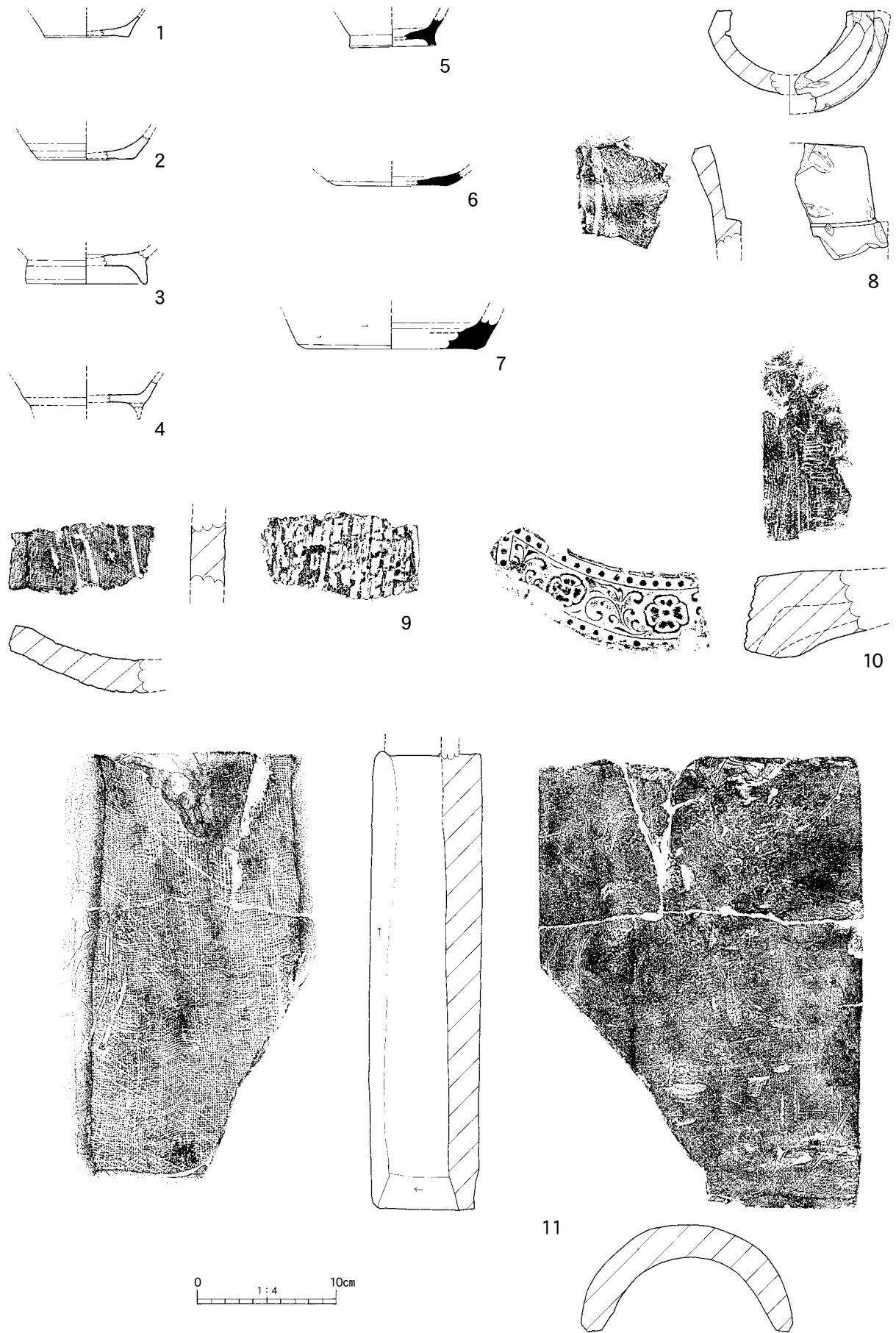
第50図 C地点で検出した遺構の平面図、土層断面図



第51図 C地点出土遺物実測図



第52図 D地点で検出したピット群と土層断面図



第53図 D地点で出土した遺物実測図

土師器の壺（第53図1）と須恵器の壺（第53図6）が出土した。掘削範囲が狭いため、建物跡を復元することはできなかった。ピットの掘り下げはおこなわず、現地保存とした。

#### 【遺物】（第53図）

灰色粘質土（第52図6）中から瓦、須恵器片が大量に出土した。

1～4は土師器で、1、2は壺、3、4は高台付の壺である。5～7は須恵器で、5は壺、6は壺、7は中世須恵器の甕である。

8は玉縁の丸瓦の基部で外面はナデ、内面は布目压痕の痕がある。9は平瓦で外面には布目压痕、内面にはタタキの痕がある。10は軒平瓦の瓦当部分、11は基部を欠損した玉縁の丸瓦である。

#### (6) E地点（第49図）

8号溜柵西方の暗渠型側溝管路撤去工事（第45図）で、南門跡南西部の土層堆積状況を観察した。

#### 【層序】（第54図）

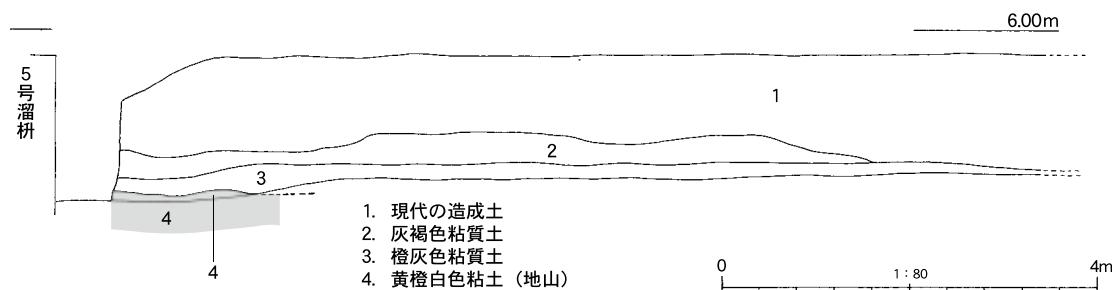
上から現代の造成土（1）、灰褐色粘質土（2）、橙灰色粘土（3）、地山の黄橙白色粘土（4）である。

2層はビニールを含む現代の旧耕作土で、3層から瓦片が大量に出土した。

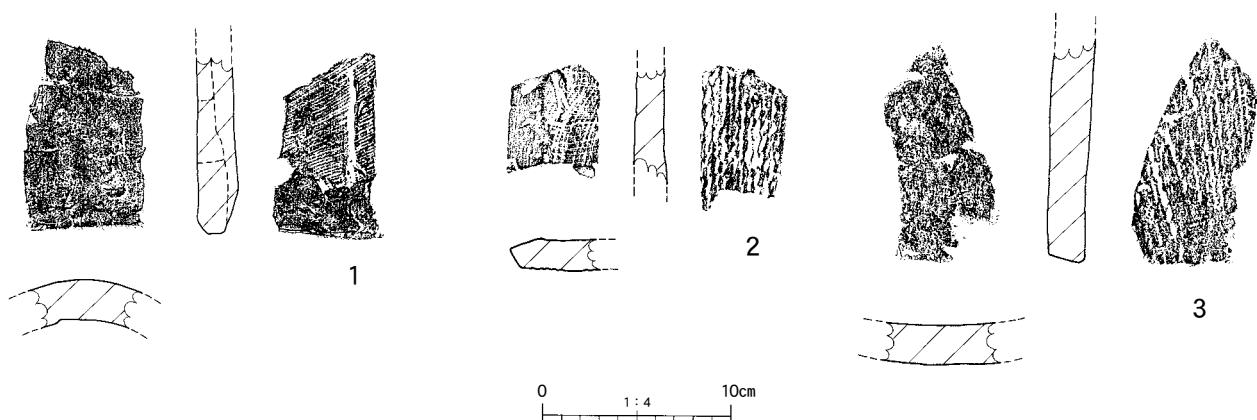
地山の上面標高は4.3mであった。

#### 【遺物】（第55図）

1は丸瓦、2、3は平瓦の風化した破片である。



第54図 E地点土層図



第55図 E地点出土遺物実測図

### 第3節 総括

出雲国分寺の南門前を掘削した結果、A地点で上下2面、B地点で1面の瓦敷遺構を検出した。

A地点下方の瓦敷遺構ⅡとB地点の瓦敷遺構は、国分寺造成土の上に1層をはさみ、その上に位置していた。A地点瓦敷遺構Ⅱの上面標高は4.5m、B地点の瓦敷遺構の上面標高は4.1mを測る。平成11年度の天平古道発掘調査で検出された瓦敷遺構は層序、遺構の上面標高がA地点の瓦敷遺構Ⅱとほぼ等しい<sup>(2)</sup>ことから、一連の瓦敷遺構と考えられる（第59図）。さらに、A地点では瓦敷遺構Ⅱの上方20cmで、さらにもう1面の瓦敷遺構Ⅰが検出された。そこは南門に近い位置にあるため、瓦敷遺構Ⅰは南門に至る階段<sup>(3)</sup>に向けて参道の標高を徐々に上げた遺構、もしくは単純に補修工事の跡と考えられるが、立会調査の範囲ではどちらとも確定できなかった。

B地点の瓦敷遺構は天平古道発掘調査で検出された瓦敷遺構より約40cm低くなっているが、それはB地点が参道から外れた場所にあたり、参道の排水が考慮された結果かもしれない。

瓦敷遺構の範囲は、平成22年度出雲国分寺跡発掘調査で瓦敷遺構が検出されなかつたことから、南門の幅程度であったと推察される。南方への広がりはわからない。

南門前の参道、いわゆる天平古道について言及すると、それは昭和30年の調査で「幅20尺の石敷き」道路と報告されている<sup>(4)</sup>。今回の工事立会調査では石敷遺構は検出できなかつた。南門からかなり程度離れた地点から瓦片の代わりに石が利用されているのかもしれない。今後の調査を待ちたい。

以上、断片的な調査成果からやや大胆な推論を展開したが、南門前に瓦敷遺構が存在したことだけは確かな事実であり、大きな成果であった。また、ピットが1基見つかったことから、簡易な施設が存在していた可能性もある。伽藍域に入る前の仕度場所としても必要なスペースであったのかもしれない。

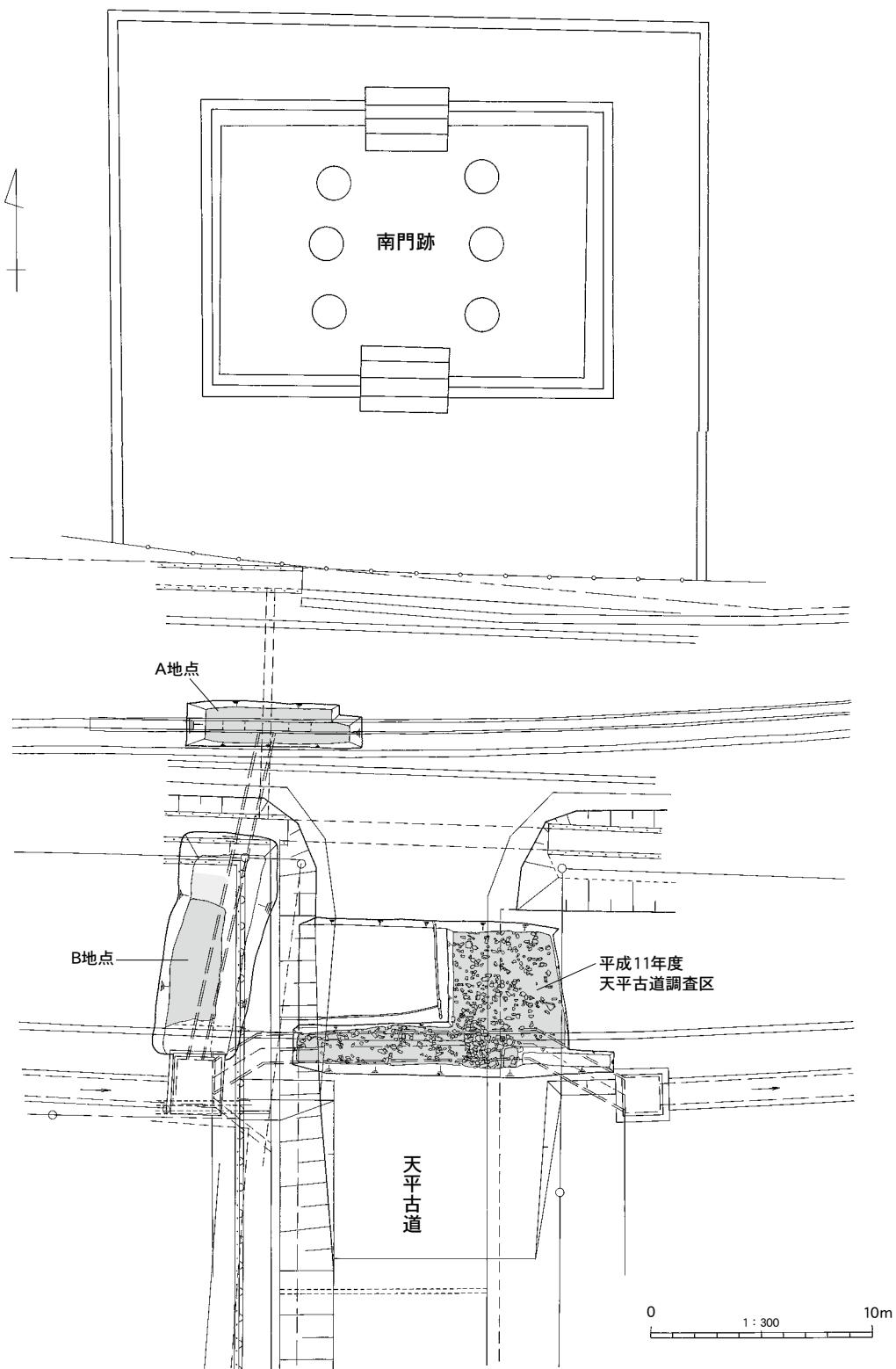
C地点では国分寺造成土が盛られた状況を確認した。国分寺造成土の上面標高は4.55mで、造成土上面でピット2基が検出された。ピット埋土から9世紀末の遺物が出土したので、9世紀末以降の遺構である。

D地点はC地点に南接しているが、国分寺造成土が存在しなかつた。標高4.5m前後の地山が基盤で、大小10基のピットが検出された。調査範囲が狭いため、掘立柱建物を復元することはできなかつた。遺物は多数出土したが、遺構に伴う遺物が出土しなかつたため、遺構の時期は不明である。

E地点は平成22年度出雲国分寺跡発掘調査地から西に続く場所である。土層観察をおこなつた結果、ここでは国分寺造成土は存在せず、地山が基盤層となり、標高は東端で4.3mであった。

最後に国分寺基盤層の標高について記すと、南門前のA、B地点は厚い造成土で整地された基盤層があり上面標高は4.1～4.5mを測り、瓦敷遺構が存在する。E地点は南門の中心から南西へ約40m離れた場所で、地山が基盤となり上面標高は4.2mを測る。また、平成21年度調査<sup>(5)</sup>で、南門の中心から東へ55m離れた場所の地山直上に瓦敷遺構IVを検出しており（第57図）、その上面標高は4.2m、瓦敷遺構IVの東西は10～15cm地山が下げられており、標高4.05～4.1mであった。

以上のことから、南門正面には標高4.5m前後の参道（天平古道）があり、それはA区における二面の瓦敷遺構の存在から南門の階段に向けて緩やかな上り坂になつていた可能性がある。B区では遺構面が約40cm下がつてゐるので、参道の脇はレベルを下げて排水が図られていたと思われる。広い視野で見ると、南門前の参道から東西方向に50m離れた場所では、南門前より基盤面が下がり標高4.2m前後であったことがわかつた。



第56図 南門と瓦敷遺構

- 註(1) 松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団『出雲国分寺跡発掘調査報告書』2010年
- (2) 松江市教育委員会『出雲国分寺跡発掘調査報告書』2004年
- (3) 山本清「出雲国分寺」『国分寺の研究』平成3年
- (4) 地方史研究所『出雲国分寺址・国府址調査報告』昭和37年
- (5) 松江市教育委員会・(財) 松江市教育文化振興事業団『出雲国分寺跡発掘調査報告書』2010年を参照

## 第4章 調査成果から復元する出雲国分寺跡周辺の地形

一般県道八重垣神社竹矢線の拡幅工事にともなう数次の発掘調査により、出雲国分寺南門跡の南西から北東に向けて直線状に地山の高さ、国分寺造成土の広がりを知ることができた（第59図）。

第59図最西端に位置する一区画の地山は黄橙白色粘質土で比較的締まっており、標高は4.3mである。ここでは国分寺造成土は確認できなかったが、地山は東に向けて緩やかに下がり、風化した松江層という軟弱な地盤に変化していた。ところが、これと反比例するように国分寺造成土が出現して徐々に厚くなり、南門前では地山標高4.0mに対して国分寺造成土は厚さ30cmであった。南門から西方40mにかけては土地造成により地表面が標高4.3mに均されていることがわかった。しかし、天平古道では国分寺造成土の厚さが60cmあるため、参道部分が若干高く造られた可能性が考えられる。

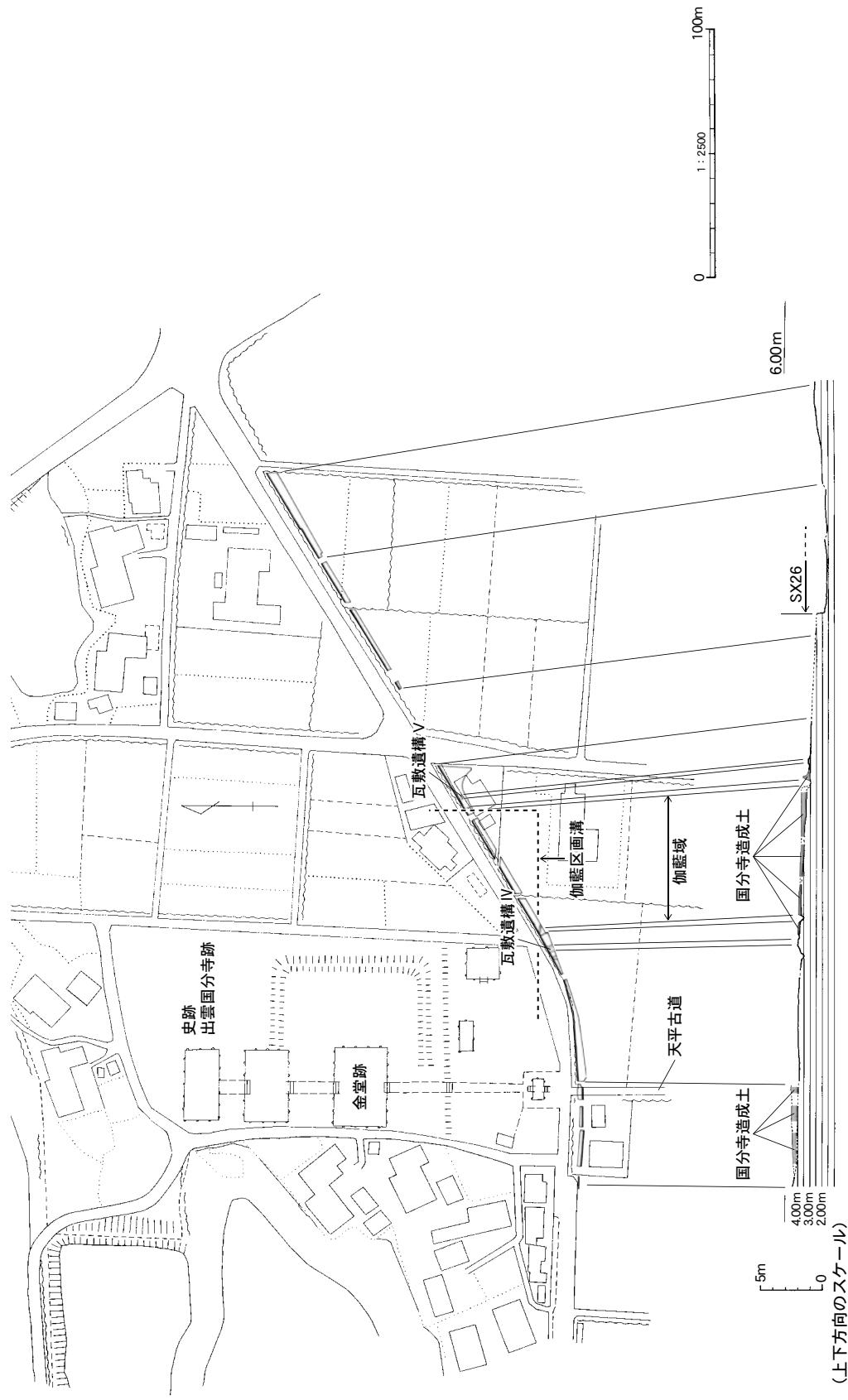
南門前から東にかけては地下の搅乱が著しく、明瞭な国分寺造成土を検出することはできなかったが、国分寺伽藍中軸線から57mの地点で幅3mの瓦敷遺構IVが検出された。この遺構は白色粘土の地山直上に瓦片が敷かれたもので、東西辺に溝が掘られていたことから南北方向の道である可能性が高い。比較的新しい時期の瓦片が多く、創建当初から存在した遺構とは断定できないが、この遺構の上面標高は4.0mで、周囲に明瞭な国分寺造成土は検出されなかった。地山は南門前から1.0m下がり、国分寺造成土は瓦敷遺構Vに到るまでのどこかで途切れていると思われるが、今回はその場所を特定することはできなかった。

さらに東の伽藍中軸線から64mの地点では東西方向の伽藍区画溝、112mの地点では南北方向の伽藍区画溝が検出された。両者間は伽藍域の内側にあたり、明瞭な国分寺造成土が検出された。地山は引き続き東へ緩やかに下がり東西区画溝の東側で標高3.7m、南北区画溝の西側で標高3.3mを測るが、国分寺造成土は東方ほど厚みを増し、東西方向の伽藍区画溝の東側で厚さ25cm、南北方向の伽藍区画溝の西側で厚さ40cmであった。国分寺造成土の上面標高は3.95～3.7mを測る。

南北方向の伽藍区画溝の東方5m地点では瓦敷遺構Vが検出された。調査範囲が狭く性格は不明であるが、白色粘土の地山直上に瓦片が敷かれたもので東西幅3m、上面標高3.3mを測る。南北方向の伽藍区画溝の東側で検出した国分寺造成土はこの遺構の西端で消失している。瓦敷遺構Vから東の地山標高は3.0mで、34m東に位置する江分遺跡の最西端では地山標高は2.5mを測る。

伽藍中軸線から170mの地点では奈良時代より古い遺構、SX26のため人工的に60cm前後掘り下げられており、中軸線から210m地点までは地山標高が1.6m前後を推移しているが、奈良時代には標高2.4m前後の平坦地になっていたと思われる。SX26の東端から東では、中竹矢遺跡の粘土採掘坑群に近い江分遺跡最東端に向けて地山は緩やかに上がり標高2.6m前後で安定している。

出雲国分寺は西に山が迫っているため、西側の回廊が存在しない全国的にも特異な伽藍配置となっている。平成22年度に南門から中門へ続く参道東側を発掘調査した結果、その地山は橙褐色の締まった地山であった。第59図の西端一区画の地山も黄橙白色粘質土であり、西側では比較的締まった地山が存在することがわかった。伽藍域の選地にあたっては様々な要因が存在すると思われるが、軟弱な風化した松江層を避け、主要伽藍の重量に耐えうる西寄りの締まった基盤を求めたことが特異な伽藍配置となった理由の1つにあげられるかもしれない。



第57図 国分寺周辺の地山標高と国分寺造成土の広がり

(上下方向のスケール)

## 遺物観察表(土器・瓦)

### 【平成22年度出雲国分寺跡発掘調査】

捕団番号	種別	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	調整等	残存状況(cm・%)	備考
6-1	須恵器	壺	口径:一 底径:(7.7) 残存高:2.1	細かい	やや不良	外面:灰 N 5/0 内面:灰 N 5/0	外面:回転ナデ、ナデ 内面:回転ナデ	20%	高台有
6-2	土師器	壺	口径:(5.3) 底径:一 残存高:3.5	粗い	良好	外面:灰白 10YR 8/1 内面:灰白 10YR 8/1	外面:ナデ 内面:ナデ	40%	
6-3	白磁	碗	口径:一 底径:一 残存高:3.3	細かい わずかに砂粒を含む	良好	外面:灰白 7.5Y 7/1 内面:灰白 7.5Y 7/1	外面:回転ナデ、白磁釉 内面:回転ナデ、白磁釉	小片	釉薬が非常に薄い
6-4	瓦	丸瓦	残存高:2.6 最大厚:2.5	やや粗い	良好	外面:灰白 2.5Y 8/1 内面:灰白 2.5Y 8/2	外面:ナデ 内面:布目	10.4×4.1	土師質
6-5	瓦	丸瓦	残存高:6.9 最大厚:1.9	粗い 砂粒を多く含む	やや不良	外面:淡黄 5Y 8/4 内面:灰白 2.5Y 8/1	風化不明	7.5×6.9	土師質
6-6	瓦	丸瓦	残存高:6.6 最大厚:1.5	細かい 黒粒を多く含む	良好	外面:灰白 5Y 7/1 内面:灰白 2.5Y 7/1	外面:ナデ、ケズリ 内面:布目、ケズリ	10.7×4.3	土師質
6-7	瓦	丸瓦	残存高:7.0 最大厚:2.1	やや粗い 赤粒を少し含む	不良	外面:灰白 2.5Y 8/2 内面:灰白 10Y 8/2	外面:風化 内面:布目、ナデ	9.7×6.0	土師質 風化著しい
6-8	瓦	丸瓦	残存高:2.5 最大厚:1.8	やや粗い	良好	外面:黒褐 10YR 3/1 内面:黄灰 2.5Y 4/1	外面:ナデ 内面:布目	6.1×6.9	土師質
6-9	瓦	平瓦	残存高:3.6 最大厚:3.2	やや粗い 白粒を含む	良好	外面:灰 N 6/0 内面:灰 N 5/0	外面:布目、ナデ 内面:ケズリ後ナデ	10.0×11.5	須恵質
6-10	瓦	平瓦	残存高:2.6 最大厚:2.0	やや粗い 白粒を多く含む	良好	外面:灰白 5Y 7/1 内面:灰白 5Y 7/1	外面:布目 内面:タタキ後ナデ消し	9.9×8.8	須恵質
6-11	瓦	平瓦	残存高:3.1 最大厚:1.6	やや粗い 黒粒を多く含む	やや不良	外面:灰白 5Y 8/1 内面:灰白 5Y 8/1	外面:布目、ケズリ 内面:タタキ	12.0×9.8	須恵質
6-12	瓦	平瓦	残存高:1.7 最大厚:1.4	細かい	不良	外面:灰白 5Y 8/1 内面:灰白 5Y 8/1	外面:布目、ナデ 内面:タタキ	4.5×8.2	須恵質
7-1	瓦	丸瓦	残存高:7.0 最大厚:2.3	粗い 砂粒を多く含む	不良	外面:灰白 5Y 8/1 内面:灰白 5Y 8/1	外面:風化 内面:布目	12.2×10.7	孔あり 風化著しい
7-2	瓦	丸瓦	残存高:8.0 最大厚:2.0	粗い	やや不良	外面:灰白 2.5Y 8/2 内面:灰白 2.5Y 8/2	外面:ナデ 内面:風化	11.9×6.5	土師質
7-3	瓦	平瓦	残存高:3.4 最大厚:1.7	やや粗い 黒粒、白粒を多く含む	やや不良	外面:灰白 5Y 8/1 内面:灰白 5Y 8/1	外面:布目、ナデ 内面:タタキ、ナデ	11.0×14.1	土師質
7-4	瓦	平瓦	残存高:2.5 最大厚:1.9	細かい 黒粒をわずかに含む	やや不良	外面:灰白 N 8/0 内面:灰白 N 8/0	外面:布目ケズリ後ナデ 内面:タタキ	10.2×7.5	須恵質
7-5	瓦	平瓦	残存高:2.4 最大厚:1.8	やや粗い 白粒を多く含む	良好	外面:黄灰 2.5Y 5/1 内面:灰白 N 7/0	外面:布目、繩目 内面:タタキ	7.5×10.6	須恵質
7-6	瓦	平瓦	残存高:3.0 最大厚:2.4	やや粗い 赤粒を多く含む	不良	外面:浅黄橙 7.5YR 8/4 内面:灰白 10YR 8/2	外面:布目 内面:タタキ	13.7×10.6	土師質 風化著しい

### 【江分遺跡発掘調査】

捕団番号	種別	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	調整等	残存状況(cm・%)	備考
11-1	土師器	壺	口径:一 底径:一 残存高:13.8	粗い	やや不良	外面:灰白 10YR 8/2 内面:灰白 10YR 8/2	風化不明	25%	複合口縁・風化著しい
11-2	土師器	甕	口径:14.9 底径:一 残存高:9.2	粗い 2mm以下の砂粒を大量に含む	良	外面:にぶい黄橙 10YR 7/4 内面:にぶい黄橙 10YR 7/4	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、ハケ、ヘラケズリ	小片	
11-3	土師器	甕	口径:26.4(不整円) 底径:一 残存高:7.4	粗い 2mm以下の砂粒を大量に含む	良	外面:浅黄橙 10YR 8/3 内面:にぶい黄橙 10YR 5/3	外面:回転ナデ、ハケ 内面:回転ナデ、ヘラケズリ		外面部の一部に煤付着
11-4	土師器	甕	口径:(26.2) 底径:一 残存高:4.5	粗い 砂粒を多く含む	やや不良	外面:にぶい黄橙 10YR 6/3 内面:褐灰 10YR 4/1	外面:ナデ 内面:ナデ、ヘラケズリ	15%	
11-5	土師器	甕	口径:21.6(不整円) 底径:丸底 器高:26.1	粗い 2mm以下の砂粒を大量に含む	良	外面:灰白 10YR 8/2 内面:灰白 10YR 8/2	外面:風化不明 内面:回転ナデか、ヘラケズリか	70%	
16-1	土師器	甕	口径:(14.2) 底径:丸底 器高:27.0	粗い 3mm以下の砂粒を大量に含む	良	外面:浅黄橙 10YR 8/3 内面:浅黄橙 10YR 8/3	外面:回転ナデか、ハケ 内面:回転ナデか、ヘラケズリ	40%	外面部の一部に黒斑あり
18-1	須恵器	長頸壺	口径:一 底径:9.9 最大胴径:18.0 残存高:11.9	やや粗い 2~3mmの砂粒を含む	良好	外面:赤灰 2.5Y 5/1 内面:灰 N 5/0	外面:回転ナデ、回転糸切後ナデ、沈線 内面:回転ナデ	90%	
21-1	土師器	壺	口径:一 底径:(6.2) 残存高:1.9	細かい 赤粒を多く含む	やや不良	外面:浅黄橙 10YR 8/3 内面:灰白 10YR 8/2	風化	40%	
21-2	土師器	壺	口径:一 底径:(8.2) 残存高:2.9	やや粗い	やや不良	外面:にぶい黄橙 10YR 7/4 内面:にぶい黄橙 10YR 7/4	外面:ナデ 内面:ナデ、ナデか	40%	高台有
21-3	土師器	壺	口径:一 底径:一 残存高:1.7	やや粗い	やや不良	外面:浅黄橙 10YR 8/3 内面:橙 2.5YR 6/6(丹)	風化不明	50%	高台有・内面に赤色顔料若干残る
21-4	土師器	壺	口径:一 底径:(5.9) 残存高:2.5	やや粗い 白粒、赤粒、黒粒を含む	やや不良	外面:灰白 2.5Y 8/2 内面:灰白 2.5Y 8/2	風化不明	20%	高台有
21-5	土師器	皿	口径:一 底径:一 残存高:1.0	細かい 赤粒を含む	やや不良	外面:橙 7.5YR 7/6 内面:橙 7.5YR 7/6	外面:ナデか 内面:ナデか	60%	高台有
21-6	土師器	製塙土器	口径:(11.4) 底径:一 残存高:2.7	粗い 赤粒を含む	やや不良	外面:浅黄橙 10YR 8/3 内面:浅黄橙 10YR 8/3	風化不明	10%	
21-7	土師器	柱状高台皿	口径:一 底径:(4.9) 残存高:3.4	粗い 白粒、赤粒を含む	やや不良	外面:淡黄 2.5Y 8/3 内面:にぶい黄橙 10YR 6/4	外面:回転糸切、ナデ 内面:ナデか	40%	柱状高台
22-1	須恵器	蓋	口径:一 残存高:1.2	細かい 黒粒を多く含む	良好	外面:灰 N 6/0 内面:灰 N 6/0	外面:回転ヘラケズリ、回転ナデ 内面:回転ナデ後ナデ	20%	輪状ツマミ
22-2	須恵器	蓋	口径:(12.2) 残存高:1.4	やや粗い 砂粒を多く含む	良好	外面:灰白 N 5/0 内面:灰白 N 5/0	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	10%	
22-3	須恵器	蓋	口径:(14.8) 残存高:1.1	細かい	良好	外面:灰 N 6/0 内面:灰 N 6/0	外面:回転ナデ、ナデ 内面:回転ナデ、ナデ	10%	
22-4	須恵器	壺	口径:(11.8) 底径:一 残存高:2.3	細かい 黒粒をわずかに含む	良好	外面:灰白 N 7/0 内面:灰白 N 7/0	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	15%	
22-5	須恵器	壺	口径:(12.3) 底径:一 残存高:2.3	細かい 黒粒を少し含む	良好	外面:灰白 N 7/0 内面:灰白 N 7/0	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	15%	
22-6	須恵器	壺	口径:(11.2) 底径:一 残存高:2.8	細かい 白粒を少し含む	良好	外面:灰白 N 5/0 内面:灰白 N 5/0	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	10%	
22-7	須恵器	壺	口径:一 底径:(8.4) 残存高:3.4	粗い 砂粒を多く含む	やや不良	外面:灰 N 6/0 内面:オリーブ灰 2.5GY 6/1	外面:風化不明 内面:回転ナデ	20%	
22-8	須恵器	壺	口径:一 底径:(6.9) 残存高:1.9	細かい	良好	外面:灰白 N 7/0 内面:灰白 N 5/0灰白	外面:回転ナデ、回転糸切 内面:回転ナデ、ナデ	10%	
22-9	須恵器	壺	口径:(14.6) 底径:一 残存高:5.1	細かい 黒粒を少し含む	良好	外面:灰 N 5/0 内面:灰 N 6/0	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	30%	高台有
22-10	須恵器	壺	口径:一 底径:(9.0) 残存高:5.2	細かい	やや不良	外面:暗灰 N 3/0 内面:暗灰 N 3/0	外面:回転ナデ、ナデ 内面:回転ナデ	15%	高台有

挿図番号	種別	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	調整等	残存状況(cm・%)	備考
22-11	須恵器	壺	口径：一 底径：(9.1) 残存高：2.6	細かい 白粒を含む	やや不良	外面：灰 N 5/0 内面：灰 N 6/0	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	15%	高台有
22-12	須恵器	壺	口径：一 底径：(8.2) 残存高：1.4	細かい	良好	外面：青灰 5B 6/1 内面：青灰 5B 6/1	外面：回転ナデ、ナデ、静止糸切 内面：回転ナデ	10%	高台有
22-13	須恵器	壺	口径：一 底径：(8.6) 残存高：1.5	やや粗い 砂粒を多く含む	良好	外面：灰 N 4/0 内面：灰白 N 7/0	外面：ナデ 内面：回転ナデ、ナデ	10%	高台有
22-14	須恵器	壺	口径：一 底径：(7.0) 残存高：2.1	細かい	やや不良	外面：灰白 N 8/0 内面：灰白 N 8/0	外面：回転ナデ、ナデ 内面：回転ナデ	25%	高台有
22-15	須恵器	壺	口径：一 底径：(5.0) 残存高：1.3	細かい	良好	外面：灰 N 6/0 内面：灰白 N 5/0	外面：回転ナデ、回転糸切 内面：回転ナデ、ナデ	40%	
22-16	須恵器	壺	口径：一 底径：(8.2) 残存高：1.5	細かい 白粒を含む	良好	外面：灰 N 6/0 内面：灰 N 6/0	外面：回転ナデ、回転糸切 内面：回転ナデ、ナデ	15%	
22-17	須恵器	皿	口径：(13.2) 底径：(9.3) 器高：2.1	やや粗い 1~6mmの白粒をやや多く含む	良好	外面：灰 10Y 6/1 内面：10Y 6/1	外面：回転ナデ、ナデ、回転糸切 内面：回転ナデ、ナデ	20%	
22-18	須恵器	皿	口径：一 底径：(8.8) 残存高：1.5	細かい 赤粒を含む	良好	外面：灰 5Y 5/1 内面：灰 N 6/1	外面：回転ナデ、ナデ、回転糸切 内面：回転ナデ	15%	
22-19	須恵器	壺	口径：一 底径：(8.3) 残存高：1.5	細かい	やや不良	外面：灰白 N 8/0 内面：灰白 N 8/0	外面：回転糸切、ナデ、回転ナデ 内面：回転ナデ	15%	
22-20	須恵器	皿	口径：一 底径：(6.2) 残存高：1.5	細かい 赤粒、白粒を多く含む	良好	外面：灰 N 6/0 内面：灰 N 6/0	外面：回転ナデ、回転糸切 内面：回転ナデ、ナデ	40%	
22-21	須恵器	皿	口径：一 底径：(8.4) 残存高：1.4	やや粗い 白粒を含む	良好	外面：灰 N 5/0 内面：灰 N 6/0	外面：ナデ、回転ナデ 内面：ナデ、回転ナデ	10%	
22-22	須恵器	皿	口径：(15.0) 底径：一 残存高：2.3	細かい 白粒を含む	良好	外面：灰白 N 7/0 内面：灰白 N 7/0	外面：回転ナデ 内面：不明	10%	高台有
22-23	須恵器	皿	口径：一 底径：(10.6) 残存高：2.1	やや粗い 赤粒、白粒を含む	良好	外面：オリーブ灰 2.5GY 6/1 内面：オリーブ灰 2.5GY 6/1	外面：回転ナデ、ナデ、回転糸切 内面：回転ナデ	15%	高台有
22-24	須恵器	皿	口径：一 底径：(11.1) 残存高：2.8	やや粗い 白粒を多く含む	やや不良	外面：灰 7.5Y 6/1 内面：灰 7.5Y 6/1	外面：ナデ 内面：ナデ、回転ナデ	10%	高台有
22-25	須恵器	皿	口径：一 底径：(10.8) 残存高：1.8	細かい	良好	外面：灰 N 6/0 内面：灰白 N 8/0	外面：回転ナデ、ナデ 内面：回転ナデ、ナデ	10%	高台有
22-26	須恵器	盤	口径：一 底径：(16.0) 残存高：1.8	やや粗い 赤粒、白粒を含む	やや不良	外面：明赤褐色 5YR 5/6 内面：明赤褐色 5YR 5/6	外面：ナデか 内面：ナデか	10%	
22-27	須恵器	壺	口径：一 底径：8.7 残存高：2.8	細かい 黒粒、白粒を含む	良好	外面：灰白 N 7/0 内面：灰白 N 7/0	外面：ヘラケズリ、ナデ、回転糸切 内面：回転ナデ	30%	
22-28	須恵器	甕	口径：(13.8) 底径：一 残存高：4.4	非常に細かい	やや不良	外面：灰白 N 8/0 内面：灰白 N 8/0	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	20%	
22-29	須恵器	甕	口径：一 底径：一 残存高：3.3	細かい	やや不良	外面：灰白 N 7/0 内面：灰 N 5/0	外面：ナデ、タタキ 内面：ナデ、当具痕(青海波文)	20%	
22-30	須恵器	壺	口径：一 底径：(13.2) 残存高：7.9	やや粗い 黒粒を多く含み白粒を少し含む	良好	外面：灰 N 6/0 内面：灰白 N 7/0	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ、ナデ、ミガキか 内面：回転ナデ	15%	
23-1	青磁	碗	口径：一 底径：一 残存高：2.7	非常に細かい	良好	外面：明オリーブ灰 2.5G 7/1(輪) 内面：明オリーブ灰 2.5G 7/1(輪) 胎土：灰白 N 8/0	外面：施釉(厚1mm)、貫入 内面：施釉(厚1mm)、貫入	—	
23-2	青磁	碗	口径：一 底径：一 残存高：2.1	細かい 黒粒を含む	良好	外面：灰オリーブ 7.5G 5/3(輪) 内面：灰オリーブ 7.5G 5/3(輪) 胎土：灰白 N 8/0	外面：施釉(厚1mm)、貫入 内面：施釉(厚1mm)、貫入なし	—	
23-3	陶器	皿	口径：一 底径：(3.3) 残存高：2.0	非常に細かい	良好	外面：灰白 2.5Y 7/1(輪) 内面：灰白 2.5Y 7/1(輪) 胎土：にぶい橙 7.5Y 6/4	外面：回転ナデ、削り出し高台、施釉 内面：回転ナデ、砂目、施釉	30%	肥前系17世紀前半 砂目あり
24-1	鍛冶具	羽口	外径：5.9 内径：2.3 残存高：4.2	やや粗い		外面：灰 N 4/0 内面：暗赤褐色 2.5YR 3/4 淡橙 5YR 8/4			
24-2	鍛冶具	羽口	外径：(5.0) 内径：(2.7)	粗い 赤粒を多く含む	—	外面：灰白 N 8/0 内面：灰白 10YR 8/2	—	20%	
26-1	瓦	丸瓦	残存高：5.6 最大厚：1.9	粗い	不良	外面：灰白 10YR 8/1 内面：灰白 10YR 8/1	外面：風化不明 内面：布目	12.7×5.2	土師質
26-2	瓦	丸瓦	残存高：7.3 最大厚：2.2	粗い 1mm位の砂粒を多く含む	やや不良	外面：灰白 2.5Y 8/2 内面：灰白 2.5Y 8/2	外面：風化不明 内面：布目、ナデ	8.3×5.5	土師質
26-3	瓦	軒平瓦	残存高：6.7 最大厚：6.2	やや粗い 黒粒を多く含む	良好	外面：黄灰 2.5Y 6/1 内面：灰 5Y 6/1	外面：ナデ、指押、布目、珠文草花文 内面：ナデ、ハケ後ナデ	9.9×9.1	須恵質
26-4	瓦	平瓦	残存高：6.1 最大厚：2.0	粗い 砂粒を多く含む	良好	外面：淡黄 2.5Y 8/3 内面：淡黄 2.5Y 8/3	外面：糸切、布目、櫛跡、ナデ、ケズリ 内面：タタキ(NB)	8.1×13.9	土師質
26-5	瓦	平瓦	残存高：5.2 最大厚：2.2	やや粗い 黒粒を多く含む	良好	外面：灰白 N 7/0 内面：灰白 5Y 8/1	外面：布目、ナデ 内面：タタキ(KE)	5.7×14.7	須恵質
26-6	瓦	平瓦	残存高：3.3 最大厚：2.4	非常に細かい 白粒を少し含む	良好	外面：灰白 N 7/0 内面：灰白 N 7/0	外面：布目、ケズリ後ナデ 内面：タタキ(その他)	9.3×13.0	須恵質
26-7	瓦	平瓦	残存高：3.5 最大厚：2.4	細かい 黒粒、白粒を少し含む	良好	外面：灰白 N 7/0 内面：灰白 N 7/0	外面：布目、ナデ 内面：ハケ目か	9.9×9.4	須恵質
26-8	博	博		細かい 白粒、黒粒を含む	良好	外面：灰 N 6/0 内面：—	外面：ナデ 内面：—	10.2×8.7 ×5.5	須恵質 外面上に植物痕跡か
29-1	弥生土器	壺	口径：(19.2) 底径：一 残存高：8.9	やや粗い	良好	外面：灰白 2.5Y 8/2 内面：にぶい黄灰 10YR 6/4	外面：ナデ、ハケ 内面：ナデ、ナデか、指押、ヘラケズリ 口縁端部外面上に擬回線1条	30%	
29-2	弥生土器	甕	口径：(17.6) 底径：一 残存高：5.4	石英、長石の微粒を多く含む	良好	外面：灰白 10YR 8/1 内面：灰白 10YR 8/1 断面：一部灰色 N 6/0	外面：横ナデ、ケズリ 内面：横ナデ、ケズリ	10%	
29-3	弥生土器	甕	口径：(15.5) 底径：一 残存高：7.6	0.5mm程度の石英、長石粒を多く含む	良好	外面：浅黃橙 10YR 8/3 内面：灰白 2.5Y 8/2	外面：横ナデ、横ハケ、四線文、波状文 内面：横ナデ、ケズリ	25%	
29-4	須恵器	皿	口径：一 底径：(9.8) 残存高：1.2	細かい 白粒を少し含む	良好	外面：灰 N 6/0 内面：灰白 N 8/0	外面：回転ナデ、回転糸切 内面：回転ナデ	10%	墨書き
29-5	須恵器	平瓶	口径：6.6 底径：5.0 最大胴径：13.8 器高：15.3	やや粗い 2mm以下の砂粒を含む	良好	外面：灰 N 6/0 内面：灰 N 6/0	外面：回転ナデ、カキ目、ヘラケズリ 内面：回転ナデ	完品	底部外面上にヘラ記号 円盤状耳が2つ有
29-6	須恵器	甕	口径：(20.1) 底径：一 残存高：10.5	やや粗い	やや不良	外面：オリーブ黒 5Y 3/1 内面：黒 2.5Y 2/1	外面：ナデ、タタキ、自然釉 内面：ナデ、同心円上に当具痕、自然釉	10%	
29-7	須恵器	甕	厚：0.8	細かい 黒粒を含む	良好	外面：灰白 N 7/0 内面：灰白 N 8/0	外面：タタキ 内面：同心円状当具痕	10.8×11.2	
29-8	瓦	丸瓦	残存高：6.4 最大厚：2.0	やや粗い 白粒、赤粒を含む	やや不良	外面：灰 N 6/0 内面：灰 N 6/0	外面：ナデ 内面：布目、糸切、ナデ、ケズリ	6.2×7.6	須恵質
33-1	弥生土器	甕	口径：18.6 底径：8.3 最大胴径：31.8 器高：38.5	長石、石英微粒を若干含む	良好	外面：灰黃褐 10YR 6/2 内面：灰黃褐 10YR 6/2 断面：黑 5Y 2/1	外面：横ナデ、指押、縦ハケ、横ミガキ 内面：縦ミガキ、ナデか、縦ミガキ	70%	口縁端部に3条の回線 肩部に列点文
34-1	土師器	甕	口径：(23.2) 底径：一 残存高：3.0	粗い	良好	外面：灰白 7.5YR 8/2 内面：灰白 10YR 8/2	外面：ナデ 内面：ナデ	10%	複合口縁甕の口縁部
34-2	土師器	甕	口径：(21.7) 底径：一 残存高：6.8	粗い	やや不良	外面：灰白 2.5YR 8/2 内面：灰白 2.5YR 8/1	外面：横ナデ 内面：ヘラケズリ	15%	
35-1	弥生土器	甕	口径：一 底径：一 残存高：6.5	やや粗い	良好	外面：灰白 5Y 7/1 内面：灰白 5Y 7/1	外面：ナデ、ミガキ 内面：ヘラケズリ	小片	

捕団番号	種別	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	調整等	残存状況(cm・%)	備考
35-2	土師器	甕	口径：(19.1) 底径：— 残存高：8.4	非常に粗い	良好	外面：灰白 2.5Y 8/2 内面：明黄褐 10YR 6/6	外面：ナデ、ハケ 内面：ナデ、ヘラケズリ	10%	軟質
35-3	須恵器	鉢	口径：(23.7) 底径：— 残存高：5.0	やや粗い	やや不良	外面：灰白 7.5YR 8/1 内面：灰 N 5/0	外面：ナデ、横ナデ 内面：回転ナデ、ハケ	10%	
35-4	須恵器	壺	口径：— 底径：(7.4) 残存高：1.5	やや粗い 白粒を含む	良好	外面：灰 N 5/0 内面：灰 N 5/0	外面：回転糸切、ナデ 内面：回転ナデ後ナデ	15%	高台有
35-5	須恵器	壺	口径：— 底径：(7.7) 残存高：1.5	非常に細かい	やや不良	外面：灰 N 4/0 内面：灰白 N 6/0	外面：ナデ 内面：風化	10%	高台有
35-6	須恵器	壺	口径：— 底径：(8.2) 残存高：2.0	やや粗い	良好	外面：暗オリーブ灰 2.5GY 3/1 内面：オリーブ灰 2.5GY 5/1	外面：ナデ、風化 内面：風化	10%	高台有
35-7	須恵器	壺	口径：— 底径：(8.8) 残存高：2.0	やや粗い	良好	外面：灰 N 5/0 内面：灰 N 5/0	外面：回転ナデ、回転糸切、ナデ 内面：回転ナデ	10%	高台有
35-8	須恵器	壺	口径：— 底径：(9.5) 残存高：1.5	非常に細かい	良好	外面：灰 N 6/0 内面：灰 N 6/0	外面：回転ナデ、回転糸切 内面：回転ナデ	10%	
35-9	瓦	平瓦	残存高：3.7 最大厚：2.5	やや粗い 白粒、黒粒を含む	良好	外面：灰白 N 7/0 内面：灰白 N 7/0	外面：布目、ヘラ切 内面：タタキ	13.8×14.5	須恵質
36-1	土師器	製塙土器	口径：(9.4) 底径：— 残存高：2.3	やや粗い 赤粒を含む	良好	外面：にぶい橙 7.5YR 7/4 内面：橙 5YR 6/6	外面：ナデ 内面：ナデ	10%	
37-1	土師器	製塙土器	口径：— 底径：— 残存高：2.4	やや粗い 赤粒を含む	やや不良	外面：橙 5YR 6/6 内面：橙 5YR 6/6	外面：ナデか 内面：調整不明	小片	
37-2	瓦	丸瓦	残存高：6.5 最大厚：2.0	粗い	やや不良	外面：灰白 10YR 8/2 内面：灰白 10YR 8/2	外面：ナデ 内面：ナデ、布目	7.9×3.8	土師質
38-1	土師器	甕	口径：(28.6) 底径：— 残存高：6.0	やや粗い	良好	外面：明黄橙 10YR 6/6 内面：明黄橙 10YR 6/6	外面：ナデ、ハケ 内面：ナデ、ヘラケズリ	10%	
38-2	土師器	鍋	口径：(29.4) 底径：— 残存高：4.2	粗い	良好	外面：にぶい橙 5YR 7/4 内面：橙 5YR 6/6	外面：ナデ、ハケ、指押 内面：ハケ後ナデ	10%	外面に煤付着
38-3	須恵器	壺	口径：— 底径：(8.1) 残存高：1.7	細かい 黒粒を含む	良好	外面：灰 N 6/0 内面：灰 N 6/0	外面：回転糸切、ナデ、回転ナデ 内面：ナデ、回転ナデ	15%	高台有
38-4	須恵器	壺	口径：— 底径：(8.1) 残存高：1.7	細かい 白粒を含む	良好	外面：灰白 10YR 7/2 内面：灰白 10YR 7/2	外面：回転糸切、ナデ 内面：ナデ	20%	高台有
38-5	須恵器	壺	口径：— 底径：(6.8) 残存高：1.2	非常に細かい	良好	外面：灰 N 6/0 内面：灰 N 6/0	外面：回転糸切、回転ナデ 内面：ナデ	15%	
38-6	須恵器	壺	口径：— 底径：(5.2) 残存高：1.5	やや粗い	やや不良	外面：灰白 5Y 7/2 内面：灰白 5Y 7/2	外面：回転ナデ、ナデ、回転糸切 内面：回転ナデ、ナデ	30%	
38-7	瓦	平瓦	残存高：3.8 最大厚：2.4	やや粗い 白粒を含む	良好	外面：暗オリーブ灰 2.5GY 4/1 内面：暗オリーブ灰 2.5GY 4/1	外面：布目、ナデ 内面：タタキ	9.0×16.0	須恵質
38-8	瓦	平瓦	残存高：2.2 最大厚：2.0	やや粗い 白粒、黒粒を含む	良好	外面：暗青灰 5B 4/1 内面：暗青灰 5B 4/1	外面：布目、ケズリ後ナデ 内面：タタキ	9.5×8.1	須恵質
39-1	土師器	壺	口径：— 底径：(5.6) 残存高：1.2	細かい	やや不良	外面：浅黄橙 10YR 8/3 内面：浅黄橙 10YR 8/3	風化	15%	
39-2	土師器	壺	口径：— 底径：(5.8) 残存高：1.9	細かい	良好	外面：褐 7.5YR 4/3 内面：にぶい黄橙 7.5YR 6/4	外面：ナデ、回転糸切 内面：ナデ	15%	
39-3	土師器	壺	口径：— 底径：(7.2) 残存高：1.2	粗い	良好	外面：にぶい橙 2.5YR 6/3 内面：浅黄橙 10YR 8/3	外面：回転ナデ、回転糸切 内面：回転ナデ	20%	
39-4	土師器	壺	口径：— 底径：— 残存高：1.9	細かい	良好	外面：にぶい黄橙 10YR 7/3 内面：にぶい黄橙 10YR 7/3	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	15%	高台有
39-5	土師器	壺	口径：— 底径：— 残存高：1.6	非常に細かい	良好	外面：灰白 2.5Y 8/2 内面：浅黄橙 10YR 8/4	風化不明	20%	高台有
39-6	土師器	製塙土器	口径：— 底径：— 残存高：2.3	細かい 赤粒を含む	やや不良	外面：にぶい橙 7.5YR 7/3 内面：にぶい橙 7.5YR 7/3	外面：ナデ 内面：ナデ	小片	
39-7	土師器	製塙土器	口径：— 底径：— 残存高：1.8	細かい	良好	外面：橙 7.5YR 6/6 内面：灰白 7.5YR 8/2	外面：ナデ 内面：ナデ	小片	
39-8	土師器	製塙土器	口径：— 底径：— 残存高：2.5	やや粗い 赤粒、白粒を含む	やや不良	外面：橙 2.5YR 6/6 内面：橙 2.5YR 6/6	調整不明	小片	
39-9	土師器	製塙土器	口径：(7.9) 底径：— 残存高：2.8	やや粗い 赤粒を含む	良好	外面：にぶい黄橙 10YR 7/3 内面：にぶい黄橙 10YR 7/4	外面：ナデ 内面：ナデ	10%	
39-10	土師器	製塙土器	口径：— 底径：— 残存高：3.8	細かい 赤粒を含む	やや不良	外面：浅黄橙 10YR 8/4 内面：淡橙 2.5Y 8/3	外面：指押 内面：ナデ	10%	
39-11	須恵器	蓋	口径：(14.8) 残存高：1.4	細かい	良好	外面：灰白 N 7/0 内面：灰白 N 7/0	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	10%	重焼痕有
39-12	須恵器	壺	口径：— 底径：— 残存高：1.2	非常に細かい	良好	外面：灰 N 6/0 内面：灰白 N 8/0	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	口縁部 墨書有	
39-13	須恵器	壺	口径：(11.9) 底径：— 残存高：2.2	やや粗い 白粒を含む	良好	外面：灰 N 6/0 内面：灰 N 6/0	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	10%	内面に墨痕有
39-14	須恵器	壺	口径：(11.9) 底径：(8.0) 残存高：4.3	細かい	良好	外面：灰白 2.5Y 7/1 内面：黄灰 2.5Y 6/1	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	10%	
39-15	須恵器	壺	口径：(13.6) 底径：— 残存高：4.5	細かい	良好	外面：灰 N 5/0 内面：灰 N 6/0	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	10%	
39-16	須恵器	壺	口径：(12.6) 底径：— 残存高：3.2	非常に細かい	良好	外面：灰白 N 7/0 内面：灰白 N 7/0	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	10%	
39-17	須恵器	壺	口径：— 底径：7.1 残存高：2.0	細かい	やや不良	外面：灰白 N 7/0 内面：灰白 N 7/0	外面：回転ナデ、回転糸切、ナデ 内面：回転ナデ	20%	
39-18	須恵器	壺	口径：— 底径：(8.9) 残存高：1.9	非常に細かい	やや不良	外面：灰白 10YR 8/1 内面：灰白 10YR 8/1	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	10%	高台有
39-19	須恵器	壺	口径：— 底径：(9.7) 残存高：3.6	細かい 黒粒を含む	良好	外面：灰 N 5/0 内面：灰 N 5/0	外面：回転ナデ、ナデ 内面：回転ナデ	10%	高台有
39-20	須恵器	不明 脚部	口径：— 底径：— 残存高：2.6	非常に細かい	良好	外面：灰白 N 8/0 内面：灰白 N 8/0	外面：回転ナデ、自然釉 内面：回転ナデ、ナデ	小片	
39-21	須恵器	甕	口径：— 底径：— 残存高：0.8	やや粗い 白粒を含む	良好	外面：灰 N 6/0 内面：灰 N 4/0	外面：同心円状当具痕 内面：タタキ	4.5×4.2	
39-22	須恵器	甕	口径：— 底径：— 残存高：1.6	細かい 黒粒、白粒を含む	良好	外面：灰 N 6/0 内面：灰 N 5/0	外面：同心円状当具痕、ナデ 内面：タタキ	6.3×5.7	
40-1	瓦	軒丸瓦	残存高：3.2 最大厚：3.1	やや粗い	良好	外面：淡黄 2.5Y 8/3 内面：淡黄 2.5Y 8/3	外面：型押 内面：ナデ	14.1×10.6	土師質
40-2	瓦	軒丸瓦	残存高：3.8 最大厚：3.8	やや粗い 白粒、黒粒を含む	良好	外面：灰白 N 8/0 内面：黄灰 2.5Y 4/1	外面：型押、ナデ 内面：ナデ、指押	8.2×10.2	須恵質 内区に蓮子がない
40-3	瓦	丸瓦	残存高：6.2 最大厚：2.2	やや粗い 黒粒を含む	やや不良	外面：灰 N 4/0 内面：灰白 N 7/0	外面：ナデ 内面：布目、ナデ	9.8×3.7	須恵質
40-4	瓦	丸瓦	残存高：6.7 最大厚：1.2	粗い	やや不良	外面：浅黄 2.5Y 7/3 内面：浅黄 2.5Y 7/3	外面：ナデ 内面：布目、ナデ	9.3×5.4	土師質
40-5	瓦	平瓦	残存高：3.3 最大厚：2.8	やや粗い 白粒、黒粒を含む	良好	外面：青灰 5B 6/1 内面：青灰 5B 6/1	外面：布目 内面：ケズリ	8.3×10.6	須恵質
40-6	瓦	平瓦	残存高：2.3 最大厚：2.1	やや粗い 白粒を含む	やや不良	外面：灰白 7.5Y 8/2 内面：灰白 7.5Y 8/2	外面：布目 内面：タタキ	9.3×10.4	土師質
40-7	瓦	平瓦	残存高：2.9 最大厚：2.6	やや粗い 白粒を含む	良好	外面：灰白 N 7/0 内面：灰白 N 7/0	外面：布目、ケズリ 内面：タタキ	10.0×9.2	須恵質

挿図番号	種別	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	調整等	残存状況(cm・%)	備考
41-1	土師器	壺	口径：一底径：(7.0) 残存高：1.6	やや粗い 赤粒を含む	やや不良	外面：灰白 2.5Y 8/1 内面：灰白 2.5Y 8/1	風化不明	25%	
41-2	土師器	壺	口径：一底径：(6.4) 残存高：1.4	非常に細かい	良好	外面：灰白 5Y 8/1 内面：灰白 5Y 8/1	外面：回転糸切、ナデ 内面：ナデ	15%	
41-3	土師器	壺	口径：一底径：(5.9) 残存高：0.7	非常に細かい	良好	外面：橙 5YR 6/8 内面：橙 5YR 6/8	外面：回転糸切、回転ナデ 内面：回転ナデ	15%	
41-4	須恵器	壺	口径：一底径：— 残存高：3.0	細かい 白粒を含む	良好	外面：灰 N 6/0 内面：灰白 N 7/0	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	10%	
41-5	須恵器	壺	口径：一底径：(9.5) 残存高：1.0	細かい 白粒を含む	良好	外面：灰白 N 7/0 内面：灰白 N 7/0	外面：回転糸切、ナデ 内面：回転ナデ	15%	
41-6	土師器	製塙土器	口径：一底径：— 残存高：3.9	やや粗い 赤粒を多く含む	良好	外面：浅黄橙 7.5YR 8/3 内面：橙 5YR 7/6	外面：ナデ 内面：ナデ	10%	
41-7	土師器	製塙土器	口径：一底径：— 残存高：1.9	粗い 赤粒を多く含む	やや不良	外面：にぶい橙 7.5YR 7/4 内面：にぶい橙 7.5YR 7/4	粗いナデ	10%	
41-8	瓦	丸瓦	残存高：7.3 最大厚：2.4	粗い	良好	外面：灰黄 2.5Y 7/2 内面：灰白 2.5Y 7/1	外面：ナデ 内面：ナデ、糸切、布目、枠板痕	7.1×4.7	土師質 破断面に煤付着
41-9	瓦	平瓦	残存高：2.8 最大厚：2.2	やや粗い	やや不良	外面：灰白 2.5Y 8/2 内面：浅黄 2.5Y 7/3	外面：ナデ 内面：タタキ	8.1×8.6	土師質
42-1	土師器	壺	口径：一底径：(6.3) 残存高：1.7	やや粗い	やや不良	外面：淡黄 2.5Y 8/3 内面：淡黄 2.5Y 8/3	風化不明	30%	
42-2	土師器	壺	口径：一底径：(9.9) 残存高：1.7	やや粗い	やや不良	外面：にぶい橙 10YR 7/4 内面：にぶい橙 10YR 7/4	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	15%	高台有
42-3	土師器	製塙土器	口径：一底径：— 残存高：3.5	やや粗い 赤粒を含む	やや不良	外面：浅黄橙 7.5YR 8/4 内面：浅黄橙 7.5YR 8/4	外面：ナデか 内面：ナデか	10%	
42-4	陶器	鉢	口径：一底径：13.5 残存高：4.9	やや粗い 白粒をやや多く含む	良好	外面：暗褐 7.5YR 3/4 内面：暗褐 7.5YR 3/4	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、回転ヘラケズリ	10%	
42-5	須恵器	蓋	口径：一残存高：1.3	粗い 白粒、黒粒を含む	良好	外面：褐灰 10YR 6/1 内面：灰黄褐 10YR 6/2	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	40%	
42-6	須恵器	蓋	口径：13.4 残存高：0.7	細かい	良好	外面：灰 N 6/0 内面：灰 N 6/0	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	10%	
42-7	須恵器	壺	口径：(10.9) 底径：(6.4) 器高：3.6	非常に細かい	良好	外面：灰 N 5/0 内面：灰 N 5/0	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	10%	
42-8	須恵器	壺	口径：一底径：(8.0) 残存高：1.0	非常に細かい	良好	外面：灰白 N 7/0 内面：灰白 N 7/0	外面：回転ナデ、回転糸切 内面：回転ナデ	10%	
42-9	須恵器	壺	口径：一底径：(8.7) 残存高：2.1	細かい 白粒を含む	良好	外面：灰白 N 7/0 内面：灰白 N 7/0	外面：回転ナデ、回転糸切 内面：回転ナデ、ナデ	30%	墨書有
42-10	須恵器	壺	口径：一底径：(9.2) 残存高：3.1	細かい 赤粒、黒粒、白粒を含む	やや不良	外面：灰白 5Y 7/1 内面：灰白 2.5Y 8/1	外面：回転ヘラケズリ、ナデ 内面：回転ナデ	10%	
42-11	須恵器	壺	口径：一底径：12.4 残存高：2.3	細かい 黒粒、白粒を少し含む	やや不良	外面：灰 N 6/0 内面：灰白 N 7/0	外面：ナデ 内面：ナデ、指押	15%	
42-12	瓦	平瓦	残存高：1.6 最大厚：1.1	細かい 黒粒を含む	良好	外面：灰 N 6/0 内面：灰 N 5/0	外面：同心円状当具痕、ナデ 内面：タタキ(H1)	6.5×4.3	
42-13	瓦	平瓦	残存高：1.2 最大厚：0.9	やや粗い 黒粒を多く含む	やや不良	外面：灰白 N 7/0 内面：灰 N 6/0	外面：同心円状当具痕 内面：タタキ(H1)	9.7×5.5	
42-14	瓦	丸瓦	残存高：6.8 最大厚：2.6	細かい 黒粒を含む	良好	外面：灰白 N 7/0 内面：灰白 N 7/0	外面：ナデ、ケズリ、刃痕 内面：布目、綱目か、ナデ、ケズリ、工具痕	7.8×5.1	玉縁
42-15	瓦	丸瓦	残存高：6.7 最大厚：1.7	細かい 黒粒、白粒を含む	良好	外面：灰 N 6/0 内面：布目	外面：ナデ 内面：タタキ	11.4×6.5	須恵質
42-16	瓦	平瓦	残存高：2.4 最大厚：2.1	細かい	やや粗い	外面：灰白 N 8/0 内面：灰白 N 8/0	外面：ナデ、ハケか 内面：タタキ(KC)	18.0×9.4	須恵質
43-1	土師器	壺	口径：一底径：(8.4) 残存高：1.9	粗い 赤粒を含む	やや不良	外面：灰白 2.5Y 8/2 内面：灰白 2.5Y 8/2	外面：回転糸切、風化不明 内面：風化不明	20%	
43-2	須恵器	蓋	口径：一残存高：0.8	非常に細かい	良好	外面：灰 N 5/0 内面：灰 N 6/0	外面：回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	15%	
43-3	須恵器	皿	口径：一底径：— 残存高：3.7	非常に細かい	やや不良	外面：灰 N 5/0 内面：灰 N 6/0	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	小片	
43-4	須恵器	壺	口径：一底径：(7.6) 残存高：2.3	やや粗い 黒粒、白粒を含む	良好	外面：灰 N 5/0 内面：灰 N 6/0	外面：回転糸切、回転ナデ、ナデ 内面：回転ナデ	25%	高台有
43-5	須恵器	壺	口径：一底径：(8.7) 残存高：1.4	細かい 黒粒を含む	良好	外面：灰白 2.5Y 7/1 内面：灰白 2.5Y 7/1	外面：回転糸切、回転ナデ、ナデ 内面：回転ナデ	30%	高台有
43-6	須恵器	壺	口径：一底径：9.4 残存高：2.0	非常に細かい	やや不良	外面：暗褐 N 3/0 内面：灰 N 5/0	外面：回転糸切、ナデ 内面：回転ナデ	40%	高台有
43-7	須恵器	壺	口径：一底径：(5.9) 残存高：1.1	細かい 黒粒を含む	良好	外面：灰白 N 8/0 内面：灰白 N 8/0	外面：回転糸切、回転ナデ 内面：回転ナデ	20%	
43-8	須恵器	壺	口径：一底径：(6.4) 残存高：1.7	細かい 黒粒をわざかに含む	良好	外面：灰白 N 7/0 内面：灰白 N 7/0	外面：回転ナデ、ナデ、回転糸切 内面：回転ナデ	20%	
43-9	須恵器	壺	口径：一底径：(7.2) 残存高：2.5	非常に細かい	良好	外面：灰白 N 7/0 内面：灰白 N 7/0	外面：回転糸切、回転ナデ 内面：回転ナデ	15%	
43-10	須恵器	皿	口径：一底径：(8.8) 残存高：2.0	やや粗い	やや不良	外面：灰白 2.5YR 7/1 内面：灰白 2.5YR 7/1	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ、ナデ	15%	
43-11	須恵器	皿	口径：(13.7) 底径：— 残存高：1.9	非常に細かい	やや不良	外面：灰白 N 8/0 内面：灰白 N 8/0	外面：回転ナデ、ナデ 内面：回転ナデ	10%	
43-12	須恵器	脚部	口径：一底径：(12.4) 残存高：6.6	細かい	良好	外面：灰 N 4/0 内面：灰 N 4/0	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	15%	
43-13	須恵器	平瓦	甕	やや粗い 黒粒、白粒を含む	良好	外面：灰白 5Y 7/1 内面：灰 N 5/0	外面：同心円状当具痕 内面：タタキ	8.4×7.3	須恵質
43-14	瓦	軒平瓦	残存高：4.2 最大厚：—	細かい 黒粒を含む	やや不良	外面：灰 N 5/0 内面：暗灰 N 3/0	外面：型押、ケズリ 内面：ナデ	6.0×6.5	須恵質
43-15	瓦	丸瓦	残存高：5.8 最大厚：3.0	やや粗い 白粒、黒粒を含む	良好	外面：灰白 2.5Y 8/1 内面：灰白 2.5Y 8/1	外面：ナデ 内面：布目	8.7×13.0	土師質
43-16	瓦	丸瓦	残存高：5.7 最大厚：1.7	やや粗い 白粒、黒粒を含む	良好	外面：灰 N 6/0 内面：灰 N 6/0	外面：ナデ 内面：布目、ケズリ	4.5×6.6	須恵質
43-17	瓦	平瓦	残存高：2.6 最大厚：1.9	やや粗い 黒粒を含む	良好	外面：灰白 N 7/0 内面：灰白 N 7/0	外面：布目、ケズリ 内面：タタキ	7.3×9.5	須恵質
43-18	瓦	平瓦	残存高：3.4 最大厚：2.3	細かい	良好	外面：灰白 5Y 7/1 内面：灰白 5Y 7/1	外面：布目、ナデ、ケズリ 内面：タタキ	10.5×6.7	須恵質

### 【平成22年度国分寺跡工事立会調査】

挿図番号	種別	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	調整等	残存状況(cm・%)	備考
48-1	須恵器	底部	口径：一底径：(9.0) 残存高：1.5	やや粗い 白粒を含む	良好	外面：灰 N 5/0 内面：灰 N 5/0	外面：ナデ、回転糸切 内面：回転ナデ後ナデ	10%	
48-2	瓦	平瓦	残存高：4.5 最大厚：2.3	非常に粗い	不良	外面：灰白 2.5Y 8/2 内面：灰白 2.5Y 8/1	外面：風化 内面：タタキ	6.7×12.1	土師質

挿図番号	種別	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	調整等	残存状況(cm・%)	備考
48-3	瓦	平瓦	残存高:4.3 最大厚:2.1	やや粗い	不良	外面:灰白 2.5Y 8/2 内面:灰白 2.5Y 8/2	外面:布目 内面:タタキ	17.9×13.7	土師質 風化非常に著しい
51-1	土師器	甕	口径:21.2 最大胴径:(24.3) 残存高:20.5	~4mmの砂粒を多量に含む	良好	外面:にぶい黄橙 10YR 7/2 内面:灰白 2.5Y 8/2	外面:横ナデ、ハケ? 内面:横ナデ、ヘラケズリ	30%	外面に煤付着
51-2	須恵器	壺	口径:一 底径:(8.3) 残存高:1.5	細かい	良好	外面:灰 N 5/0 内面:灰白 N 7/0	外面:回転ナデ、回転糸切、ナデ 内面:回転ナデ	10%	高台有
51-3	須恵器	皿	口径:一 底径:(7.4) 残存高:1.6	細かい	良好	外面:暗灰 N 3/0 内面:暗灰 N 3/0	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	15%	
51-4	須恵器	皿	口径:(8.4) 底径:(24.3) 残存高:2.4	非常に細かい	やや不良	外面:灰白 2.5Y 8/1 内面:灰白 2.5Y 8/1	外面:回転ナデ、回転糸切 内面:回転ナデ	20%	
53-1	須恵器	壺	口径:一 底径:(7.8) 残存高:1.1	細かい	良好	外面:灰 N 6/0 内面:灰 N 6/0	外面:回転ナデ、ナデ消しか 内面:回転ナデ、ナデ	10%	
53-2	須恵器	壺	口径:一 底径:(6.2) 残存高:2.0	細かい 黒粒を含む	良好	外面:灰白 7.5Y 7/1 内面:灰白 7.5Y 7/1	外面:回転ナデ、ナデ 内面:回転ナデ	25%	高台有
53-3	須恵器	甕	口径:一 底径:(12.3) 残存高:2.1	細かい	良好	外面:灰白 N 7/0 内面:灰白 N 7/0	外面:回転ヘラケズリ、ナデ 内面:回転ナデ	15%	
53-4	土師器	壺	口径:一 底径:(6.0) 残存高:1.5	細かい	良好	外面:灰白 2.5Y 8/2 内面:灰白 2.5Y 8/2	風化	20%	風化著しい
53-5	土師器	壺	口径:一 底径:(6.6) 残存高:1.9	やや粗い	良好	外面:灰白 2.5Y 7/1 内面:灰白 5Y 7/1	外面:ナデ 内面:ナデ	15%	
53-6	土師器	壺	口径:一 底径:(8.5) 残存高:2.3	やや粗い	やや不良	外面:灰白 2.5Y 8/1 内面:灰白 2.5Y 8/1	風化	20%	高台有
53-7	土師器	壺	口径:一 底径:一 残存高:2.2	細かい 赤粒を含む	やや不良	外面:灰白 2.5Y 8/2 内面:灰白 2.5Y 8/2	風化	15%	高台有・風化著しい
53-8	瓦	丸瓦	残存高:7.3 最大厚:2.0	細かい 黒粒を含む	良好	外面:灰白 N 8/0 内面:灰白 N 7/0	外面:ナデ 内面:ナデ、布目	6.7×6.8	須恵質
53-9	瓦	平瓦	残存高:4.2 最大厚:2.4	細かい 黒粒を含む	良好	外面:灰白 N 7/0 内面:灰白 N 7/0	外面:布目、ナデ 内面:タタキ	6.6×11.0	須恵質
53-10	瓦	軒平瓦	残存高:9.2 最大厚:6.1	粗い 白粒、黒粒を多く含む	やや不良	外面:灰白 N 7/0 内面:灰白 N 8/0	外面:ハケ 内面:ナデ	10.1×16.6	須恵質
53-11	瓦	丸瓦	最高:7.8 最大厚:2.8	やや粗い 白粒を多く含む	良好	外面:橙 5YR 7/6 内面:橙 5YR 7/6	外面:ナデ、ケズリ、一部に布目が残る 内面:布目、ケズリ	80% 33.0×15.1	土師質
55-1	瓦	丸瓦	残存高:2.7 最大厚:2.2	細かい 白粒を少し含む	良好	外面:灰白 N 7/0 内面:灰白 N 7/0	外面:ナデ 内面:布目、ケズリ後ナデ	9.9×6.4	須恵質
55-2	瓦	平瓦	残存高:1.9 最大厚:1.7	細かい 白粒を少し含む	良好	外面:灰 N 6/0 内面:灰 N 6/0	外面:布目、ナデ 内面:タタキ	7.9×5.0	須恵質
55-3	瓦	平瓦	残存高:2.4 最大厚:2.2	粗い	やや不良	外面:灰白 5Y 8/1 内面:灰白 5Y 8/1	外面:布目 内面:タタキ	12.4×7.5	土師質

### 遺物観察表(木製品)

#### 【江分遺跡発掘調査】

挿図番号	種別	種類	法量(cm)	樹種	残存状況	備考
38-9	木製品	木簡	幅:2.4 厚:0.8 長さ:(12.0)	—	上部12.0cm	墨書き「□□□□ 門カ」

### 遺物観察表(石製品)

#### 【江分遺跡発掘調査】

挿図番号	種別	種類	法量(cm・g)	石材	色調	残存状況	備考
13-1	石製品	敲石	11.7×7.7×6.9 重さ750	—	灰白N8/0	100%	使用痕が認められない
25-1	石製品	剥片	6.2×3.0×1.0 重さ10.83	玉髓	にぶい黄橙10YR5/4	100%	
25-2	石製品	砥石	11.3×4.8×6.5 重さ587.83	—	灰白10YRN8/1	100%	
29-9	石製品	砥石	6.3×6.3×3.8 重さ106.39	—	淡黄2.5Y8/3	50%	よく使い込まれている

※色調については、『新版 標準土色帖 29版』(2007.4)を用いた。

# 図版



史跡出雲国分寺（南から）



調査前風景（東から）



完掘状況（西から）

図版2【平成22年度出雲国分寺跡発掘調査】



1区完掘状況（東から）



2区完掘状況（西から）



1区土層堆積状況（部分）



2区土層堆積状況（部分）



調査前風景（西から）



1区完掘状況（東から）

図版4【江分遺跡発掘調査】



1区東端遺構群（南西から）



1区土層堆積状況（西から）



SK05床面遺物出土状況



SK06遺物出土状況

図版6【江分遺跡発掘調査】



2区完掘状況（西から）



2区土層堆積状況（西から）



3-F区土層堆積状況



3-H区調査風景

図版8【江分遺跡発掘調査】



3-H区土層堆積状況



3-I・J区土層堆積状況



3-K区遺物出土状況（西から）



3-K区出土遺物（第33図1）近景

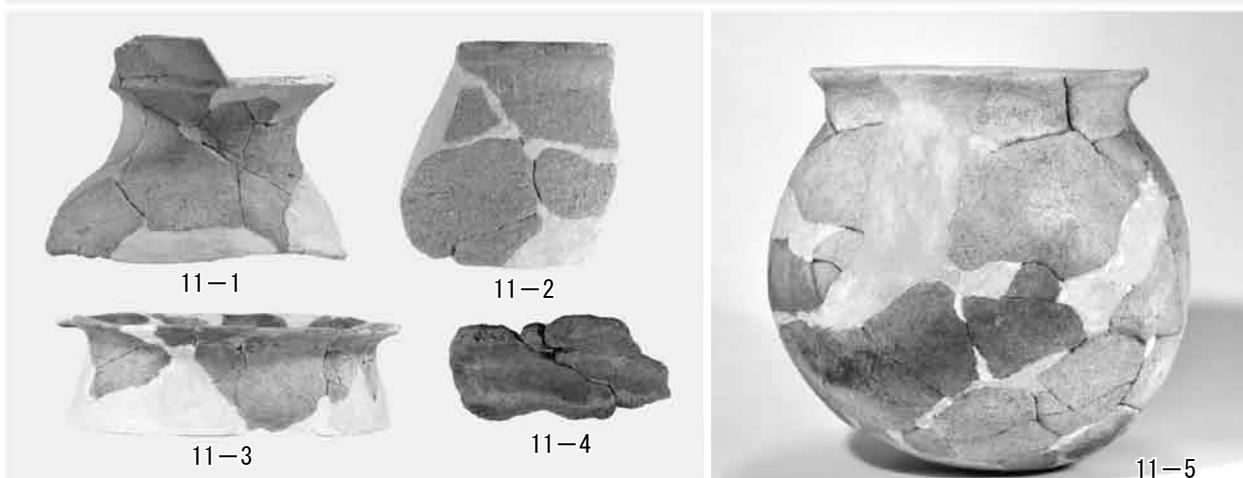
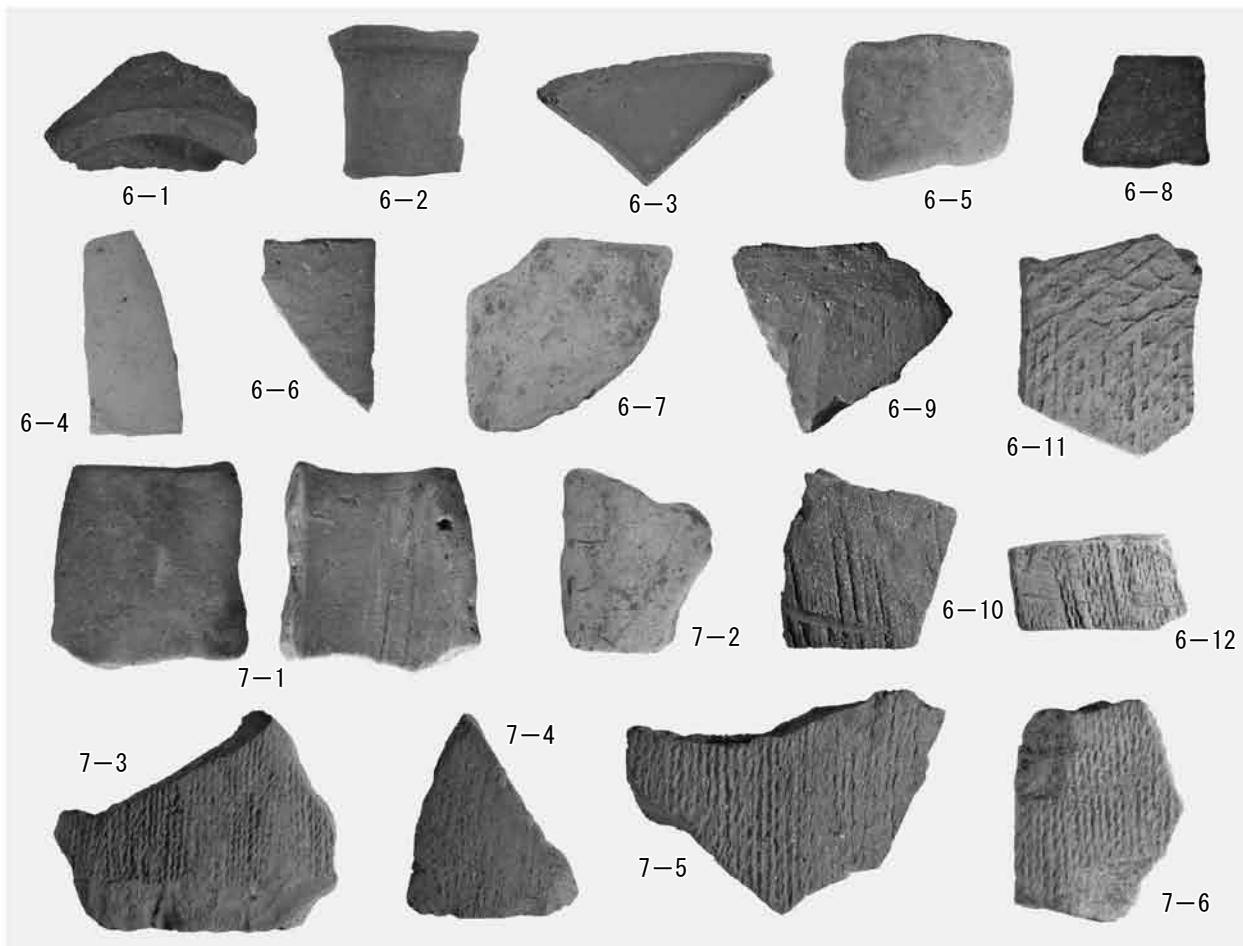
図版10【平成21・22年度出雲国分寺跡工事立会調査】



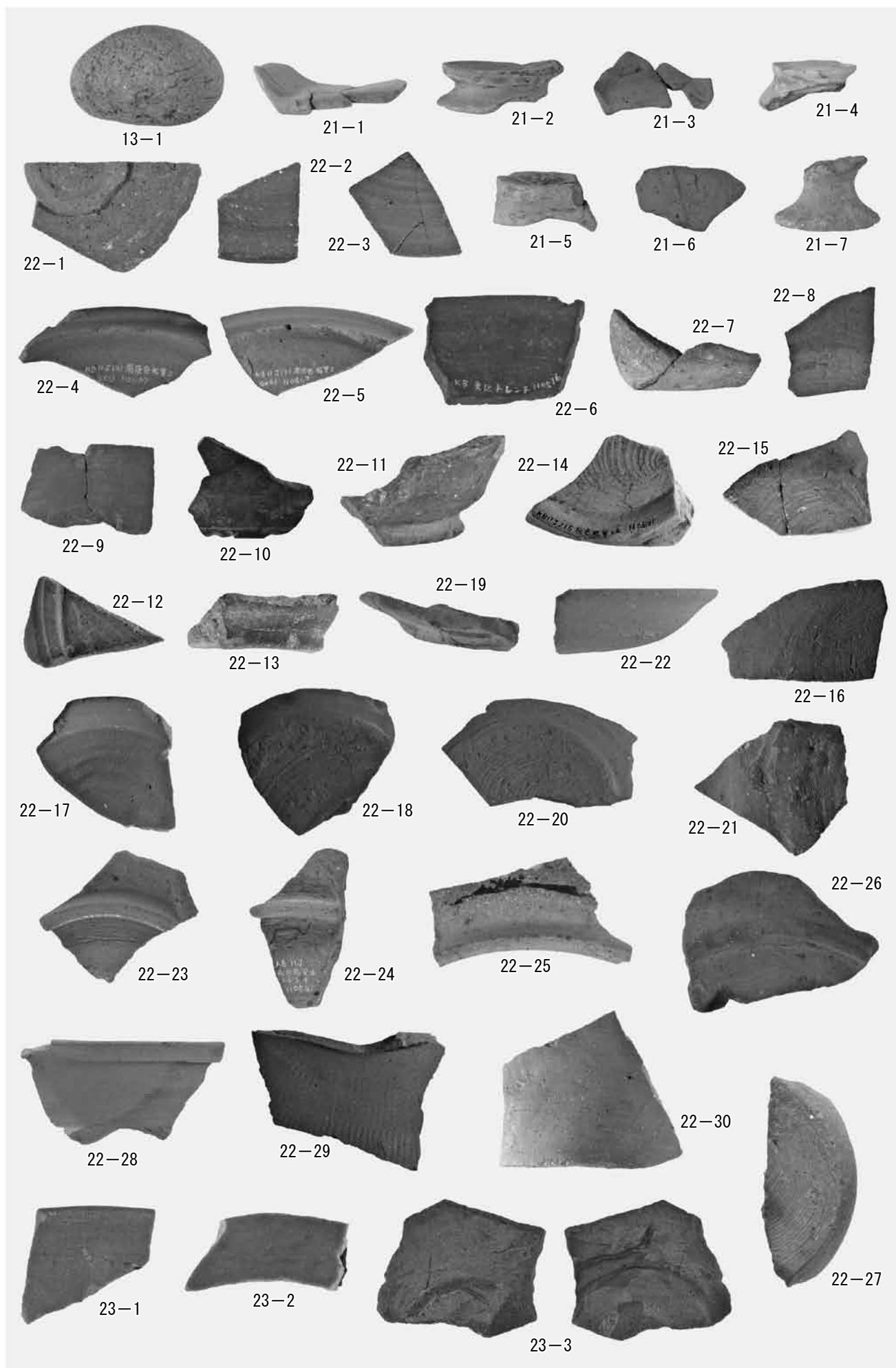
A地点瓦敷遺構（南東から）

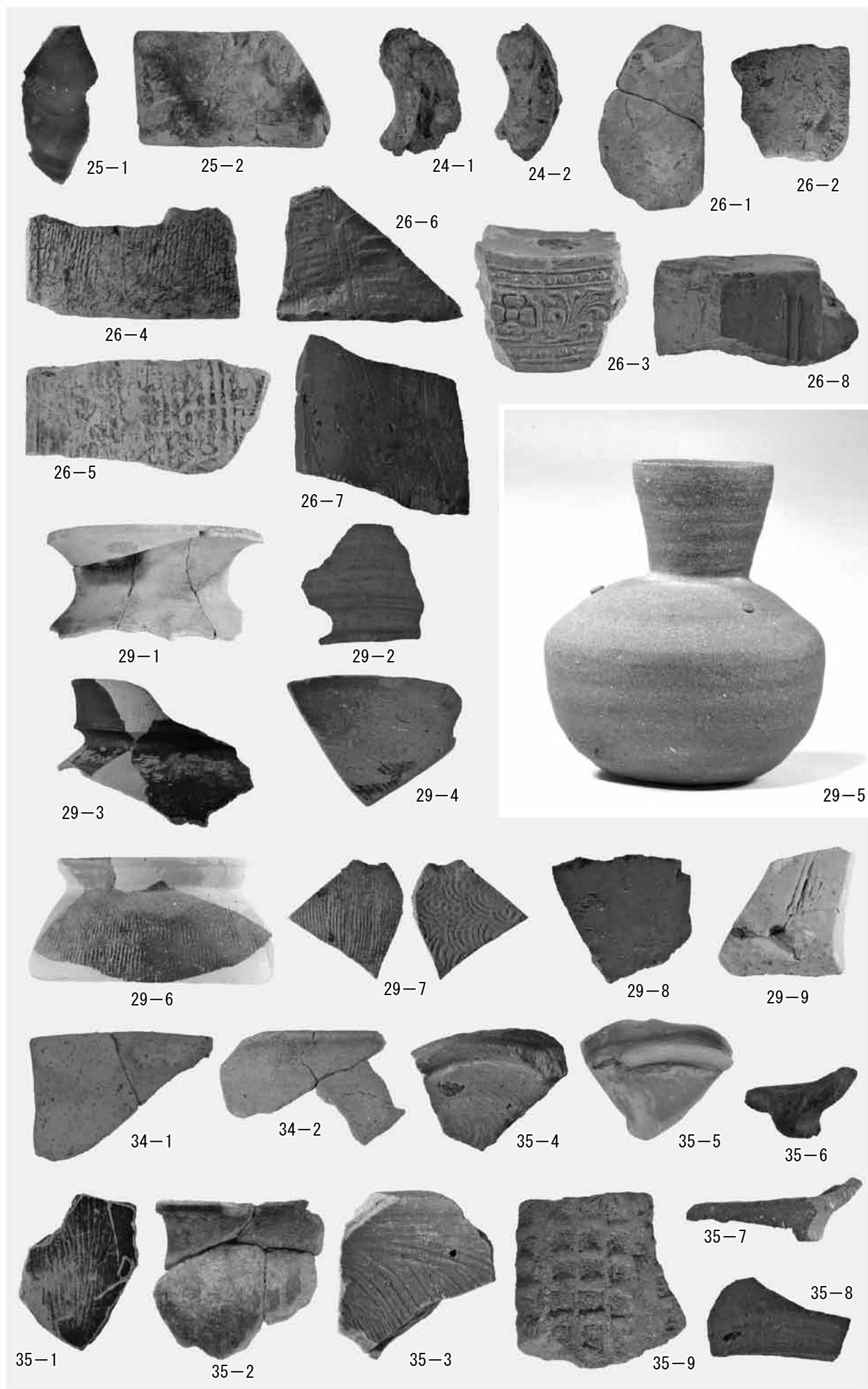


B地点瓦敷遺構（北から）

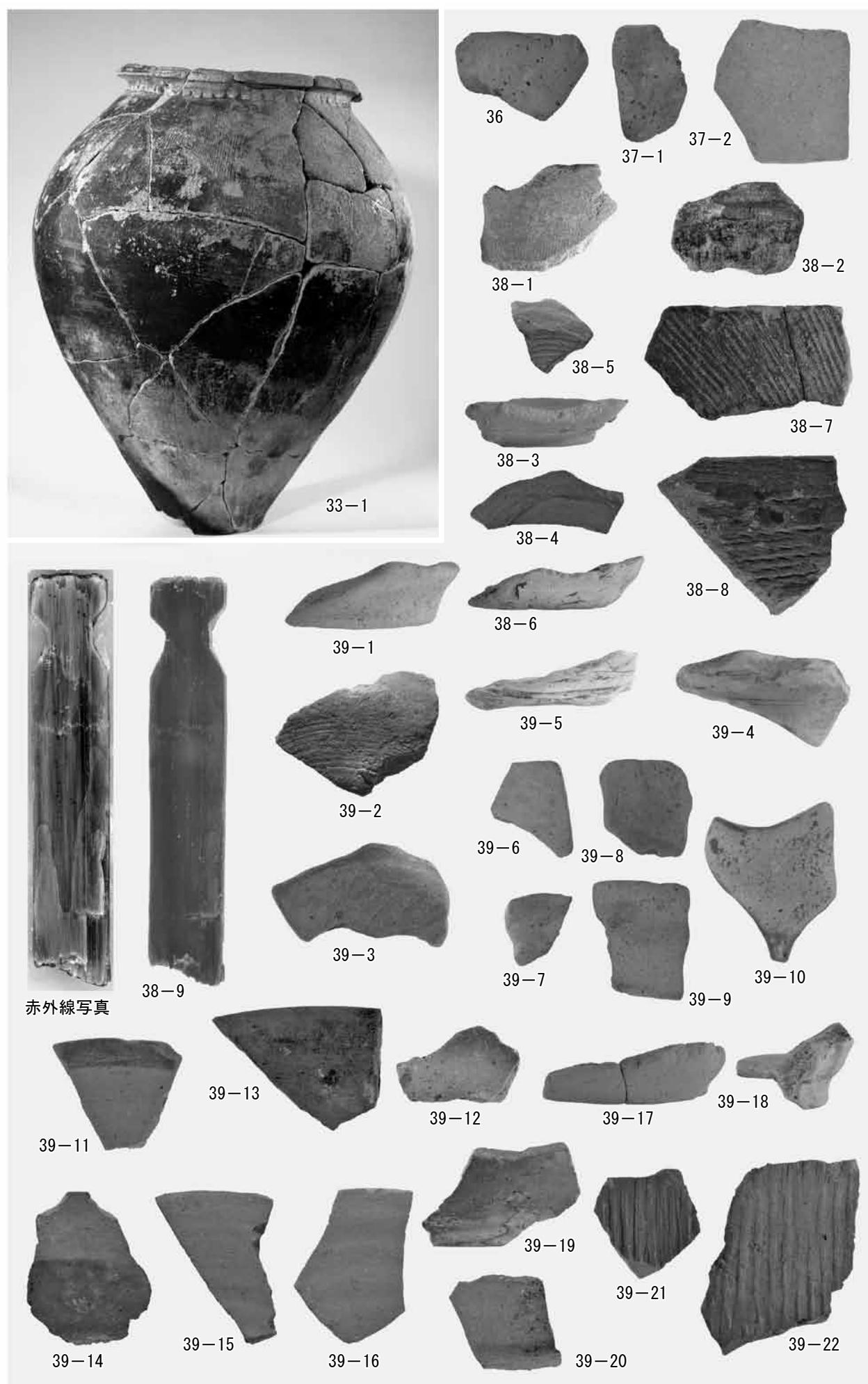


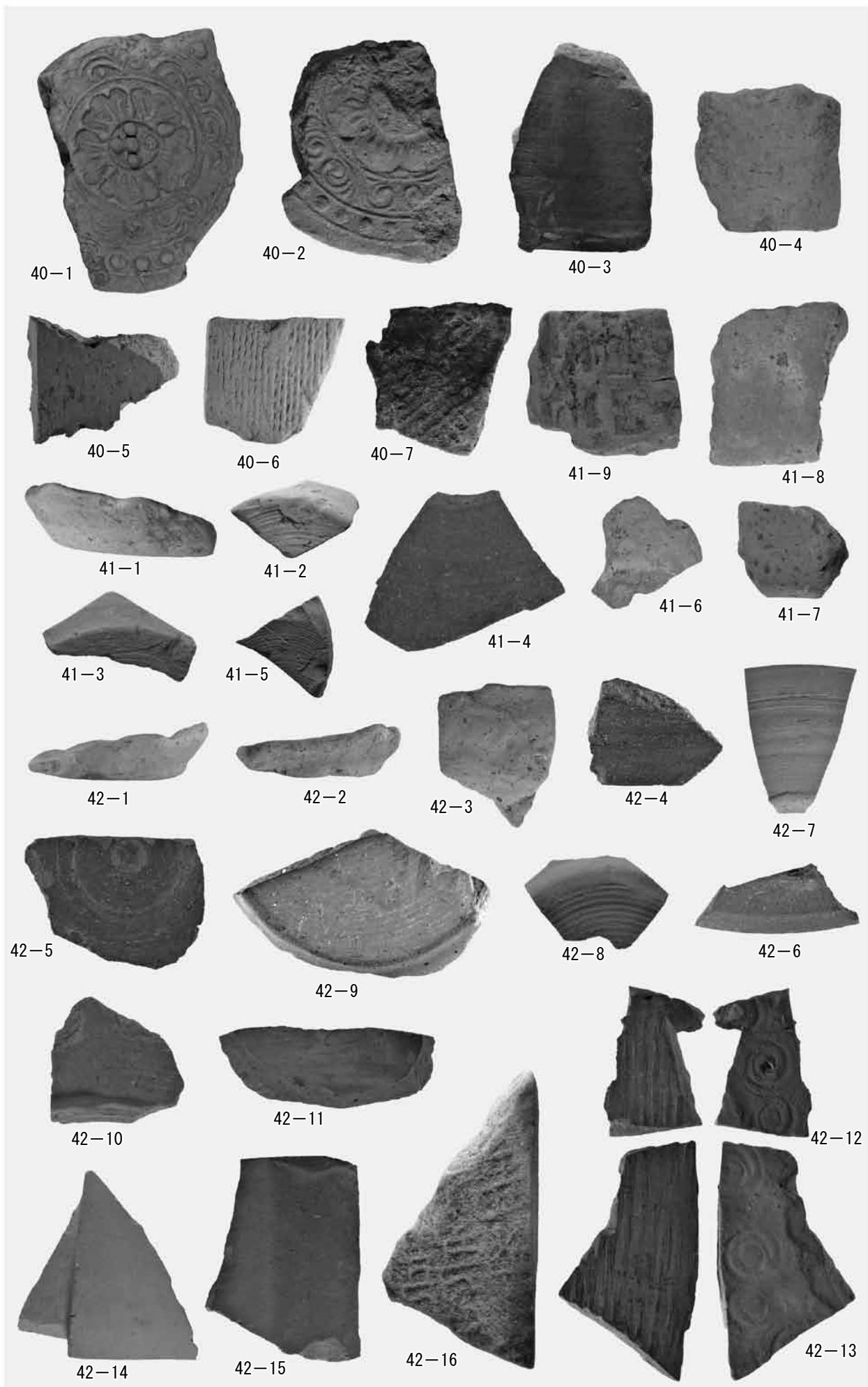
図版12



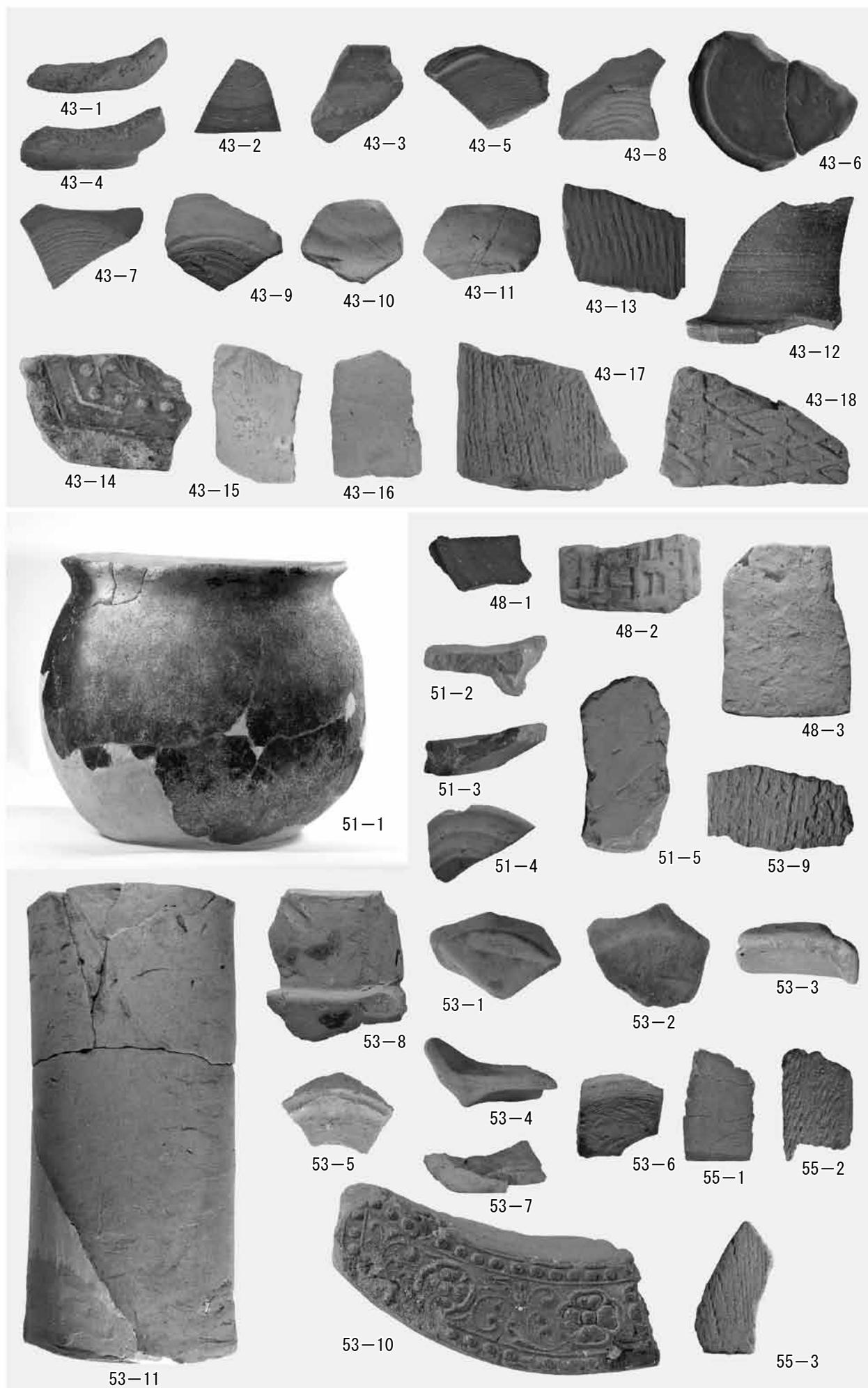


図版14





図版16



# 報告書抄録

ふりがな	やえがきじんじやちくやせんちくやこうくしんせいきどうろ（せいいかつかんれん） じぎょうにともなういすもこくぶんじあとはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	八重垣神社竹矢線竹矢工区新世紀道路（生活関連）事業に伴う出雲国分寺跡発掘調査報告書							
副書名								
卷次								
シリーズ名	松江市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第146集							
編著者名	江川幸子・渡邊真二							
編集機関	松江市教育委員会 財団法人 松江市教育文化振興事業団							
所在地	文化財課 〒690-8540 島根県松江市学園南1-17-24 環境センター2F TEL0852-55-5284 埋蔵文化財課 〒690-0401 島根県松江市島根町加賀1263-1 TEL0852-85-9210							
発行年月日	平成24年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
出雲国分寺跡	島根県松江市竹矢町442-1・453-11他	32201	D229	35° 43' 00"	133° 11' 31"	平成23年3月8日 ～ 平成23年3月19日	43m <sup>2</sup>	道路工事
江分遺跡	島根県松江市竹矢町526・526-2・527・529-3・609・2610-2	32201	D1111	35° 43' 98"	133° 11' 84"	平成23年4月18日 ～ 平成23年7月27日	340m <sup>2</sup>	道路工事
出雲国分寺跡	島根県松江市竹矢町442-1・453-11他	32201	D229	35° 43' 02"	133° 11' 55"	平成22年12月21日 ～ 平成23年4月23日	(工事立会)	道路工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
出雲国分寺跡	寺院跡	奈良～平安時代	国分寺造成土	須恵器・白磁・瓦				
江分遺跡	散布地	古墳時代～中世	粘土採掘坑	土師器・須恵器瓦・木簡				
出雲国分寺跡(工事立会)	寺院跡	奈良～平安時代	瓦敷遺構	瓦				

## 松江市文化財調査報告書

平成24年3月30日

発行 財団法人松江市教育文化振興事業団  
島根県松江市西津田6-5-44

印刷 有限会社 黒潮社  
島根県松江市向島町182-3